大正六年九月十四日第三種郵便物認可・昭和十五年十月五日印刷納本・昭和十五年十月十日發行・毎月一回一日發行・

昭和十五年十月一日　第十輯第二十三號

建築と社會

鄉土建築特輯號

琉球の民家……田邊泰
鄉土色の美……津田藤
建築と鄉土性……小倉强
越前の一古民家……城戸久

鄉土建築座談會

文化再建の四天王寺五重塔に就いて……池田谷久吉

紹介室　鄉土建築雜感、汚水淨化槽、原始的番小屋に就いて
古建築紹介、新建築圖、會報

日本建築協會

——營業課目——

（同系各會社製品）

三星印砂付便利瓦及ルーフイング・フエルト（田島應用化工株式會社）
特許ギルソイド防水工事責任施工（三星產業株式會社）
各種アスファルト應用加工製品（日本岩綿工業株式會社）
石綿代用・各種三星岩綿製品（三星セメント工業株式會社）
三星サイドリユーム施工（床舖材）（鹽釜宮城アスファルト研究所）



大阪田島應用化工株式會社

營業所　大阪市北區中之島五丁目三〇

電話　土佐堀（一三二三番／五六八二番／七六二二番／九二一四番）

倉庫用電話　櫻川一七二五番

受信登錄オウサカタシマオウヨウ

日本建築協會發行

昭和15年8月發行
菊裁判 • 600餘頁

建築關係法規抄纂（大阪府）

●本書は別册市街地建築物法令の姉妹編なり

集錄範圍— 本書に於ては建築關係法規より大約下記標準により關係條文を抄出せり

1、建築物の位置、構造、設備、敷地、接する道路等に關係の條文
2、右に關係ある事項の定義を規定せる條文
3、規則適用地の區域及適用物の範圍を規定せる條文
4、建築に關係する手續關係を規定せる條文

主なる内容項目

工事關係法規
工場關係法規
御陵墓及形像關係法規
銃砲火藥關係法規
危險物品關係法規
壓縮瓦斯及液化瓦斯關係法規
廣告物關係法規
社寺關係法規
貸座敷關係法規
料理屋飲食店關係法規
興業場關係法規
遊技場關係法規
游泳場關係法規
射倖關係法規
宿屋及湯屋關係法規
市場及勸商場關係法規
道路關係法規
自動車關係法規
河川關係法規
防疫關係法規
診療所關係法規
精神病者關係法規
飲料水關係法規
氷雪關係法規
牛乳關係法規
理髪關係法規
汚物關係法規
屠物關係法規
禽畜關係法規
屠場及死畜關係法規
家畜市場及肥料關係法規
墓地關係法規
雜關係法規

その他時局建築關係法規の殆ど全部を掲載す

☆ **定價 • 金貳圓貳拾錢** ☆

但協會員一册ニ限リ　特價　金　貳　圓

日本建築協會

大阪市北區朝日ビル4階
振替口座大阪39975

賣捌 丸善本支店
柳々堂書店

會　　告

十月見學會並例會下記の通開催仕候參加希望の方は至急御申込み下され度候

第　一　見　學

1. **時**　　**十月十八日（金）午後三時集合　　晴雨不論**
1. **集　合　所**　　**一心寺境内**　天王寺區逢阪上ノ町（市電西門又は公園前下車）
1. **見　學　先**　　**（イ）一心寺　（ロ）願泉寺　（ハ）十万堂**　以上三ヶ所茶室
1. **有志座談並晩餐會**

   最後の見學先は十万堂にて午後五時頃終了後同所來山の書院に於て當日の見學につき有志の座談會を催し引續き（支那料理）晩餐會を開く右希望の方は晩餐會費**參圓五拾錢也なるべく振替大阪 39975 番**にて前納せられ度く申込後不參にても會費の負擔は御願申上候
1. **申込及〆切**

   往復ハガキにて晩餐會希望の有無御記入の上折返しの事、但滿員となり次第先着順により〆切申候　（復信ハガキは表裏共白紙に願上候）
1. **見學先概記**

   （イ）**一　心　寺**　（八窓席）

   德川家康茶臼山居陣の頃小堀遠州に命じ造營せしものと云ひ傳ふ、三帖臺目中柱出爐の席

   （ロ）**願　泉　寺**　（國寶薇蕾堂書院、泰慶堂茶室）

   市電勸助町停留所前に在り、伊達政宗の好により建てられたものにて元和元年夏の陣終了後同寺に贈る、四帖上段間附書院と三帖臺目茶室

   （ハ）**十万堂茶室**　（市電惠比須町下車西半町南入一丁）　支那料理店來山

   「涼しさに四ツ橋四ツ渡りけり」で有名な浪華の俳人小西來山が隱棲した十帖の書院と三つの茶室あり、今支那料理屋が借受け來山と號し營業中

   當日は茶室につき調査研究せられつゝある工學士岡田孝男氏に夫々御說明を煩はす事に相成り居り參加者には茶室のプラン等ガリ版にいたし當日配付の豫定に候

本見學は特賛、終賛、會員に限られ候、尙一心寺及願泉寺は佛事等にて俄かに差支へを生ずる事あるやも計り難く豫め御含み置き願上候

第二見學（十月例會）

1. **時**　　**十月二十七日　（日）午前十時半集合　　晴雨不論**
1. **集　合　所**　　大軌奈良線生駒トンネル口　孔舍衛坂（くさえざか）驛前廣場（舊名鷲尾）
1. **見　學　先**

   （イ）中河內郡孔舍衛村一帶に於ける　神武天皇聖蹟に就て浪速考古學研究家八木博氏により現地講演を聽く

   （ロ）生駒神社（伊古麻都比古神社）

   大軌生駒驛にて信貴電車に乘替へ二ツ目の驛一分にて下車驛前約二丁

孔舍衛村　神武天皇難波之碕を過ぎ河内國草香邑の青雲に着き給ひ龍田に越えんとせられしが險路のため再び此村に戻られ東方生駒を踰へ中洲に入らんとせられし時長髓彦の屬兵と此處にて戰ひ給ひし聖地なりと（日本書紀抜萃）

生駒神社　最古の神社の一つとして又建築様式につき珍らしき建物としてかくれたる史蹟ならん？寺社記によれば雄略天皇三年神田を奉り式祭を行ひ天武天皇幣を奉るとあり延喜式大社にして中世後神宮寺と稱し社坊十一院生駒谷十七鄉の氏神にして盛事想ふべしとあり。詳しくは當日の講演に讓る

1. **中　　食**　（辨當持參）

時節柄準備不可能につき辨當各自御持參被下度生駒神社々務所にて湯茶の用意いたし置き候　　【以上見學終了後解散す】

（尙附近にある行基菩薩の墓に詣で又歸途生駒山上より秋漸く深からんとする野草茂れるくらがり峠を經て鶯の名所慈光寺を訪ね枚岡神社に參詣同驛より乘電するも體位向上の折柄又興ある行程かと存じられ候）

1. **申込及〆切**　片ハガキにて十月十日迄御申込被下度

1. **交 通 費**　すべて自辨の事

本見學を以て拾月例會といたし申候

社團法人　**日 本 建 築 協 會**

會勢幹事會幹事長　松　本　儀　八

會　　告

今般用紙節約に關する當局の御内意に依り自發的に他に率先して本月號より廣告專用の頁を極度に減少し、順次全廢に迄到らしむる事と相成申候

就而者會員諸彦は勿論、關係各位に對し種々御不自由御不便有る可しとは被存候へども、時局の重大性に鑑み國策順應の思召を以て御諒承賜度此段及謹告候

昭和十五年十月一日

社團法人　**日 本 建 築 協 會**

建築と社會

第23輯　第10號　昭和15年10月發行

十月號

目　次

卷頭言……（1）

琉球の民家……田邊泰（2）

鄉土色の美……津田鑿（7）

建築と鄉土性……小倉強（9）

越前の一古民家……城戸久（12）

大阪を中心とした鄉土建築座談會……（20）

文化再建の四天王寺五重塔に就いて……池田谷久吉（15）

☆紫烟室☆

鄉土建築雜感……藤原義一（53）

汚水淨化槽……尾龜清四郎（54）

原始的番小屋に就いて……津田鑿（55）

☆古建築新抄☆

有名・無名……藤原義一

☆新建築欄☆

外國：（アメリカ）シカゴのアパート・ロサンゼルスの簡易小住宅
（イギリス）ウエンブレイ市廳舍・コロンボの2戸建住宅・Battersea Parkにある喫茶店

會報……（57）

緒言

我々は現在の我國の狀況を見て國土計畫法の布かるゝ事を待望しつゝあつた。

國土計畫法の目標とする處、その意圖するところは明瞭な事項であつて萬人の意見殆ど一致するであらう。それは丁度住宅を建てるには、採光通風申し分なく能率的で經濟的且保安上も良ろしかるべしと云ふ樣な指導方針について誰も異論のある筈がないのと同じことである。問題はこの要求に合致する設計圖である。住宅の設計圖はさ程困難ではない。それは基礎的な事項も科學的に明にせられ且又多くの經驗の集積がある。國土の設計は然し簡單ではない。要求は明瞭ではあるが規模は大にして進展し行く時勢への彈力性を具へなければならない。しかもこれに對して基礎的な事項も未だ科學的に明にせられず何一つ經驗はないのである。要求は明であり、計畫を實施すべき國土計畫法は布かれたのであるが、最も肝要なる計畫に對處すべき國土計畫學、國土計畫術は未だ白紙なのである。國土は勿論のこと都市計畫法の布かれた都市に於てすら、その發展は從來殆ど自然に、乃ち市民の自由に任せられ來つたのであるが、その發展の裏には必然が支配して居たのであつて、自由な發展の裡に高い能率を得來つたのである。勿論も早時代はこの段階を過ぎたのではあるけれども——悪い計畫は無計畫に劣る——と云ふ言葉は銘記しなければならない。

我々の懼れるのは單に悪い計畫が行はれる可能性のみではない。科學と理論の裏打ちの出來て居ないために立派な法律が實質的に死文となつて無計畫を包攝してしまふ樣な空虛計畫が立てられることも亦懼れるのである。國土計畫それはまことに現在の最高智能をかたむけるべき問題である。—行政官—經濟學者—實業人—土木技術者—建築技術者—そんな小さい區切りを打こえて日本の若々しい叡智を以て計畫すべき問題である。

琉球の民家

田邊泰※

1,

沖繩列島は古く琉球王國として、長い間支那の冊封を受け、一方又薩摩藩島津氏の勢力下にも隷屬し、畢竟日支兩勢力の中間に介在する一小王國としての存在であつたのである。それ故日支兩國の中間的特殊な立場に於て、獨自の文化を形成したのであつた。尤もこの現象は相當古い時代からであるらしく、日支双方の舊記に表はれてゐるのである。然し琉球正史として今日傳へられてゐるものは、比較的新しく、神話・傳說の時代を除けば殆んど我が鎌倉時代以降の事績のみであることに依つても大凡その文化の源は知られるのである。即ち神話・傳說に續く最初の舜天王統の始祖、舜天王は、源爲朝が保元の亂後遂に琉球に至り、大里按司の妹を娶り一子尊敦を生み、この尊敦が後に舜天王となつたと云ふのである。これに依つて見ても琉球に高い文化が植ゑ附けられたのは、大凡鎌倉時代からであると考へられるのである。

又琉球が日本と人種的に同祖であることは既に古くから立證されてゐるのである。琉球の名相羽地王子朝秀（唐名、向象賢）がその記文中に論斷し、嘉永二年彼地を訪れた英艦ビクトリア、同六年のペリー提督、更に明治廿七年には彼地に出張調査せるチエンバーレン博士等に依つて證明されてゐるのである。そして現在では考古學、人種學土俗學、言語學等各方面から、一點の疑ふ餘地の無い迄に明瞭にされてゐるのである。

然し本土を遠く離れて南海に泛ぶ琉球に於ては最初文化の根元は內地と同樣であつたとしても、殆んど交通もなく孤立して過した爲め、その進化は極めて緩漫であり、更に一方地理的、歷史的に本土と別の方向に進められ、所謂濃厚なる鄉土色を發揮するに至つたものであると考へられるのである。

これ等文化に從つて彼地の建築が、又濃厚なる地方色を持つものとして發展してゐることは云ふまでも無い。殊に民家に於てはこの感が深いのである。即ち日本住宅の要素を基調とし乍ら、そのうちに僅か支那的要素を加へ、更に彼地の氣候・風土的要素が多分に加へられて、玆に特殊なる鄉土樣式を形成してゐるのである。

2.

琉球最古の文化として先史時代遺址の存在してゐることは、既に明治三十七年鳥居新藏博士の發堀研究にかゝる中頭郡中城村字荻堂（おんじょう）なる銀岩（なんじゃわ）の貝塚によつて確認され、其の出土遺物によつて我が本土と同樣アイヌ系のものであることが報ぜられてゐるが、それ等時代の住居址に至つては何等知る由も無いのである。然し古くから穴居の傳說は比較的多く、明の宣德五年（永享二年）に來琉した正使紫山の碑記によれば、『巢居穴處の民』と記してゐる所から見れば、當時も穴居の民のあつたことは推せられるのである。然し之れ等は竪穴であつたか橫穴（洞窟）であつたか解らないが、琉球の地質から考へれば、自然洞窟を利用した橫穴式住居であつたと推するに難くない。

更に時代が下つて今日傳へらるゝ古歌謠『兼城（かねぐすく）コエナ』に謳はれてゐる、城塞の建築も、茅葺、篠竹を編み、繩でしばつた極めて原始的な八尋殿・十尋殿として傳へられてゐることから考へても、我が上代の住宅即ち天地根元宮造の外形に類するものが相當長い期間行はれてゐたものと思はれるのである。然し尙巴志王朝以前の察度王朝に於ても察度王はその晩年『高よさうり』と云ふ高樓を築いたとされてゐるから、王宮には相當進んだ建築も營まれたらしい。一般民家に至つては何等傳ふる所は無いが、尙清王の時即ち天文三年に來琉した冊封使陳侃の記錄によれば一般民家の狀を記して、富貴の家二三が瓦葺で、他は茅茨土階にして風飄搖の患に膀へずとある。これ等に依つて見るも一般民家の狀は實に貧弱なもので何等大した發展もなく遲々たるものであつたことが解るのであ

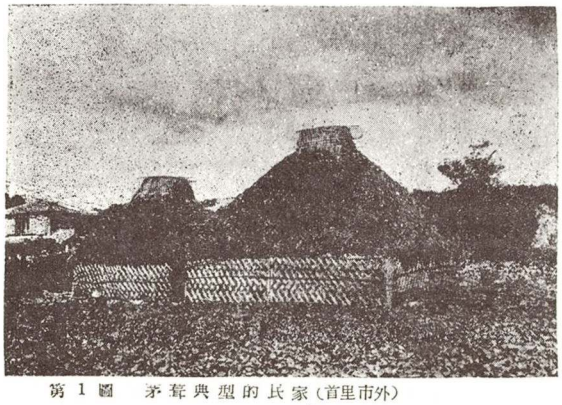
※筆者は早大建築科助教授

る。思ふに産業的發展に乏しい琉球では古來富貴の者の尠かつた爲めでもあらう。然し幸なことに今日の彼地民家は大した發展が無かつた爲め、古くからの傳統を比較的多分に保有してゐるのである。

3.

今日の琉球民家は大小精粗變化はあるが、仔細に觀察すれば、大凡同一形式のものであることは容易に看取されるのである。そして又所謂鄕土色を多分に加へてゐるので、一見特殊な存在の如くであるが、その根本は我が書院造以降の樣式を基調としてゐることが認められ、支那趣味を加へた部分は極めて僅かである。

今琉球民家を階級によつて分類すれば、士族(按司)の家と平民の家との二種類で、前者は規模大きく、後者小規模にして粗末な建築である。尙これ等を建築的に構造別にすれば、先づ屋根の瓦葺と茅葺とがあり、壁は板壁と山原竹(さんばるだけ)を編みて中に藁をつめたチ■ブー壁とがあり、又往々石灰岩を積んだ石壁もある。そしてこれ等のうち瓦葺・板壁のものは上等の建築で、規模も大きく茅葺・チニブー壁のものは粗末で小規模である。更にこれ等を地方的に見れば、都會地は瓦葺・板壁のもの多く、都會から遠く離れた地方には茅葺・チニブー壁のものが多い。



第1圖　茅葺典型的民家(首里市外)

次には屋敷內の配置に就て見るに、一般平民の民家として最も完備せるものは、宅地の周圍に石垣を廻し、その內部には門・ヒンプン・前の屋(めーぬやー)・牛の屋(うしぬやー)・馬の屋(うまぬやー)・大屋(おほや)・井戸・フール・稻廩・アタイ畑・花壇等がある。然し彼地で現在これ等諸施設を完備せるものは甚だ尠く、圍頭郡名護町に於て余はその例を見たに止るのである。

今これ等各々に就て略說せんに、先づ門を入ればその正面には門外からの目隱し即ちヒンプンを設け、その右には一棟の獨立した前(めーぬやー)の屋がある。これは離れとも云ふべきでアシヤゲ(アヤギ)等とも稱されてゐる。これと反對の位置即ち門を入つて左側には納屋と馬の屋・牛の屋等の連續した一棟があり、これは往々二階建となり二階を納屋としたものもある。大屋即ち住居の建物は門を入つて正面にあり、その後方にフールと稱する豚の飼育所を兼ねた便所がある。これは琉球の最も特質的のものである。そしてこの大屋の背後には稻廩



第2圖　瓦葺典型的民家(島尻郡豊見城村)

が數棟あり、その背後にアタイ畑即ち菜園又は花壇等がある。然しこの特徵ある稻廩も現在では廢れ僅かに圍頭郡地方に存在してゐるに止る。

以上のものは最も完備したものゝ實例で、小規模のものにあつては、門・ヒンンン・大屋・フール・井戸位で一家を構へてゐるものがあり、或はそれ以下のものも屢々見受けられるのである。

更に都會地に於ける大規模なる士族屋敷は、これ又前記民家を發展させたもので、壯麗なる石垣・門・伴屋(ともや)・瓦石垣・大屋・前の屋・フール・矢場・井戸等より成り、大屋は特に大規模の建築となつてゐる。

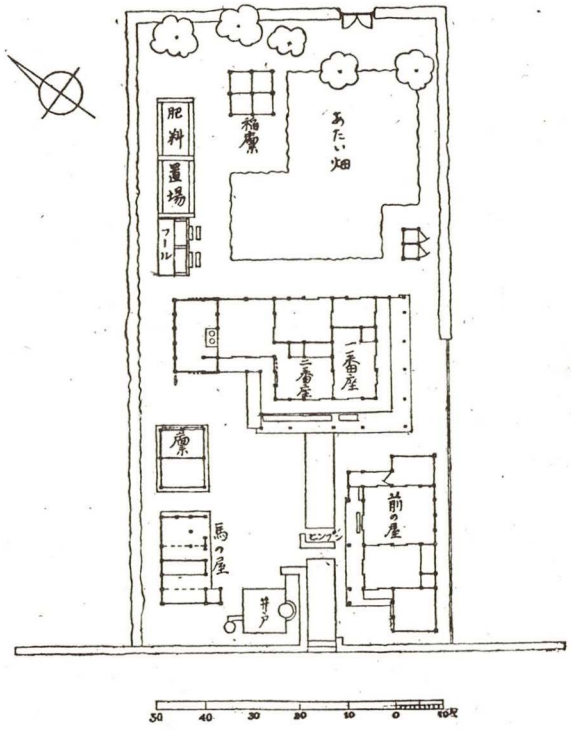
4.

琉球民家の所謂大屋の間取は、我國民家の平面形式としては最も特殊なもので、又古式を持つてゐる點は特に注目すべきである。大屋は大小二棟が連結して一構を爲してゐるのが原則的で、高い方の屋根の下には1番座・2番座が表側に並び部屋境には襖を用ひず中走と稱する板戸が用ひられてゐる。そして1番座・2番座の裏側には奥裏座(1番座の裏)・裏座(2番座の裏)があるのが

普通である。そして小さい方の屋根の下には3番座・傭人部屋・土間等が表側に並び、その裏には道具置場が設けられてゐる。

1番座は客座敷であり、床・棚の位置に神棚（多くは觀音を祀る）と床とを設け、床には軸物を掛ける。2番座は佛間とも稱すべきもので、奥壁全面を佛壇とし、先祖代々の位牌を安置し、甚だ壯麗を極めてゐる。更に3番座は居間とも云ふべき間で、この室の隅に米俵等を積み重ねてゐるのが普通である。そしてこの1番座から3番座までは疊を敷いてゐるが、農家では往々疊を用ひず床板の上に莚を敷いたのみのものもある。土間は米搗の作業場ともなり、奥の方は臺所で甘藷等を煮る竈を備へ、その奥壁には竈神又は火の神を祀つてゐる。

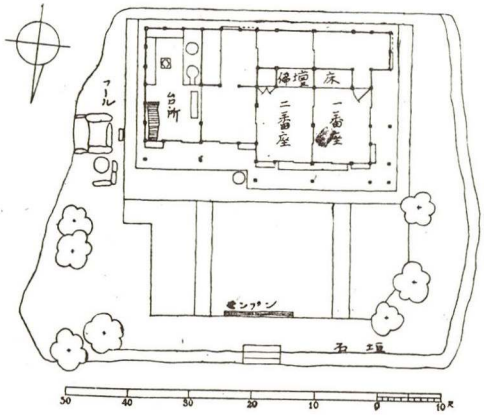
以上は大屋の表側の各部屋であるが、次には裏側に就て見るに、奥裏座（1番座の裏）は貴重品・衣類等を藏する物置となれることあり、裏座2番座の裏）は寢室乃至産室等として用ひられる。そして3番座の裏には往々大爐を切り、茶釜をかけ又は産の時の湯を沸す所とされ、その裏と傭人部屋の裏の細長い狹い部屋とは所帶道具の置場となつてゐる。



第3圖　大城氏宅（國頭郡名護町）

これ等の間取りは琉球民家の最も典型的のものであるが、士族（按司）の家等に於ても大屋の間取りは大凡この形式を大規模とした丈けで八疊・十疊・十二疊等の大室が十二室以上に及ぶものもある。尙この大屋は表側の間の前面及び1番座の側面等には土廂即ち雨端（あまばた）を設け、少し上等のものでは1番座から3番座前面に椽側を設けてゐるものもある。然し玄關が設けられてないのは最も注意を要する點で、來客は直接1番座乃至2番座へ上るのであり、明かに我が往古に於ける住宅の玄關の無い傳統を其のまゝ繼承して今日に及んで居るものと考へられ、住宅史的の興味は深い。

5.



第4圖　某　氏　宅（島尻郡豊見城村）

琉球は地質的に加工に便利な石灰質の石材が豊富であり木材が乏しいにも拘らず、古來木造建築が基調となり、それに終始し、壁や柱に石材を使用した例もあるが、それ等は極めて稀れである。

建築材料として使用さるゝ木材は、彼地が地理的に溫度と濕氣とによつて腐蝕され易く、又蟲害も著しいので普通は槇が使用される。

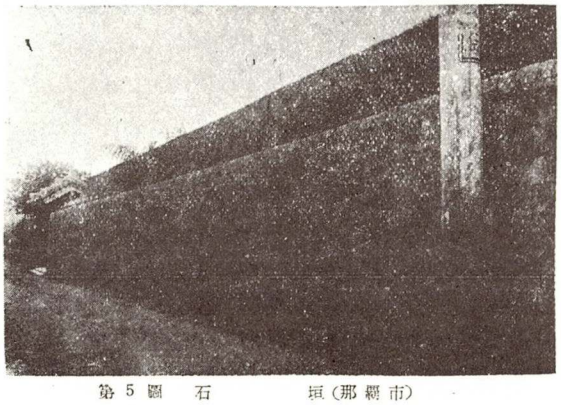
壁材としては內地の民家に見る土壁は暴風雨の關係から使用されず、粗末な民家ではチニブー型と稱する國頭郡地方に產する山原竹（やんばるだけ）と云ふ細い篠竹を數本宛交互菱形に編んで外壁とし、又綱代に組んで內壁とし、この內外のチニブーの間に約1尺の厚さに藁を詰めたものとしてゐるのである。但しこの構造の壁は今日では殆んど農家に限られた感がある。

普通は板壁で、所謂竪板張目板打ちとされ、首

里城・尙侯爵邸の如きに於ても、室內で長押上の小壁迄板張りとされてゐるのである。『中山傳信錄』にはこの狀を『壁旣用レ板、無二粉漫牆一、多用二硏花重粉箋、或白色或白地綠花者一糊レ之』と記してゐるのである。

屋根は農家では茅葺が多く、その勾配は甚だ急である。尙余の實見したもので今歸仁城址附近の農家で蘇鐵の葉で葺いたものがあつたが、これは珍らしい方である。瓦葺は今日一般に行はれてゐるもので、總べて赤瓦、本瓦葺、各々重ね目を白漆喰で塗りつぶされてゐる。蓋し暴風雨に對する設備であるが、彼地の民家風景をして色彩的に濃厚な、南島情緒豊かなものたらしめてゐるのである。然し軒には雨樋を設けず、平瓦の端の唐草瓦は3角形に垂下し、今日支那に用ひられてゐるものと同形である。

琉球民家に瓦が用ひられたのは比較的古く、瓦奉行が設けられたのは大凡360年前である。然しそれ以前は日本々土から瓦を買つたものらしく、『おもろ』にも『大和族のぼこ……瓦買ひにのぼこ……』と謳はれてゐる位である。又一方現在琉球古瓦の殘缺が多數首里城や浦添城址から發見されて居り、それには押型銘文がある。即ち『癸酉年高麗瓦匠造』とあるが、癸酉年は明確にその年代を推定することを得ないが、他の瓦と比較して1部論者の云ふ樣に仁平3年の癸酉年であるならば琉球は我王朝時代高麗から求めたものと云はねばならぬ。兎に角彼地に瓦がたとへ1部重要なる城郭建築等であつたにしろ用ひられたのは相當古いことであると考へられるのである。然し一般民家に於ては瓦葺は舊藩時代は禁じられてゐたので、地方では番所・神社・佛寺位の程度であつた。



第5圖　石　　垣（那覇市）

6.

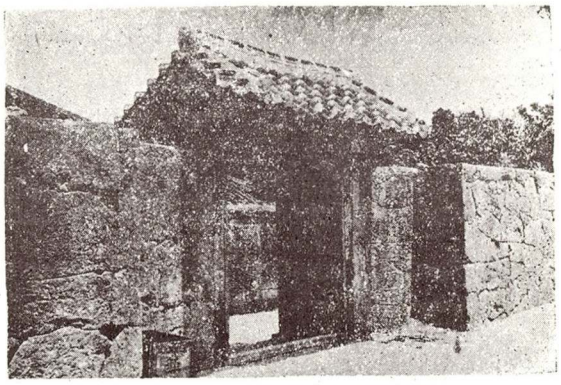
琉球民家はその階級の如何に拘らず、屋敷の周圍には必ず石造の塀を廻してゐるのである。彼地の所謂石垣と云ふのはこれである。これは單に敷地の境界を明確にすると云ふ意味ばかりではなく寧ろ彼地特有の暴風雨に對する防備の施設なのである。そしてこれにも種々のものがあるが、最も上等なるものは首里、那覇等に於ける舊大家に於けるもので、高さ8.9尺に達する立派な石垣がある。『中山傳信錄』中に『圍牆則用二螺石一疊成、首里大家外圍牆磨削一面如二切成一、極堅整』とあるが、事實目地を作らず、木材の接手の樣に複雜に石を切り組んでゐるものがある。

一般農家に於ても直徑5・6寸の石塊を積み平な面を表にし、內外この種石積として內部には黃色砂岩で俗に山石と云ふものを詰め、高さ5・6尺としたものがある。又海岸附近では珊瑚礁を積んだ粗雜な石垣があり國頭郡地方では山原竹を網代に組んで、所謂チニブー垣とせるもの又は防風用として福木を植ゑてゐるもの（中頭・國頭郡地方）又は竹を植ゑてゐるもの（島尻郡地方）等種々であるが、兎に角地理的の必要から暴風に對する考慮は充分に施されてゐるのである。

尙首里・那覇等の舊大家では、外圍の石垣の他に內圍の石垣として瓦石垣なるものがある。これは高さ6尺內外で、下方3尺餘は石垣とし、その上は瓦を小口積とし、目地を漆喰にて瓦の小口と同樣の厚さとし、上に瓦の屋根を設けた一種の築地で、表門を入れば直ちにこの瓦石垣があり、目隱し塀のヒンプンの用をも爲してゐる。

次に表門であるが、門は按司即ち舊士族屋敷にのみ限られて木造屋根付のものが設けられ、一般農家では石垣の1部が切られて居る程度で勿論扉等も無い。そして扉を設けないから道路から內部が見通されるので、門の內部には必ず目隱し塀即ちヒンプンを設けてゐる。これは支那の門內の照壁にも相當するもので、支那的の部分であると考へられる。

舊大家の表門は大凡一定してゐる。即ち切妻造・本瓦葺の屋根を冠し、門柱は角柱で2本と內側に2本の控柱があり、兩開唐戶が設置されてゐる。そして扉の上部の無目の上には貫を通し、外側ではその貫の端に斗を載せ、實肘木で桁を受け



第6圖　宮良氏宅表門（八重山郡石垣町）

內側ではこの貫が桁に繋がれてゐるので、從つて門の屋根の長さが內外で異り、內側の方が長く流れてゐる。

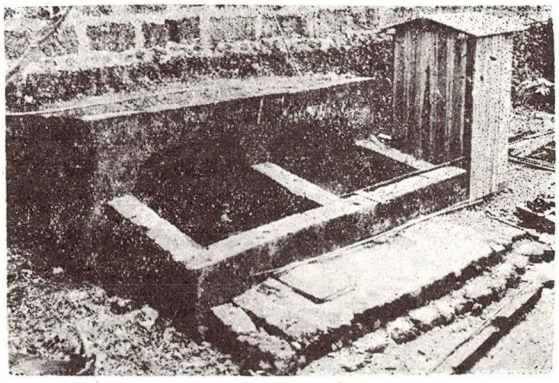
家構としては住居用の大屋に就ては既に述べたので、他に特殊なものとして稻廩に就て一言して置かう。『中山傳信錄』にはこれを米廩とし、伊東博士は高倉とされてゐるものである。その形式は4柱で1室のもの、6柱で2室のもの、9柱で4室のもの等があり、『使琉球記』によれば16柱で9室のものがあるともされてゐる。床を高く地上45尺に設け、壁はチニブー壁で上部が外方に傾斜し、屋根は茅葺で室形造である。そして柱間は4尺乃至7尺位で、今日では大規模のものは見られない。使用上よりすれば稻の刈入れ後の貯藏用の倉庫とも云ふべく、余が稻廩とする所以である。



第7圖　稻　　廩（國頭郡羽地村）

『中山傳信錄』によれば、『藏レ米廩、亦懸レ地45尺、遠望如二草亭一、下施二16柱一、柱間空處可レ通二人行一、上爲二版閣一、官舍皆如レ此、村民或數家共爲二一亭一、藏レ米其中、分レ日守望』とある。往古の官倉も此種のものであつたことが解る。一般に此種の床の高い倉庫は南島特有のものと云ふべく小笠原島に於けるものもこれと類似してゐるが、たゞその型が傾斜せずして直立してゐる所に形式的の相違があるのみで、畢竟民俗的に同一系統のものであることは明かである。

琉球民家に於て更に特質的のものは豚小屋である。尤もこれが單に豚の飼育丈けの小屋としての存在ならば問題はたいが、之れを住宅の便所を兼用してゐるのであるから、民家施設として重要視すべきものと云はねばならぬのである。士族の家と平民の家とを問はず、屋敷內で大屋の裏側か横には必ず石造の豚便所があるのである。フール又はフリヤー等と呼ばれてゐる。多くは2區劃で、



第8圖　豚　便　所（八重山郡石垣町）

大規模のものは數區劃になつてゐるものがある。

1區劃は1坪から2坪內外の廣さで之れに1匹・2匹又時には親子數匹の豚が入れられ後方半分は上方に石造アーチ形の屋根を架し、時には草葺や瓦葺のものもある。4壁は石造で低く、床は石敷で前方に向つて緩い勾配がつけられ尿や雨水の溜るのを防ぐ様になつてゐる。そして前方の低い石壁には23段の石段で上る様になり、この上から豚小屋の內側へ向つて用便し、豚飼料の補給を行ふのである。然しこの琉球特有のフールも最近縣會で便所兼用が禁止され、漸次改められつゝあるののである。

7.

琉球に於ても我が江戶時代に於ける様に、古くは住宅に制限が設けられてゐたのであつて、これが又彼地民家の發展を阻止したであらうとも考へられるのである。

琉球に瓦奉行職が置かれたのは、室町時代頃で

其頃から瓦葺屋根が普及されたものと考へられるが、一般平民は2階建及び瓦葺は禁止されたのであつた。その爲め地方では番所と寺以外は先づ瓦葺は近世に至る迄絶無であつたと考へられるのである。

屋敷の廣さに對する制限は元文2年に定められたものがある。即ち總地頭屋敷は156間角内外、脇地頭屋敷は123間角と定められてゐるから、一般平民の屋敷は更に之れ以下で、甚だ狹いものであつたことは想像されるのである。

又彼地は前にも述べた通り古來建築用木材に乏しかつた爲め、建築用材にも亦制限が加へられたのである。即ち寛文7年の定によれば、一般平民は建築用材として槇・松等を奉行の許可なしに伐ることを禁じ、家普請の時は、山奉行に届出て禁止木の檢査を受けねばならなかつた。そして後には槇・松の他にイークも之れに加へられてゐる。

屋敷の廣さの制限に次いで、家屋の規模に關する制限も定められてゐる。これは疊數に制限を加へたもので、即ち王子・按司は間毎の疊數22疊半以下、脇地頭は16疊以下、平士族は8疊以下、平民は6疊以下と定められたのである。その爲め平士族・平民等は8疊以上の大間を作ることが出來なかつた譯である。そして1戸全體の坪數は家族の人數に依つて定められてゐたと云ふのである。

住宅の結構に就ては、王子・按司・親方（脇地頭）等は本土に於ける書院造風で、四周に石垣を廻し、正面に表門、側面に側門を作つたのであるが、平士族以下は表門のみで、側門即ち通用門を作ることは許されなかつたのである。

尙住宅の間取に就ては王子・按司・親方等の家構では、1・2・3番座、茶間（主人居間）、内原（奥にあつて婦人の居間）臺所等を設けたのであるが平士族以下は2番座迄で、室數も甚だ尠く、元より供屋等の無い貧弱な家構であつたのである。

★　　★　　★

以上で琉球の民家に就ては大略述べたつもりである。彼地民家によつて大凡は推察されるが、思へば長い間地理的に、文化的に、産業的に、弱小王國として、持たざる1地方としての存在であつた。そして生活的に恵まれない孤島苦を耐へ忍び乍ら、そこに打ち立てた彼地生活の記錄は、その民家に最も端的に表現されてゐるのである。

鄉土色の美

津田鑿※

愛すべきは鄉土である。如何なる環境にあつても忘るゝことの出來ないのは鄉土のにほひである。山の色河の流れ森の綠はた又近隣の人々の溫情ひとつとして懷かしからぬものはない。

その鄉土にあこがれのものゝ内に又建物がある。崇嚴極まりなき神社を始め佛閣、やさしき姿で土地土地の特色をあらはす民家の點々たる。或は小川の流れに沿ひたる水車小屋に至る迄美を求むれば限りがない。

歐米の文化は吾々に大なる刺戟を與へた。建築の方面に關しては直輸入のものに大は停車場、銀行、事務所、會館、工場等、小は共同便所に迄歐米風を模倣した時代のありしその可否は別として輸入形式のもの鄉土に親しみあるとは遺憾ながら斷言出來ぬ。そこに、いひ知れぬ不合理が認められる。

それは氣候、風土、周圍の環境の異なる爲當然の結果で鄉土の建築樣式は必ず鄉土色にぴたりと合致するものでなければならぬ。大ざつぱに東洋には東洋的、西洋には又西洋的にふさはしい形式と色彩を持つが原則である。

勿論世界各國の内地勢、風光に我國と一脈の相通ずるものと然らざる處とがある。

スイツルの如きは前者に米大陸の如きは後者に屬するのであらう。

エジプトの建築は何んの理屈もなしにエジプト

※筆者は建田設計監督事務所主

によく調和する。古代ローマの建築はローマらしい。スカイス・クレーパーは米國らしく北歐のものはその所在地らしく感じ、何れも鄉土色濃き形式を持つは事實である。

尤も時のながれに左右せらるゝことも忘るゝことが出來ぬ。和・洋の樣式混合必ずしも不自然ではなく、却つて洗練されたよきものが生じた例もある。

然し特に感ずるは風光、明媚、を誇る我觀光地に建てらるゝものに注意したい。且つ又最近四・五ケ所に出現したその都市にふさはしき停車場の如きは有意義のもので、今後逐次改築の際は歐化を脫し我鄉土色を充分表現するに力を盡すべきものであらう。

國立公園、其の他山水の美を誇る場所に建てらるゝ旅館、運動場を始め特產の物品を捌く賣店の建物に場所と全く不一致を缺くは見逃し難きことにて斯る場所には努めて鄉土色豊かに風致を添へたい。

以上の處に見らるゝ此等の建物の內小數を除いては概して不成功に終つてをるらしい。をしむらくは都會の延長よろしくしかも場末に見受くる俗惡極まる生半可の歐化萬能、こてこてのペンキ塗の時代ではあらざるべく、爲に折角の風致を破毀しあるは美化を深く考慮に入れざる結果である。

斯る場所にこそ、大に鄉土色濃厚なるものを造るべき好機會ではなかろうか。

特に建築に於てその場所場所に見出し得べき永き時代を費し自然に洗練されたる藝術、しかも秀麗にして古雅に富みたる鄉土色の基調を表現したいものである。——（昭和十五年九月五日）——

昭和15年4月發行

建築物强度計算用風壓基準

☆ 定價 35錢
送料 3錢

日本建築協會發行

大阪市北區中ノ島
朝日ビル 電(23)4501
振替口座大阪 39975

賣捌
丸善本支店
柳々堂書店

建築と鄉土性

小倉強※

鄉土といふのは、狹い意味に於ては、人類が諸般の生活を營むにあたつて、共自然現象や、人文現象が純粹に同一である地域をさす。山と山に挾まれた小さな盆地で、5、6戸から數十戸の農業部落がなす一つの地域を考へるとき、其處は地形や氣象が同一條件であり、生產形式として同樣な農業をもち、風俗、習慣、社會制度等の人文現象も同一である地域にちがひない。かやうな地域は從つて純粹な鄉土性をもつてゐる筈なのである。又斯やうな地域は山間の部落のみならず、海岸の漁村部落、或は小さな川の流域に沿ふ部落などにも其例をみるのである。村といふものと、町といふものとが孰れが鄉土性を濃くもつてゐるかといふ事は前述のことで考へらるゝ樣に村の方は、より多く鄉土性を純粹にもつてゐる。何となれば村は農山漁村いづれの場合に於ても、人々は、土地による生產によつて生活をなしつゝあるので、これが先づ同一條件となつてくる。

そして土地よりの生產形式は比較的單一であるから、よく傳統を保持してゐる。我國に於て田畑耕作の形式が100年前と現在と、どれ丈變化したかといふ事を考へると、其に伴ふ生活や、建築の急激な變化はあり得ない。100年以上も經過した古家が部落のなかに數々存在してゐる事は此事情を物語つてゐるのである。町は其生活形式に於て概ね村とは異る。商工業其他農業に非ざる生活形式をとつてゐる、從つて外部との交涉は村に比して著じるしく大きい、言語も風俗も建築もより國際的な色を帶びてくる。田舍の小さい町々に都會風な酒場や映畵館の白壁は、いかばかり異國調のそゝり出してゐるか。自然的には同一條件の下にも村と町とは、斯く鄉土性の懸隔を生じてゐるのである。私は以上に於て狹い範圍に於て、純なる鄉土性について述べた、然るに、もつと範圍を擴げてゆく場合にはいかになりゆくであらうか。

我國のやうな地形の複雜な所では一つの行政上の或範圍、例へば村とか郡とか、大きくしては縣とかに於ては平野あり、山川あり、海ありといふ風に地形が複雜な構成になつてゐる。それによつて氣象も夫々異つてくるであらう。そして其と關聯して山深い山村では、伐木、炭燒等の生活が行はれ、水利豐かな平原では、見事な水田が廣がつてゐる。かやうな廣い地域に於ては到底純なそして同一な鄉土性といふものが、ありうる筈はないのである。

然るにこゝに驚くべき現象は、近世德川氏の藩政時代に於て、夫々の鄉土性を最も發揮したといふ事實である。此時代に於ては藩といふものを政治、經濟、文化の單位として、一つの型をつくり上げたのであつた。たへと地理的な條件が著しく異なつてゐる、同藩內の、建築物でも同一樣式をとり、一見して他藩との區別がついたのである。此の時代では、藩の範圍は大きな意味での鄉土であつた。封建制度は、文化の同類性に於ては驚くべき制度なのである。藩と藩との境界一線を隔てゝ、建築樣式が異なり、言葉さへ異つてゐる現象が現在に於ても發見される事は、この藩制がいかに根强い現象であつたかが思はれる。

建築上の例については、自分が住む東北地方について一、二を述べてみたい。「南部の曲家」といふ農家の形式は、舊南部藩（今の岩手縣）に今でも行はれてゐる。母家から矩の手に大きな厩が突出してゐるので外形上、曲家となるのである。此厩は母家の前側面にあつて最も日當よく、且つ馬の管理の行屆く位置にある。舊南部藩に於ける馬產奬勵の結果が、此建築樣式を生じたものであらう。而して此「南部の曲家」の分布狀態をみるに、舊首府盛岡をはじめ、他藩との境界線に至る迄よく分布されてゐる、仙臺の伊達藩との境界であつた今の岩手縣稗貫郡までは、曲家は見られるが、一步仙臺藩であつた今の岩手縣膽澤郡に入ると、曲家は見られなくなる。郡と郡との境界は地理的には何等特別な境界線があるわけではなかつた。

※筆者は仙臺高工建築科敎授

此相隣れる二郡が建築様式を異にする事は、藩政の影響と見る外はない。又同様に現在、青森縣に屬する南津輕地方の一部に曲家が入り込んでゐる事は、こゝは舊南部領であつた事で說明が出來るだらう。藩政時代に於ける行政範圍が、明治維新の廢藩置縣の際に境界線に多少の變化をみた事は人の知るところである。

今は岩手縣に屬してゐるが、もとは仙臺藩であつた地方もある。今は岩手縣人もあつてももとは仙臺藩の人もあつた。岩手縣の水澤町出身の故齋藤實子爵は、故里へ歸省の時は必ず仙臺に立寄つて舊藩主伊達氏の墓參をかゝさなかつた。こんな次第であるから鄉土建築殊に民家の系統分布を調べる場合には、縣別では不都合であつて、少くとも舊藩別としなければならない事に屢々氣附くのであつた。廢藩になつて既に七十年にもなるが今にして藩を單位とした鄉土性が各方面に根强く殘つてゐるといふ事は心にとめて置かねばならない事柄で、所謂鄉土建築なるものゝ一つの標準を與へてゐるものである。

然し同じ藩內に於ても夫々の事情に從つて多少建築上にも相違は生じたのであつた。一例をのべると、岩手縣の平泉から一關にかけて宮城縣境まで、農家の屋根が、東向の方が大きな入母屋造になつて格子のある大きな破風がついてゐるのが特色である。片入母屋屋根と名付けてよからう。これは比較的新しい發生と思はれるが、これが宮城縣に入ると（北邊を除いて）此形式が全く無くなるのである。此地域はもと仙臺藩內であつたが其中の田村藩といふ小藩に屬してゐた。そこで此片入母屋屋根の形式は此田村藩の奬勵であるかといふ事も考へられるし、更に平泉に影響を與へた京文化が永く此附近に殘されてゐるといふ考方もあらうと思ふ。又仙臺藩の南邊にあつた支藩、片倉藩は今の宮城縣刈田郡の大部分を占めてゐた。ところで此舊片倉藩內にある民家の形式は又少しく他と區別されるものであつた。

間取は所謂廣間型であつて座敷の部分は、おかみ、料理の間、ざしき、などの名稱がつく。「料理の間」といふ名稱は他では聞いた事はない。ところが仙臺附近の民家では間取は所謂田字型となつて、なかま、茶間、でゐ、などの名稱がつく。斯う觀察すると、大藩といふ鄉土單位の中に更に小藩といふ小さな單位を考へてゆかねばならない。ともかく藩といふのは大きな鄉土單位であつた事は著しい事であつた。

鄉土といふ意味を更に押ひろめて、東北地方とか四國地方とかいふ範圍にひろめて行つた場合、其鄉土性は一層不純になつて行く。「東北地方の鄉土建築の特性」といふ問を出されたならば、自分はあまり多く答を出す事が出來ないのである。東北地方の農村に於ては冬季寒冷であるために、1年の內少くも4ケ月は、土の生產を休まねばならない。從つて農家1戶當の耕作面積が1町4反歩となり、他の地方に比べるとかなり多い。宅地の面積も大きく、しかも宅地利用が行屆いてをらないし住宅も大き過ぎて却つて能率維持に缺點をもつてゐる。

汽車の窓外からみた農家の姿も何となく垢拔けがしなくて陰鬱の感をさへ抱かしめるものが多い。これらは氣候的素因と、其に伴ふ經濟上の不振等の原因から來てをるのである。東北地方の寺院や神社の形式に、せいがい造（出桁を出して軒裏天井を張つて軒出をさゝへる形式）が多いといふ事を聞いてゐる。これは一見、垂木造に比較すると、いかにも生硬な感である。大きい雪の重壓を支へるためには、こんな構造法は最有利であつたかも知れない。生優しい軒構造や棟飾は、雪國にとつては禁物であつた。斯んな風に東北地方の鄉土建築の特色を拾つてみたら少しは數え上げる事が出來やう。

更に一步進んで日本といふものを鄉土と考へる場合に、一層其特色は不明瞭となつてゆくのである、そして現代では、純粹性を失つて仕舞つてゐるから種々雜多な建築現象から、日本的な特色を選出してゐるに過ぎない、その選方は主として過去の歷史からとり出してゐるといふ事は即ち過去の日本が鄉土性をよく保持してゐたといふ證據である。

以上の意味から云ふと最初に述べた狹い鄉土、純粹の鄉土は實に現代に生々として息付いてゐるものであり、これこそ純粹の鄉土性をもつてゐるものと云へよう。

私はこゝに一轉して鄉土建築の價値について話を進めてみやう。

ドイツに於ける鄉土建築及聚落學の權威として

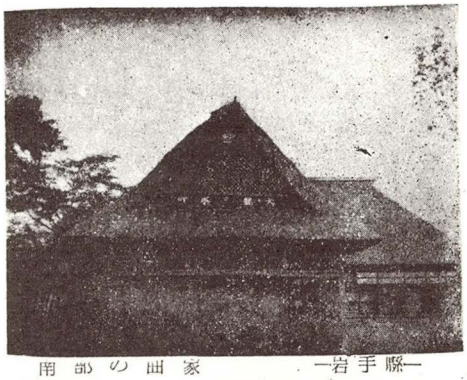
知られてゐる、ミールケ教授が工科大學に於ける講義目の內に、農村聚落及農家の風景形態、鄉土保護の歷史及職責等がある。

私は日本の大學に於て此種の講義がない事を悲しむものであるが、それ丈に鄉土建築の價値に就ては考察が進んでゐないものであらう。鄉土建築又は其集合體であるところの鄉土の村落や町をみる時に於て、世間では往々、「田舍」の意味に於て輕視し、馬鹿扱にする場合が多い。なるほど、大都市に比すれば極めて貧弱であり、文化の上からも第三流以下になつてゐるかもしれない。然し乍ら鄉土はその文化が低級であらうと、どうであらうと、共存在の意味を有してゐるのである。こゝに一つの小さい部落を例にとつてみる、5、6戶から2～30戶の住家と、氏神としての神社が附屬する。佛寺は、數部落に共通して設けられる。そして是等の聚落は種々な條件の下に相集合する。

住家は一見して無統制な、配置のやうに見えるけれども。實は彼等の生產場面であるところの田畑との連絡を出來る丈緊密にした位置が考へられてゐる。川沿の扇狀地部落では、川の氾濫をさけるために出來る丈小高い所を占居してゐるし、防風に對しても、其地形をよく選び出してゐる。公の集會所の無かつた時代には、夫々の住宅が集會の役目を果してゐたし、村祭や祈願は氏神の社前で行はれなどして社會生活は、これで一通り滿足に行はれてゐたのである。近來農村の機構の變化より、共同作業場、產業組合、農業倉庫、診療所などが普及されるやうになり、農村の建築も稍多彩になつてきた。村の氏神の建築は、まことにさゝやかなものではあるが、其まわりに立つ神木は、數百年の老木であつて、遠い祖先からの、つながりを示してゐる。村祭の日には、この境內が村の大運動遊樂の巷と化する。相撲場、神樂の舞臺が開かれ笛太鼓の音は部落から部落へと響いてゆく。神社の建築は茅葺の小さなものであるが、然し所謂鄉土大工か渾心の腕を揮つた作であらう。江戶時代末から流行をきわめた冗漫な彫刻が盛られてゐて、それも村人にとつては新鮮な感覺である。斯うみてくると此小さい部落は機能も形態も調べてゐるのであつて充分存在の意味を有してゐる。よく田舍を廻つて寺や神社の建築を見る人は、江戶時代末の煩惰な手法に厭氣をさす人が多い事であらう。全く洗練された秀れた建築を見なれた人にとつては、此田舍臭は見るに堪えないものであらう。然し、其鄉土にとつては、かつて淸新な建築風であり、村人にとつても憧れの對象となつてゐるなれば、それで存在の價値は充分存するのである。世間の識者は從來あまり形象の問題にのみ捉はれ過ぎてきた。美術上の價値がなければ名建築ではないとする考方は、田舍の建築を大概無價値にして仕舞ふのである。從來民家や鄉土建築が認められなかつたのも此故であつた。もつと目を廣く見はつて、單に形象の問題からだけでなく、材料も構造も、あらゆる機能の方面からも此鄉土の建築を見なほすなれば、意外の價値を見出す事であらう。

自分は此邊で話を打切るが、鄉土建築は決して過去の建築ではない。今盛に息を吹きつゝある建築である。鄉土建築は田舍の建築ではない。最も純粹に共鄉土性を發揮してゐるものである。建築學の對象として、これ程純なものはない。大都市計畫が叫ばれて村落計畫が忘れられてゐる。國土計畫が叫ばれて、鄉土計畫が忘れられてゐる。

大建築がとり上げられて鄉土建築が忘れられてゐる。　　(15・8・25)



南部の曲家　　—岩手縣—



神社と部落集會所　　—宮城縣—

越前の一古民家

城戸久*

1

去る昭和11年 9月、丸岡城天守を調査に出かけた際、里人より丸岡町を去る約 8粁福井縣坂井郡竹田村字上竹田に古く千年屋敷と言はれるものがあるのを聞き、歸名の時間に追はれ乍ら寸暇をさいて調査に出かけた。丸岡より竹田川の溪流を縫つて峻嶮8 粁の山峽であり、往復の時間のみに、甚だしくかゝつて、肝腎の建物を詳しく調査の餘裕がなく、惜くも單なる見守に終つて了つたが、それでもやうやく平面のスケツチは採るを得た。越前の民家は石原憲治氏の日本農民建築第 8輯に2~3は紹介されて居るが、坂井郡のものは無いし更にこれはこの地方の古遺構と思はれる點に甚だ價値の多いものがあらうと考へる故に、心もとない次第であり、最近の調査でなく恐縮であるが、この機會に紹介しておいて今後同學の士の詳しい



1. 坪川但馬氏宅 南面外觀

調査研究を更に得られるならば幸せと思ふのである。

2

問題の家は村内きつての舊家で當主は坪川但馬氏、家には先祖の由緒書が保存されてある由で、筆者の出かけた後、大阪朝日新聞福井通信部員の訪ねた處に依ると坪川家由緒書と稱するもの 2巻あつて一には「坪川但馬者元北面之侍多利云々」とあり、他は後世の補足と見做される様であるがこれに北面の武士坪川但馬が故あつて北國に下り現地から北方6 粁の豐原にしばらく住み、現在の竹田村の溪谷にうつりこの地を拓いて田畑となし家を建て農業をおこしたと記されて居り、又補足書には「傳云源三位頼政之孫」となつて居る由である。この種の由緒書は江戸時代の僞作と見做すべきものが多いので、どれ程まで信じて良いかは甚だ疑問であるが、筆者は實際に披見して居ない故、今の處何とも言得ない。然し家の構造、乃至は材の仕上げその他より見れば相當年代を經た古遺構である點は頷かれ、兎に角この僻地に於て相當古くから續いて居る家柄であることが解り、近隣の村にまで千年屋敷の名で傳稱されて來たのである。

3

外觀は 1圖の如く妻入でその堂々たる入母屋の茅葺はさすが由緒ある家らしい風格を與へて居る越前には妻入の多いことは既に諸氏の指摘せられて居る處であるが、これを平面的に見ると、縱長の平面をそのまゝ横長に置換へ、入口のみ附け換へると丁度尾張平野等の古い民家に見られる平面と別段の相違がない。多く入口が南に向くことになつて居るから、從つて家は東西が開いて居ることになる。椽側の如きも西に附いて居る。日本の民家は南北に開いて居るのが常道であるのに、北陸方面の妻入民家はかく東西に開いて居るのは何に起因するものであらうか。

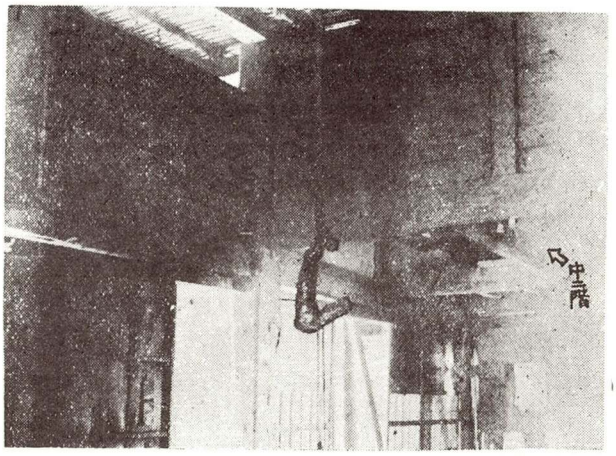
横長の平面を縱長に向き換へたのみであるから構造的な理由は見出し得ない。恐らく氣象的な條件に依るものであらうか、或ひは甚だ古い土俗的な傳統に依るものであらうか。今早急にかゝる問題は決すべくもないが、少くも興味ある問題であ

※筆者は名古屋高工建築科教授

る。その他この家の入口の手法は仲々巧に出來て居る。即ち圖にも伺はれる様に引戸が二重について居て、平常は一方のみ引いて用を足し特に農家であるから巾廣いものでも運ぶ様な場合は二本を總て引込めば開口部は 2倍になる仕組である。今日の住宅にも利用すれば便利なこともあらうと考へられる。

平面は 0圖の如くである。入口を入つて土間があり、その奥が板間で中央に爐が切られてある。板間の奥は 7.5帖と 6帖、更に奥に10帖の佛間と 8帖の座敷とがある。この平面型は一見石原氏の分類に依ると整型であるが實は奥の10帖と 8帖は近年增築せるもので、元は 7,5帖と 6帖に佛壇、床があつた様である。かくすればこの平面は同氏の原型の平面となり、少くも整型よりは原始型を示して居る。なほ土間の流しの前は現在では低い板張として居るが、これも近年の改造で以前は總て土間であつた。この土間の一隅から天井裏のツシに上り得る様になつて居て、ツシは 2圖に一部見られる如く竹を敷き並べ、筵を敷いて物置として居る。特に注意をひくのは鴨居からツシまで相當の空間があるから板間の西半分はこゝに中に 2階の如き様なものをとつて居て、板間の一部からハシゴで上れる様になつて居る點である。 2圖で中 2階が伺はれる。この處は現在では物置にして居るが、もとは寢室にも使用したとのことで、言はゞこの家はツシと共に 3階建になつて居る様なものである。白川村の數階建は誰れしも知らぬ人としてないが山一つ越えた越前のこの家が、かゝる處に中 2 階を持つて居ることはこれ又興味をひく處であらう。これ等の中に何等かの關係が求めばつきさうである。そしてこの家がそれだけに古い形態をとゞめて居る様に思はれるのである。

構造法は主柱と見做すべき、ものがあつて、平面圖中特に太く印しておいた柱である。何れも太い柱で、外柱に於ては外壁通りに立たず、內部に入込んで居るのが注意される。西側南側に於ては半間、東側では一間入となつて居り、それより外は下屋となつて居る。筆者はかつて尾張の古民家を調査した際にも、建築年代の古いと認められるものは總てかゝる構造をとつて居ることを指摘しておいたが、（建築雜誌、昭13.12） 越前のこの家も全く同様であることは日本民家の間取の發生が、當初一張間の架構から、下室に依つて奥行が增大し、やがて中央に中柱が出來ると云ふ過程を

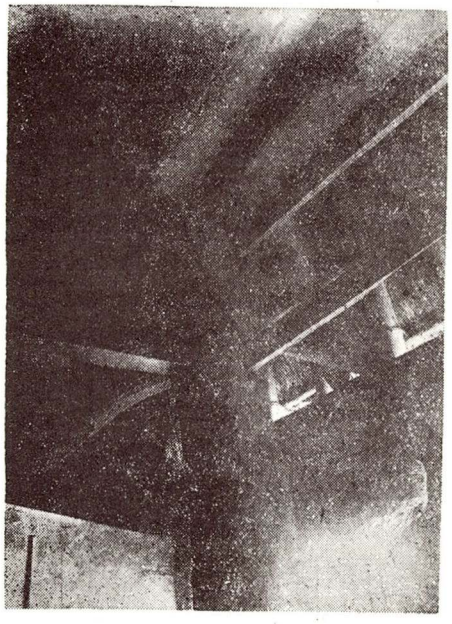


2.坪川但馬氏宅　板間上部中二階

經て來たものと考へることに更に一の資料を附加してくれたものと思つて居るなほこの家の構造上特に古式を殘して居ると思はれるのは角柱の自然木を用ひて居ることである。3 圖は東南角柱の上部を示したもので西側の便所傍の柱も同様である。奥の 8帖側柱も恐らく同じと思はれるが、この部分は後に天井が張られて居るから、確とはしない。さて 3圖に見られる様にこの柱は屋根の隅を受けることになつて居るが、柱の位置が觸れて居るから、普通ならば餘程複雜な構造にならねばならない處である、然るにこの家では自然木の枝をうまく利用して、頗る簡單に解決して居るのである。即ち東西方向の桁は柱上で受けるが、南北方向の柱通の母屋は東西の桁より上方に納るものを、柱から出て居る枝が直接受けて居ることになる。從つてこの母屋を受ける束の類は全く省略されて居る。この様に古い民家では自然木の枝を構造的に利用して構造の單純化を計つて居るのは應々見聞される。かつて飛越國境の一民家も枝付の柱を使つて、桁の長さを調節して居たのを見たが、（住宅昭、15.2）この家は角柱に利用して利用して居る處面白く思ふ。かく甚だ幼稚な原始的構造をとつて居る處より見てもこの家の建造年代が相當に遡り得るものではなからうかと考へるのである。

この家の古さの具合は又、材の仕上けよりもあ

る程度認められる。3 圖で伺はれる様に柱も鴨居も荒くチヨウナで削りとられたまゝで、所謂臺鉋は何處にも使用されて居ない。殊に土壁は全く使

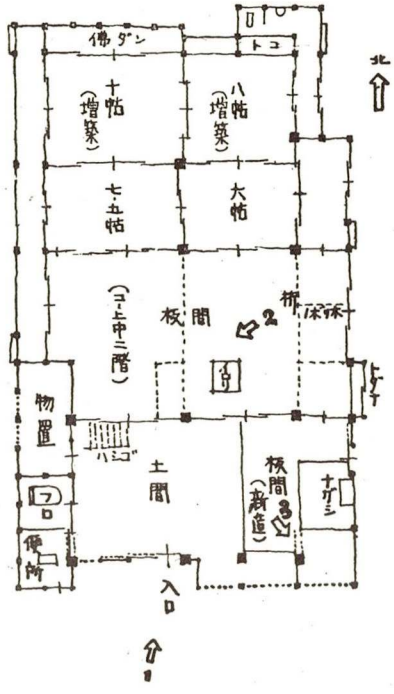


3. 坪川但馬氏宅　東南隅柱

はれず、荒く削りとられた板壁も古調である。今は、長年爐の煙にいぶされて漆塗のやうな光澤を放つて居るのはことのほか雅趣に富んで居る。只 3 圖の中柱に見られる様に、柱に雜多な柄穴様のあるのが、氣にかゝるので壁がついて居たか古材を轉用したか種々一應の考慮はして見たものゝ穴があまりに雜多で、簡單には解決出來なかつた。他に何等かの理由でかくなつたものかも知れないと思ふ。なほこの家の古さは建具からも認められる様である。平面圖で見られる様に 1間半の開口はもとより 7.5帖と板間境の如き 2間の開口も總て板戸 3枚で 1板につき 1本づゝの溝を持つて居ることである。これに對し後の增築部分や、板間の西側の様に後に改められた處は、今様に 4本引となつて居るのが對照される。桃山時代の書院の遺構を見ても建具 1本に對し各溝 1本が設けられてあるのであるから、これは古い民家として當然であらう。かくすれば前にも書いたこの家の入口の板戸の構法は巧みな考へと言ふより古式そのまゝを傳へて居ると見做してよからう。今様に 2本溝に建具を 4本引くことは少くも相當新しい江戸時代頃から初まつたものであらうか。

4

調査が不充分で、なほ構造的に詳しく紹介することの出來ないのは遺憾であるが、以上あらまし記述したことに依りこの家は相當建造年代の遡る古遺構であるあることが解ることゝ考へる。家傳に云ふ北面の武士や源三位頼政頃まで遡るかどうかは甚だ疑問ではあるが、こうした家傳史料もある以上一應詳しい調査を必要とする事であらう。近年民家の研究は甚だ盛んであるのは眞に欣ばしい限りであるが、民家は後世の改變になる部分が特に多いものであるから、それ等を一應檢討して平面なり構造なりを研究する必要があらう。又建造年代の新しいもの程種々の事情で古い傳統が消滅して居るものと考へられるから、未だ大榮のたゝないわが國民家建築の發達を究め様とするならば、先づ何をおいても建造年代の古い遺構に依る調査が早急に必要であると思はれる。然るに民家の古遺構を探し求めることは容易でないのであつて、既に紹介されて居る各地の民家も特に建造年代の古いと言はれるものは尠少である。



坪川但馬氏宅平面圖
(矢印數字は圖版寫眞撮影位置)

この意味に於て茲に單に所在地を紹介する程度に多少の解說を附して私見の一端を述べたのである。幸にして同學の士の詳細な調査報告に接し度いものである。

(昭 15.8.24)

文化再建の四天王寺五重塔に就て

池田谷久吉※

はしがき

お城の石垣と天王寺の塔、浪速名所を代表するもので俗謡の文句にまで用ひられるほど有名である。之は單に建築物としての存在のみでなく大阪の信仰を代表するシンボルであるからである。昭和9年9月21日　一瞬に脆くも哀れ朝夕我等のなつかしの塔はその巨軀を大地にブツ倒して終つたのである。思へば文化10年に生れ出てから臨終まで僅かに128年を一期として夭折した不憫な兒であつた。だが四天王寺建立の聖徳太子の御精神は燦として輝き溢れ再び我等の眼前に雄々しい姿を大空に仰ぎ見ることの出來た今日の日誠に喜ばしき極みである。

殊に四天王寺に關する研究は筆者また因緣深くこの一文を草するのも決して通り一遍の感傷的な立場からではない。此の秋に當り倒潰した文化の塔の在りし日の面影を古いノートから摘出して記錄して見たい。

沿　革

四天王寺創立當時の事情や緣起等は今筆者は之を避け、五重塔に就てのみを略記することにしよう°

創建以來1350年を經たとは言へ四天王寺の建造物ほど幾度かの受難を經たものは餘り他に類例がない。

五重塔も今回昭和の再建まで罹災の數5回に及び建築の度數6回を重ねてゐる、其の災害は雷火が二度、兵燹が二度、風害が一度といふが如く實に四天王寺の沿革史は災害史ともいふべきである。

然るに何時もながら當時の當事者が幾多の難業苦業の精進を經て再建を成就した有様は誠に血と涙とに綴られた悲壯な哀史であることを忘れてはならぬ。

第1回

◇日本書記推古22

元年癸丑(1253)是歲始造四天王寺於難波荒陵

◇續後紀

承和3年丙辰、(1499)塔廟雷火にて破壞

第2回

◇續後記

承和4年丁巳(1497)「木壺銅壺勅納」之は恐らく再建であらう。

◇寺誌、攝陽群談

天正四年丙子(2236)織田信長伽藍に放火し寺領を沒收す。



第1圖　四天王寺文化五重塔坤の隅より撮影

第3回

◇寺誌、攝陽群談、義演准後日記

應長5年庚子(2260)伽藍落成

◇寺誌

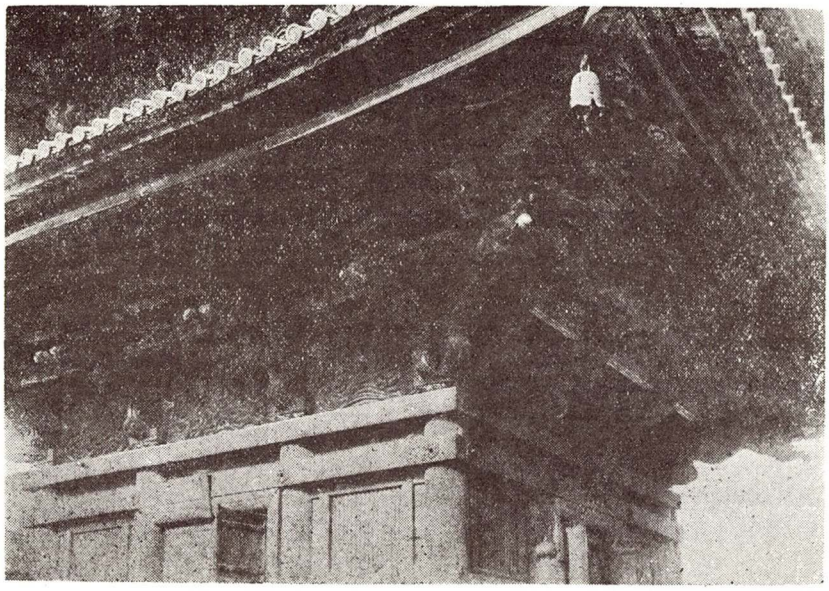
元和3丁巳(2275)德川家康伽藍に放火す

※筆者は池田谷建築事務所主・大阪府史蹟調査委員

第 4 回

◇大日本史料

天和 3年丁巳（2277）幕府攝津天王寺を造營せ



第二圖　第一層軒裏詳細

んとす。

◇寺誌

元和 4年戊午（2278）徳川秀忠命を下し伽藍再興に着手

◇大日本史料

同年9月21日斫始

◇調査書、四天王寺由緒沿革記

享和元年辛酉（2461）雷火の爲め伽藍燒失

◇攝陽奇觀　卷之43

同年辛酉（2月21日改元）

1. 12月4日夜八ツ時、四天王寺燒失

其夜小雨降り雷鳴出し雷火大塔の三重目坤の間に落夫より金堂にうつり諸堂37棟(錄)回錄す翌5日朝四ツ時頃火鎭まる

諸堂再建積書之覺

1. 五重塔　銀　934貫46匁9分

第 5 回

文化9年（2472）申2月28日　五重大塔九輪鑄初

1. 同10月5日五重大塔柱立
1. 同10年酉正月23日大塔眞柱建つぎ
1. 同8月2日大塔入佛

◇同　卷之45

1. 11月21日　淡太郎死

四天王寺伽藍再建世話人島之內白銀町淡路屋太郎兵衛といふ紙屑問屋行年54歲、翌22日八ツ時葬式天王寺へ送る

法號　本法院

天王寺境內回廊に木像を安置す

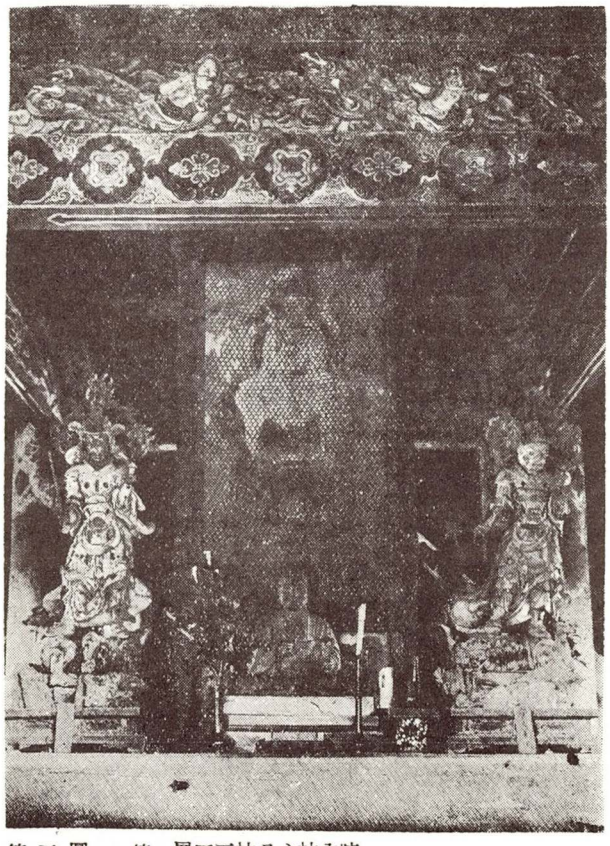
◇同

口　上

此年ひがん御志御寄進被下五重大塔一重目出來致候大悅に奉存候今年もひがん御志相かはらず大阪中一とうに御寄進御賴申上度御社旁參上仕候　以上

酉　正　月

此書付ひがんのせつ御



第三圖　第一層四天柱及心柱內陣

持參被下候御方様仁王門江あげ候切手に相成候

四天王寺　役者講中

天王寺五重大塔再建の爲天王寺講中大阪町中を相頼み二季の彼岸に近隣へ配る志の茶の子物を勘略しその料を天王寺へ寄進致させ候此寄錢も夥しき事にて大塔の益と成たり

◇調査書、由緒沿革誌

文化 9年壬申（2472）伽藍落成

◇四天王寺年中法事記諸堂間數

寶塔　京間3間5尺4面

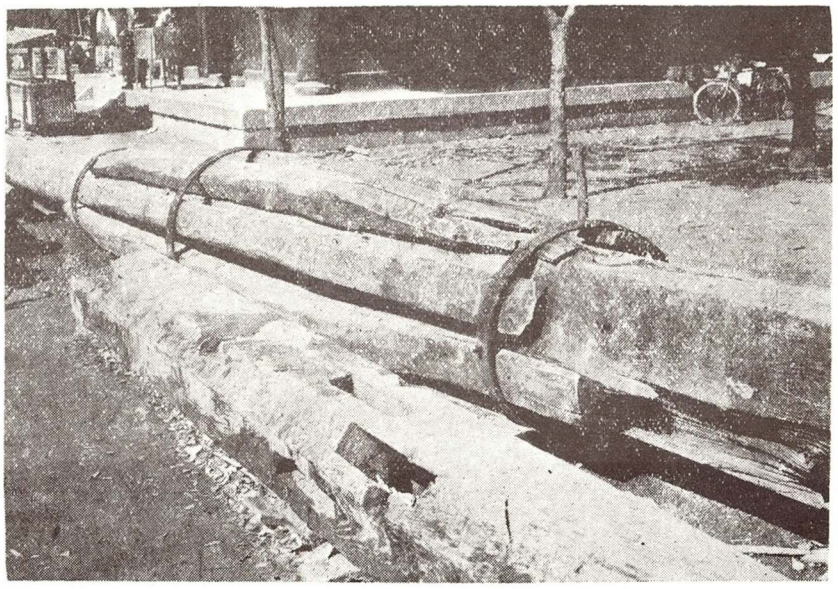
◇攝津名所圖繪大成

卷之5

平時大塔斬初文化9年申2月26日、九輪假建同3月25日　二重目上棟文化10年酉正 月 10日三重目上棟　同2月25日、四重目上棟同4月15日、五 重目上棟九輪同5月28日

◇和漢三才圖繪 74攝津五重塔雲水造也 有 釋迦畵像、四天王木像

◇昭和9年(2594)9月21日　午前8時20分大暴風雨にて五重 塔 倒壞す。



第四圖　倒潰心柱繼手

五重塔各部構造

平面、方3間（24尺4）古い記錄には京間3間5尺4寸となつてゐる。中の間 9尺1. 脇間7尺95. 之は創建當初からの位置に數度の改築に遭ひながらも飛鳥明の古制をよく嚴守し高麗尺に換算すると21尺になる。

基壇方 42尺4. 高3尺6. 束石を用ひず花崗石を以つて壇上積とし各面に一ケ所宛巾8尺3踏面9寸3四級の耳石附石階を附け、葛石上に鑄銅製擬寶珠附勾欄を折廻してゐる。

礎石は凡て花崗石製側、四天柱其何れも最小一邊2尺 5より最大4尺までの不等邊形をなしその上部を平面に仕上げ柱座を作つてゐる

心礎は方 4尺3 高さ2尺、地上に8寸上り、中央に深さ6寸7. 方6寸の凹穴あり頂部方 8寸3. 下部方6寸厚 1寸8の石蓋あり、その穴の中央に佛舍利を奉安してゐる。

舍利容器は框座、數茄子、壺、寶蓋、露盤、寶珠からなり、壺は水晶であるが池は銅製である。

外廻り初層各面中の間は棧唐戸外開き軸吊り、飾金物凡て鐵製、同半格子兩脇間竪角連子窓嵌込み。

上層中の間扉なく、兩脇間連子窓、四方濱椽刎勾欄附、側柱、圓柱徑1尺75. 外廻り地長押、半長押、腰長押、中の間幣軸方立腰長押、下羽目板張上長押臺輪の上に和様大斗を頂き一種獨特の繪様肘木（俗に雲水の肘木）を架し雲肘木を通し其の上に斗及繪様肘木を以つて軒桁を支持してゐる。

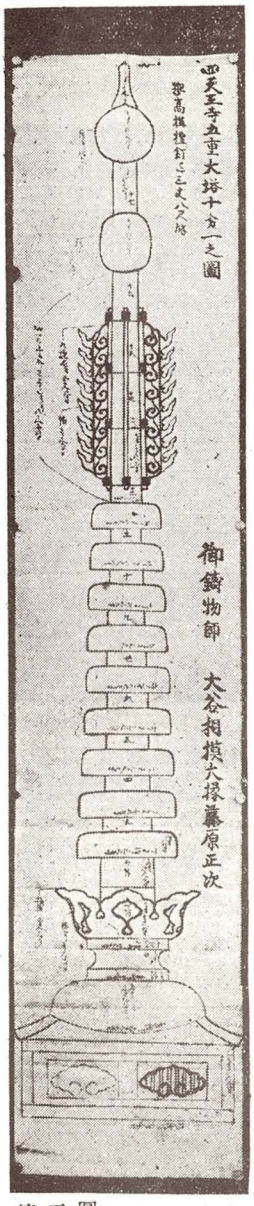
小壁羽目板は全部雲水の彫物、尾棰鼻は象之頭を彫刻してゐる。小天井、支輪を缺き板蛇腹を附し、棰を用ひず、軒裏は雲文、渦卷文の浮彫を以つて充滿してゐる。地長押、腰長押は唄、上長押には六葉の釘隱を附し下層より上層各隅々には風鐸を吊り、以上の彫刻物は凡て極彩色を施してゐる。實は建立の際は板羽目に極彩色を施しそのまゝ一度仕上げたのであつたがその後彫刻物を附加した事が今回の倒潰によつて明かにされた。

內部四天柱徑 1尺96を用ひ四天柱內を佛壇とし心柱は徑下部2尺4凡八角形頂部徑6寸5丸太材、途中 3本繼ぎ、礎石の上に立ち上部に向つて減縮し

相輪心柱に通つてゐる。下層は、床より天井迄箱包みとし四面共佛畵を描き金網張としてゐる。

天井、內陣は鏡天井、外陣は板違格天井、床は拭板張北面扉際より木梯子を取付け五層直通し、一般人を昇降させてゐた。

屋根は本瓦葺、降棟、稚兒棟附何れも鬼板を附し、乾隅には三面大黑天の鬼板を附け、銘文に「文化十歳癸酉桃月吉日細工人阪口又兵衛」と刻してゐる。



第五圖
九輪設計圖

相輪は青銅製であるが露盤は鐵製である。大谷隆義氏の祖先の製作にかゝり、總高梅檀釘迄38尺餘あり、寶珠に左の鐫銘がある。

觀音施主　日和佐屋卯兵衛

天下泰平

十一面觀世音 8萬4千體　供養塔 國土安穩 世話人　金物屋中

大阪高津在

大谷相模掾正次子孫

鑄物師棟梁　大谷惣兵衛賀晴

四天王寺

維時文化十龍集癸酉穩2月彼岸善法日

之によつて見ると寺誌では文化 9年落成となつてゐるが文化10年に落成したことが正しい様である。

心礎下の特種構造

心礎の直下に內徑 2尺75外徑4尺高さ2尺の凝灰岩製井戸側（半月形組合せ）様のものがありその內部から素燒製釋迦如來座像 874體、木彫藥師如來立像 5體、同聖觀世音菩薩立像2體、地藏菩薩1體充塡安置され、井戸側の四周には4個の花崗石を取り繞らし井戸側と心礎との間は4寸のスペースがある。

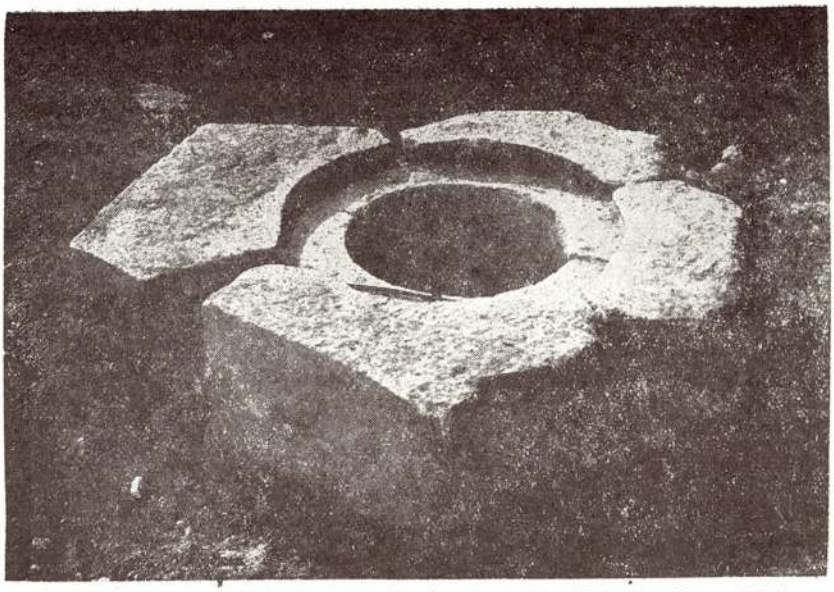
井戸側の直下には內徑約3尺6外徑約 6尺、即ち約2尺4の木炭層が深さ約11尺位もあり、その內部は赤土と和泉砂岩石自然石とで塡められ、その石は1個の大きさ最大2尺5寸最小8寸位のもので11尺の間に5段となり、上部より1.3.3.5.9と次第に數を增して置かれその下に直徑約 6尺前後の礎石が据えられてゐる。之等の構造及目的に就ては宿題として後日に讓り兎も角も計畫的に構造された此の空洞はかの法隆寺五重塔のそれと共通するもので舍利奉安施設と密接な關係ありと考へるに充分である。

結　語

筆者の幻影に映ゆる文化の五重塔は之を藝術的價値より推すには餘りにも貧しい存在であつた事を甚だ遺憾とするものである。例へば柱間に對する高さのプロポーションの不均衡であつた事、屋蓋の屋根勾配を描くの實々鈍重な線、九輪、裝飾、彫刻凡てが德川時代の行き詰つた墮落した樣式のものであつた等が擧げられるが之も時代思想の反映として致し方がなかつた、然し之等は塔本來の意義と價値には影響のないことで、聖德太子の御聖旨をそのまゝに忠實に維持、保存し浪速の人士の信仰を獨り聚めて來たことは偉大なる功績であつた。こゝに四天王寺の生命は永遠に不朽であり不滅である所以である。

此の塔の設計、施工に當つた技術家は金剛家であり正大工與八郎、權大工太平治の手によつたものである。

また大壇越淡路屋太郎兵衛の財產悉皆を喜捨した事は餘りにも有名である。が全信徒の合力になり使用材料の見え隱れの個所には寄進者の法名が餘地なき迄に書き埋められてゐる。然しながら當時の寺及一般の經濟力が極めてて微々たるものであつた事は五重塔にも影響して敢なく倒潰した原因の大なるものとなつた事を忘れてはならぬ、即ち當初の設計には四天柱徑2尺3が 1尺96に、側柱徑1尺92が1尺75に設計變更され使用材も松、杉、檜欅等種々のものが混用され其の質も良材ではなかつた。事實柱の根元の腐朽せるものさへあつた。また古材等も隨分多數再用されたらしく「再建入



第六圖　心礎下の井戸側と心礎臺石（心礎はこの四個の臺石の上に乘つてゐる）

用大概書」によると「但燒殘建具釘金物等總而用立候品者相用積立申候……右積方之儀者惣諸堂社習姿之木品者悉檜木榧方御座候處此度者松木多分取交可成省略仕積立候儀に御座候」と明瞭に記されてゐる。

次に力學的方面より見て重心の位置が高く極めて不安定であつた事もまた看過出來ない問題である。

最後に建築技術家の一部の人々の間には五重塔は地震や風壓には倒潰しないものとする說もある樣であるが事實は天平以來幾度かその例を殘して來てゐるのである。



第七圖　心礎下井戸側、第六圖圓形の中央井戸側周圍の四個の臺石を取り外したところである。二個の石からなりこの中に本文記述の樣なものが充滿してゐたのである。

大阪を中心とした鄉土建築座談會



——出　席　者——

池田谷久吉氏（大阪府史蹟調査員）　井上新二氏（大阪府建築課長）

江崎政忠氏（鴻池組理事）　高橋榮治氏（鴻池組技師）

瀧澤眞弓氏（神戸高工建築科教授）　玉置豊次郎氏（建築院督官・大阪府建築課）

高安六郎氏（高安病院長）　鶴丸梅太郎氏（ベニス工房主）

南木芳太郎氏（上方鄉土研究所會員）　藤原義一氏（姫路市技師）

松本儀八氏（內外木材常務）

（以上50音順）

岡田孝男氏（本協會編輯幹事）　政岡基次氏（本協會編輯常務）

龜井幸次郎氏（本協會編輯常務）

挨　　拶

政岡　是から鄉土建築に關する座談會を開催致します本日は大へん暑い所を又お忙しい所を諸大家の御參堂を得まして誠に有難うございます。是から岡田さんに司會をして戴きまして始めることに致します。

岡田　では私が進行係を務めさして戴きます。

建築協會で「建築と社會」と云ふ雜誌を發行して居りますが今日の座談會はそれに載せさして戴くつもりで開催した譯であります。實は此の前ののでこ相談の時に今迄大分堅い記事が續きました編輯のゝらで一遍息を拔いて鄉土建築を主題にして編輯して見たらどうかと云ふやうな提案をして見ました。處がそれではお前やれと云ふことになつて私が引受けてやることになつた次第であります。

暑い時でもございますので大體半數位しか御出席願へないだらうと思ひまして、實は少し山を掛けて御招待申上げたのでありますが、丁度お盆の時節で皆さんお宅においでになつた關係、又鄉土建築に趣味を持たれる方が多かつた關係で澤山御出席戴きましたのは主催者として大へん喜んで居る次第でございます。建築の專門以外のお方で御招待申上げました高安先生江崎先生南木先生此の御三方は科學、文學、行事風俗共の他百般のことに曉通して居られましてお1人に物を聽く會をやつても一晩位は優に時間の要ると云ふ風な趣味の廣いお方であります。御三方とも御出席をいたゞきまして大へん結構だと思つて居ります。鄉土建築と申しますと、其の定義とか範圍と云ふものがまだはつきりして居りませぬ。それは何れ後程瀧澤さんにお話を願ひまして、定義、範圍と云ふ所を決めて戴きたいと思ひますが、先づ皆さんの御解釋通りに、或は鄉土建築の今迄記錄にありますものとか、或は現存のもの、それらの保存方法とか、或はどう云ふ所を建築家が研究しなければいかぬかと云ふ御指示を戴ければ大へん結構だと思ひます。

初めに高安先生にお話をお願ひ致します高安先生は皆樣御承知でございませうが、醫學博士でお醫者樣の方が本業でゐらつしやる。御本業は勿論のことでありますが其他文學、科學、百般のことに曉通して居られる方であります。一つ御高說を拜聽したいと思ひます。

大阪の町家

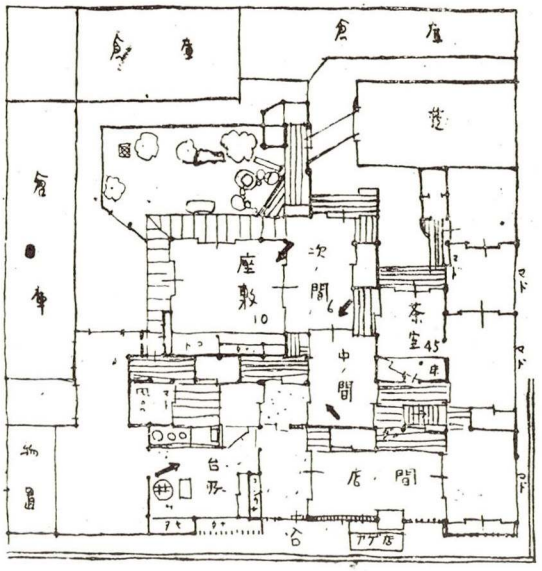
高安　實は今の御紹介に甚だ恐縮して居ります。殊に建築の方は御返事申上げたやうに一向不案內で、今日お伺ひするに就いてどういふ事を調べて來て申上げようかと考へて見ましたけれども、どうも一向好い材料も見つかりませぬ。まあ出て見たら分るだらう位のなまくらな氣持で出た譯であります。

それで初めから話せと云はれて甚だ閉口しますが、我々から見て是が大阪の特色の鄉土的名建築であると云ふものはないのか知らぬと私共には思へます。京都とか奈良とか言ひますと、誰でも常識的に分つて居りますが、殊に斯うふ新しい町であるし石山本願寺以來400年位のものであり、且又出來てからでも燒けたり色々なことがありまして建て直つて居る。殊に近來は大阪の町がビジネスの中心になつて、特色のある立派な日本建築物が殘されて居りもせず、又是から拵へると云ふ餘地もないのが普通のやうに考へられます。ですから自然お話しする材料が甚だ少いのではないかと思ふのであります。唯私は大分老人の方でありまして江崎さんの方が少し先輩だけれども、さう云ふ關係と、又大阪で生れたのでありますから、私等の知つて居る舊い家の模樣でございますならお話が出來るかと思ひますので、それを1つ2つ申上げて見ませう。唯所謂遼東の豕で私が此町に生れて住んだり見たりしたものが、果して他の市でもさう云ふ風に出來て居るのぢやないか、そこの所ははつきり分りませぬ。唯大阪の舊い家、住宅はこんなものだと云ふお話をして見ようかと思ひます。

町家の平面

極く大雜把に申しますと大阪は商賣人の家が多いので、どうしても單純な構へになりますが、舊家の大きな家になりますと、町と町との境に水道がありますが、其の境まで突き拔けて居る家が多い。さうしてそれは大體斯う云ふ風になつて居ります。初め入つた所に玄關がありまして、或はそれが店の間でありますが、其の玄關の次に內玄關と稱する小さい小ぢんまりした間がある。少し上等なお客さんが來ると其處へ招じる、さうして其

の次が勝手ですけれどもそれは勝手の次の間のやうなものです。それから本當の臺所になる。其等には竈や何かがあります。其の次が裏になつて居る。さうして是がすつと表から通つて居る。先づ臺所が割合に廣いことに氣が附きますが一番氣が附くのは、臺所の勝手口を入りまして、臺所の上を見ると、うつばりと申しますか、梁の太いものがすつと縦に通つて居る。大きな家程それに隨分立派な材木が使つてある。天井は張つてない。さうして場合に依ると、例の八方が附けられてゐる八方と言ふのは御存じでせうが、今日では吉田屋位に殘つて居ります。大きな灯を點けるもので、今日で言へばシヤンデリア、昔で言へばお燈明の大きいやうなものですが、それが眞中に吊らくつてあると云ふ工合です。



三　休　橋　酌

代表的大阪の民家の平面圖

先申しましたやうに家は突き抜けて居りまして、大抵其の構へが2重か3重になつて居ります。今申しましたのが1重ですが、2重になると、玄關から入つた所が茶の間で、茶の間より表にやはり庭が1つあります。茶の間の次が奥の間、それから奥庭がある。是が2重の家です。それからもう1つ長くなりますと、奥庭の次に離れがある。さうして藏がある。藏はどうせ1番奥にある。それから若し3重になりますと茶の間の次が、其處の家族の人が居る部屋とか寢室とか云ふもので、それが2つ位ある。さうして3重目が奥になると云ふ並び方をして居ります。それからもう1つそれの變形とも思はれるのが露路構への家です。是は伏見町なんかに今でも多少殘つて居ります。茶室式の家で露路から入つて行くと大抵内らは庭になつて居る。さうして茶室があり、次いで奥があり、即ち座敷、客間があつて、却て臺所が奥になつて居る。是が1番簡單な家で、それがもう少し大きくなると中庭があり、離れがあつて2重になつて居る。其處の慶明莊なんかはさうなつて居りますが斯う云ふのが能くあります。

高安博士の家

今我病院のある處は、明治13年に父が其處に移りまして、それから私もすつと何十年も其處に暮したのであります當時多少改築はしたらうと思ひますけれども大體は昔の儘の家であつた。建て方は今申しました3重の構への隨分大きな家でした。臺所なんかは素敵に大きい。丁度20疊近くありまして庭の漆喰場はなかなか大きいものです大體舊家は臺所が隨分大きいのでありまして江崎さんも御承知でありませうが、鴻池さんなんかのお家は素晴らしいものであります。それから庭が非常に廣く取つてありまして、3重目は奥庭敷で、20疊敷位もつと廣いかも知れませぬ。それを表の庭がDの字型にすつと表から裏へ續いて居りまして、殆ど⅓位が庭になつて居り、其奥には藏が2つ並んで居る。さう云ふやうに大抵の家は藏が後3に並んで居りますから、今日でも靱今橋と高橋の間にある浮世小路などは、丁度大きな家の後ろ合せになるので、藏がすつと續いて居つた。何でも東堀から西堀までの間に藏が120幾つあつたとか云ふことが記錄に載つて居ります。今日はさう餘計ありませんが、さう云ふ藏ばかりで靜かだから2號邸を置く。或は怪しい家が時々あつた。そんなことで浮世小路と云ふ名前が出た譯です。是は南木さんが能く御存じだらうと思ひますが（笑聲）北船場邊の家は多くさう云ふ風になつて居ります。今日は月斗君が見えませぬが同君が能く知つて居ります。此の先生の家は2重と思ひますが、表を切られまして、多少變つて居りますけれども、舊い家の1つの標本的なもの

であります。それから私の姉の家が瓦町にあります。是は明治20年頃に建てたものでありますけれども、相當舊い形式を採つたものでありまして、庭を餘計取つて、2重になつて居りますが、多少違つた舊い形式と見るべきものであります。

斯う云ふ舊い形式の家は段々なくなつたやうであります。此の間谷町の5丁目邊でしたか、玉造線より少し北へ入つた所ですが、其處の家へ行きました處ちよつと變つて居りまして、やはり舊い家ですが、初め一寸したとつ附きの間があり、內玄關があつて奥になつて居るけれども、其の庭が內玄關のわきから始まつて、奥までズツと庭で取り圍んで居る形式になつて居る。何年頃に建てられたか知らぬけれどもかなり古い家らしいちよつと珍しい建て方です。隱居の積りで建てたのか知りませぬが落着きを持つた珍しい家でした。其の外にも探したら、もつとあると思ひますが。和泉町の鴻池さんの家なども如何にも舊家らしい家だと思ひます。

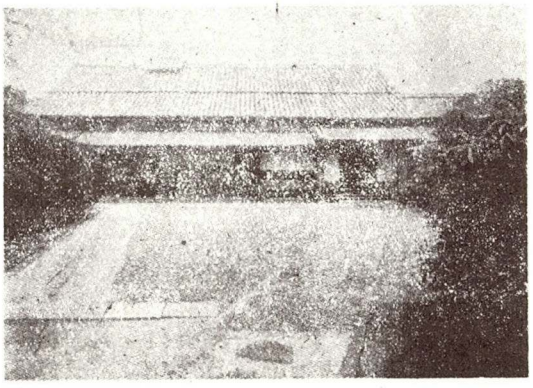
岡田　それでは江崎先生に鴻池さんのお話をお願ひしたいと思ひます。江崎先生は林學の方が御專攻でございます今鴻池さんの理事をして居られますが、百般のことに深く研究を積まれ科學、美術、文學、總てのことに曉通して居られる。

私お尋ねしたいのは、大阪では棟の建築を致しますが、それは昔からさう云ふものでありましたのか、どう云ふ譯でさうなつて居りますかと云ふやうなこと、それから鴻池さんの關係でお茶室の古いものが、どう云ふ所にどう云ふものがございますかと云ふやうなこと、其の他色々お話を承りたいと思ひます。

鴻池家の建築

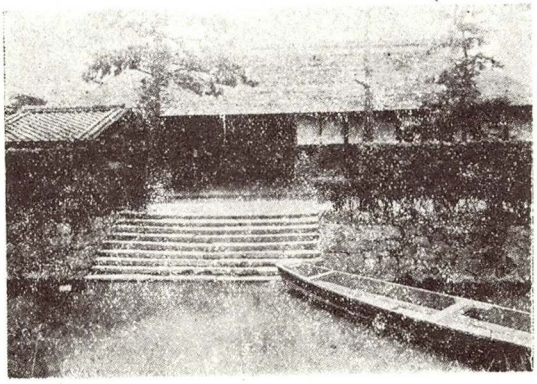
江崎　私は只今お話のやうに林學の方を昔やつて居つたので材木に付ては多少趣味も持ち色々心掛けて居りますが建築は一向迂遠で分りませぬ。建築を見に行きましても建物に目を付けるよりも材料に始終氣を付けて居ります。

今日も皆さんからさう云ふ點を承りたいと思つて出て來た譯であります。今お話のありました鴻池の本家、それから西邸と言つて居りますが、隱居所の方、それから今お話のありました和泉町の鴻池。河內の鴻池新田の建物。それから瓦屋町の別邸がございます。是等の建物に付て見ますと、本邸並に西邸、和泉町などの家の建て方は、多少近頃になつて模樣替をした所がありますが大體今高安先生がお話になりましたやうな風です。本邸の方も入ると直ぐ左側が玄關で、それから內玄關が



鴻池新田會所本館正面

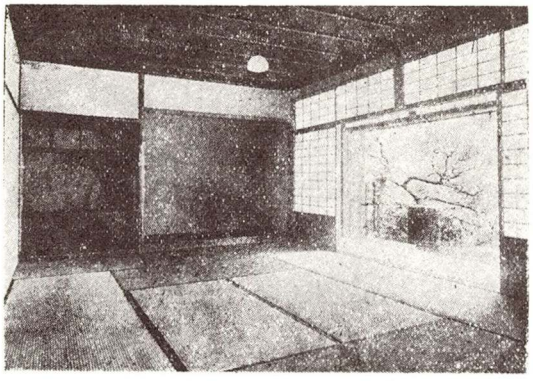
あつて臺所へ入る、其のとつ着きが出入りの町人が勘定を取りに來たりして出入りする所です。臺所は天井に何も張つてないから大黑柱も梁も能く見えます。さう云ふ風に本邸の方は入つて直ぐ左が玄關で、それから內關があつて、少し斜に入りますけれども臺所へ入つて、先づ町人が掛取りに來る受付、それから奥が臺所になつて、詰り4箇所から上がれるやうになつて居ります。西邸と言つて居りますのは、西ですから、入ると右手に玄關がある。西邸の方は隱居所ですから玄關1つで內玄關と云ふやうなものはありませぬが、臺所へ



裏　門　外　側

入る前に內玄關のやうなものがあります。それから直ぐ臺所へ入ります。今申した町人が勘定に來ると云ふ所は、西邸の方は內玄關に相當する所が

割合に廣くなつて居るから兩方兼ねて居るやうになつて居ります。和泉町の鴻池の方は、入つて直ぐ右が玄關で、仕切があつて臺所へ入る。入つた中には本邸の方で言ふ內玄關と掛取りなどの來る受付と一緒にしたものがありまして、それから隱居所と同じやうな仕組になつて居つて、奥の臺所



本　館　の　座　敷

があります。其處からでも上れるやうになつて居つて、天井も見えるやうになつて居ります。

それから瓦屋町の別邸と云ふのは、明治36年の博覽會の時に閑院宮總裁殿下のお成りを願ふ爲に門も拵へ、玄關も拵へたやうです。是は別邸の方ですから、主人が入る時分には表から駕籠で入つて、ズツと臺所まで通つた。さうして皆に分らぬやうにして臺所から座敷の方へ上つたもののやうです。玄關は通らなかつたやうです。茶室は今も殘つて居りまして、ちよつと變つて居るやうです。市區改正の時に 2 間程削られ玄關も付け替へられ、茶室は其の儘ですけれども、茶室に揃つて 6 疊 2 間あつたのを 1 間削られ、庭に行ける露地のやうなものを造りました。別邸は何でも聞く所に依ると、外からは何だかちつとも分らぬやうにして、表から臺所まで直ぐ駕籠で乘り込んで、又臺所から駕籠に乘り込んで外へ出たと云ふ話であります。

それから鴻池新田の方は、やはり門を入つて、臺所から直ぐ上れるやうになつて居ります。臺所を出切つて、ちよつと片寄つた所に玄關があります。是は前からあつたかも知れませぬが、只今のものは後から、造つたことが分つて居ります。今行くと裏門から入るやうになつて居りますが、臺所と云ふのがやはり非常に廣いもので、其處で色々のことが出來る。今でも其の當時の釜からすつかり用意してあります。

實は今日斯う云ふ話があると云ふので、本邸や方々の所にさう云ふ記錄がないかと思つて、是は前から心掛けて居るのですが、色々調べて見たいと思ひましたけれども、記錄がなかなかありませぬ。唯鴻池新田の方は「新田開發誌略」と云ふものを草間伊助が克明に書いて置いてくれましたから、建物に付ての顚末は何年何月何日に出來たと云ふやうな事がすつかり明かになつて居ります。其の時分の幕府の色々の禁制も其の儘殘つて居りますし、お觸れのやうなものも殘つて居りますが、それを見ると、やはり臺所が廣く下には石が敷詰めてあつて、天井や梁は高安先生のお話の通りになつて居ります。

鴻池の建物を一貫して現れて居る材料は、昔から質素なので、大抵の柱は栂です。鴨居長押も栂とか杉を使つて居ります。床柱なんかは杉の丸太か松の皮附です。唐木なんかを使つてあるものは絶對ありませぬ。檜を使つてある所は、本邸でも西邸でも和泉町でも新田でも瓦屋町の別邸でも全然ありませぬ。今は栂の 5 寸角とか六寸角の立派なものが使つてあれば檜より高いですが、昔は鴻池は特に質素で、聞く所に依ると、天保年間に水野越前守が奢澤な普請を禁止して、唐木で造つたものなどは改築さして居りますが、鴻池は此の時の禁制にも觸れなかつたので、改築はして居りませぬ。それで唐木を使つた所はありませぬ。檜を使はないと云ふのは、御承知の通り檜は神社、佛閣、御殿を造ると云ふことになつて居りますから、土臺には使つて居ると申しますが、外から見える所に檜を使つた建物はありませぬ。

鴻池家の建築年代

兎に角本邸も西邸も和泉町の方も隨分古いと思ひますが、大塩の亂の時に燒打をされたと云ふことになつて居るから、天保14年前後に改築したものに相違ないと思つて色々記錄を調べて居りますが人足を幾ら使つたとか克明に書いた文書も少しありますが、要領を得ない。それを詳しく調べてくれと言つて賴んで居りますが、まだ調べてくれないのです。今日何かの御參考にと思つて、專門に書類を調べて居る者に調べさしたのですが、ど

うも大鹽の時には店や住宅は燒かれたけれども、藏は1つも落ちなかつたと見えます。其の證據には、昔から鴻池に殘つて居る文書や書附などを全部今調べさして目錄を取つて居りますが、それを見ると書類の紛失したと思はれるものは1つもないのです、それに書いてある道具類なども殆ん其の儘で、此の間少し賣りましたが、あれだけ澤山ある道具類が大鹽以後に買つたものは殆どありませぬ。大抵大鹽以前に買入れたものでありますが、それが全部殘つて居ります。それで藏は全部殘つたと認定して居ります。住宅の方は燒かれたに相違ないと思ひます。それは鴻池の記錄では色々な諸材料を幾ら使つて、人足を幾ら使つてたと云ふことはありますが、今の所はまだ藏が燒けたと云ふ記錄はありませぬ。是から先現れるか知りませぬが、今迄の所では見當りませぬ。

其の外の傍證として得ましたのは岡山藩に『永代記錄』と云ふものがあります。私の方では今鴻池の元出入りして居つた岡山藩、熊本藩の方まで調べさして居りますが、岡山藩には1番能く記錄が殘つて居るやうでありまして、鴻池善右衛門が岡山に行つた時に、殿樣が非常に優遇したことなども岡山藩の記錄に出て居ります。其の岡山藩の記錄で燒けた時のことを記して居るのには「天保8年酉2月19日變事大火の節、鴻池善右衛門居宅類燒に付杉板100坪善右衛門へ、同50坪善之助へ差遣」と云ふ記事があります。それから天保9年4月朔日の條には「鴻池善右衛門居宅去春類燒、此度致家作候ニ付、材木被下善右衛門呼出於御書院申度、那須久右衛門立會、赤松虹梁5本、材木5本」云々とあり、大鹽亂類燒後約1箇年を經た天保9年春には、既に家屋新築に着手したことが分ります。更に同記錄天保10年8月の條には「鴻池善右衛門居宅普請成就致家禍候ニ付爲祝差遣ス

生鯛一折	高尾助太ゟ
集肴五種	那須久右衛門ゟ
集肴五種	岩田七郎兵衛ゟ」

とありまして、新築に着手後1年餘を經た天保10年8月には既に家屋の落成したことが分るのであります。當時のことは今の處是より以上には分つて居りませぬ。新築したものが、どう云ふ結構で、どれだけ費用が掛かつたかは分りませぬが、燒けたことは岡山藩の記錄で分つたやうな狀態です。

唯私の素人考で感心して居るのは、其の後電燈を附けるとか、又昔仕事をして居つた所を椅子にして事務室に變へるとか、多少內部の模樣替は致しましたが、建附はびくともして居ないと云ふことです。便所を直したとか硝子障紙を入れたとか、色々やつて居りますけれども、建築の建附はびくともして居ない。大工などに聽くと、餘程丈夫に出來て居るものらしいです。和泉町の方は餘り氣を附けて見て居りませぬが、本邸の方は實に嚴重なものです。柱も6寸角の大きな栂で、皆柾を使つてあります。それから西邸の方は隱居所ですから、そんなごついことはやつて居りませぬけれども、是もびくともして居ない。和泉町の方もさうです。瓦屋町の別邸の建築はもつと古いです。唯素人で敬服するのは、長押は杉の面皮附ですが、上の鴨居なんか7間ばかりあり、中に柱が1本もない。6間も7間もあるかもいに柱なしで、それもズツと薄手の1本の木を使つて居つて、雨戶の建附も硝子戶の建附も少しも狂つて居ない。私が知つてからでも30年になりますが、びくともして居ない。專門のお方が御覽になれば分るでせうが、餘程巧く吊つてあるものと思ひます。中の座敷の長押も4間位杉がすうつと通つて居りますが、やはりびくともして居ない。座敷の中は兎に角として、緣側の長い鴨居が今言ふやうに1本の柾も使つてない。餘程骨を折つて吊つてあるのぢやないかと思ひます。

瓦屋町の別邸の方は主に杉です。床柱は赤松です。巨細に見ないけれども、建附はなかなか嚴重に出來て居て、今までに屋根を變へるとか何とか云ふ根本の手入はやらぬのですが、嚴重に出來て居て、びくともして居ない。茶室も大分古いもので、其の方の人はやかましいことを言つて居りますけれども、私共には分りませぬ。唯御承知のやうに以前は屋根が杉の板葺きだつたのですが、市內ではそれがいかぬと云ふので、仕方がないから、銅で葺きましたが、こまかくしてやりますと外から見ると、杉板葺と丁度同じやうで、外觀は左程變りませぬ。此の茶室は、見せてくれと言つて能くお出でになりますが、2間になつて居りまして、ちよつと變つた茶室のやうです。

それから鴻池新田の方は、部屋を建て變つたり模樣替をした所があるかも知れませぬが、藏も附

いて居ります。座敷からは生駒山が見えるやうに出來て居つて、大したこともないやうです。

岡田　高橋さん協會から何時か見に行きましたね。

高橋　瓦屋町の方でせう。

岡田　新田の方へも行きましたよ。

高橋　新田の方も見せて貰ひました。

岡田　實測したことがあります。確か協會の雜誌に出てる筈です。

江崎　建築協會から別邸の方へお出でになりましたね。

高橋　寫眞を撮らして戴き江崎さんに說明を附加へて貰ひまして雜誌に載せたことがあります。

江崎　大阪の商人は恐らく材料の點では檜を使ふことは遠慮したのです。それは檜は神社とか、御殿の建築材料で、町家は多くは栂を使つて、栂を使つてない所は杉と松を使ふ。杉でも今はあんな4間も5間もあるものは高いでせうが、昔はそれ程でなかつたと思ひます。

建材の産地

以上は鴻池の話ですが、材料の點で特に建築家にお願ひしたいのは、'私は東京の伊東忠太さんにでも、亡くなつた武田五一さんにでも不足を言つたのですが、建築記錄を見ても、何處から材料を持つて來たかとか、材料がどう云ふものであるかと云ふことはちつとも書いてない。併しながら材料の產地と云ふものは建築に非常に關係がある。此の間も毎日新聞の臺灣座談會の時私は殖產局長に吳々もお願ひして置いたのですが、今調べて置かないと、先へ行つたら分りませぬからと言つたら、それは宜いことを聞いた、是から是非やりますと言つて居りましたが、臺灣檜と云ふものは非常に宜い。明治神宮の本殿は臺灣檜で、吉野神宮も建物全部が臺灣檜です。それから如意輪堂の修繕材料を見ても臺灣檜です。後になつて吉野のやうな山林地方に建てられてあるから、吉野の木を使つたと思はれたら、非常な間違です。だから、材料の出所ははつきりして置かないといけませぬ。更に驚くのは高野山です。あの金堂及根本大塔に使つた材料は大部分恐らく十中の八九まで臺灣檜です。臺灣檜が高野山まで上つて居る譯です。それで武田君に工事報告書には必ず臺灣檜を使つたと書かして置いて呉れと再三言つて居つたのですが先生は報告書を書かない中に死なれました。あの高野山の御寺の周圍は營林局の山林で、高野山の檜で間に合ふものはどれだけでも拂下げると言つて居りましたが、臺灣檜を隨分使つて居ります。それで報告書には、どれだけは高野山の檜を使つて、何と何は臺灣檜、何處には何を使つたと云ふことを書いて置いて貰はないと、あんな山の上まで臺灣檜が行つて居るとは後の人は考へないかも知れない。

個人の住宅でもさうです。網島の藤田邸は阿里山の檜を伐り出して來て、全部阿里山の檜で造つてあります。先代の傳三郎さんが阿里山に鐵道を附ける時分に私實問を受けて私の意見を述べたことがありますが、藤田邸では阿里山の檜を使つて實はやにが多くて困つて居るのです。大阪のやうに塵の多い所では、やにに塵が着いて黑くなる、それで始終雜巾にアルコールを附けて拭かなければいかぬと言つて居つたのですが、材木の方から言ふと、檜にやにがあればこそ宜いので、やにがなくなつたら檜の腐る時です。ですから、やにのある間は腐らぬ。法隆寺の金堂あたりのあの大きな1枚板を見ます、と元は隨分やにつこいものであつたと思ふ。それであればこそあれが殘つて居たのであります。

今日本に殘つて居る古建築から見ると、昔は日本內地に立派な山林があつたと思ひます。今臺灣では阿里山と八仙山と太平山の3箇所で伐つて居ります。私は見に行つて知つて居りますが、あれと同じ立派な木が日本內地にもあつたに違ひない。それを散々に伐つて使つてしまつて今では大きな木がなくなつてしまつた。

伊勢大神宮の檜材

御參考迄に申上げたいことは、皆樣御承知の大神宮樣の御宮造は20年ごとに御改造と云ふことでありますが、私が宮內省に居る頃愈々困つて、材料が無くなるし金も掛かると云ふので、20年御改造を改めて、木が腐るまで措いて置くと云ふことに、明治天皇に申上げたらどうかと云ふことになつた。處が內務大臣は1人で行くのはどうかと言ふので、大藏大臣と農商務大臣の3人で明治天皇の御前へ出て申上げた處が、檜の大木が無くなる

なら成べく木を早く大きくするやうにしたら宜いぢやないかと仰しやつてお許しが出なかつた。大神宮様に使ふ御用材中特に白木の大きいものが要りますのは御扉木の様に承つて居ります。そこで木曾の御料林の中に一定の區域を劃して神宮の御用材備林と云ふものを拵へられました。是はどうするかと言ふと木を粗く植ゑる。さうすると生長が非常に早い。密林にすると、木理は細かいけれども、生長が遲い、粗く植えると、密にした時より倍も生長する。それで木曾の御料林の中に相當の面積で用材備林を造つた。少し餘計の話ですけれども、昔は御用材は木曾で伐るのに限つて居つたのではない。手近かな神路山、島路山あたりで伐つたのです。それから、足利末より戰國時代にかけ約120年ばかりの間は、所謂皇室の式微で誰も御改造をする者がなかつたけれども、信長が出て來て、天下が少しく治つて來ると、信長が戰國時代の後を承けて御改造申上げた。何でも岐阜の城にあつた2000貫の金を以てやつたと云ふのでありますが、其の時に初めて木曾の木を使つたのであります。當時伊勢の者が來て小屋を掛けて居つたと云ふので、木曾の御料林には今に、伊勢小屋と云ふ名前が殘つて居ります。信長が伐つてから、秀吉も木曾から伐つて御造營を申上げて居ります。それから後は毎回木曾で伐るやうになつたのでありますが、元來御用材は木曾で、伐らなければならぬと云ふことはありませんから、此の間大毎の座談會の時に私は臺灣の殖産局長に此の次の御遷宮の時には是非臺灣の檜を使つて貰ふやうになさつたらどうかと申しましたら、局長は私の方でも考へて置きますと言つて居られましたが、唯少し費用が掛かる。神主が臺灣まで出掛けて山に祭を執行したり又材木を遠く運んで來なければならぬと云ふことになりますが、併し臺灣の檜は材價が比較的安いから、結局さう違はないと思ひます。大毎の座談會で私が喋つたのは、大阪版には出て居りませぬが、臺灣版には速記錄になつて出て居ります。其の時にも言つて置いたのですが、臺灣でも餘りどんどん檜の老大木を伐らないで保存して置いて貰ひたい、アノ様な檜の美事な大樹はそう易くは出來ず外にはないから、大事にしまつて置いて貰はないと困ると申しましたら、局長は臺灣總督府でも氣が付いて餘り伐らぬやうにする積りだと申して居られました。檜と云ふ木は黑潮系統の所にしかないもので、朝鮮にもないし支那にもない又米檜とも違ふ。私の方の書齋は殆ど米檜を使つて居りますが、日本の檜とは餘程又違ひます。檜は臺灣から、四國、九州、本土の方に掛けて日本だけのものです。それだから檜は日本特有の木であつて、あの位良い木はない。と言ふのは、色が白くて美しく、材質が硬からず軟からず、細工が仕易く、香が佳くて、くるうことがなく又長く保存に堪へます、つまりやにが殘つて居る間は腐らない。

檜　の　脂

やにのことでは隨分失敗談がある。是は御參考迄に申上げて置きますが、明治の始めに町田久成氏が博物館の世話をして居られし頃、鎌倉時代の建造にかゝる奈良にありし建物を御維新後に壞した時、是は鎌倉時代のものであつて、是位枯れて居るものはないからと云ふので、その檜で正倉院の御物を入れる箱を拵へて御物を收めて置いた。其の時分には一般の拜觀は許されませんでしたが或日イタリヤから見えた、皇族が正倉院の拜觀を願はれて、始めて開けて見られたら、其箱には檜のやにが吹いて、それがすつかり御物に引ツ著いて居つて困つたと云ふことがあります。それはまだ木が腐らずにあるからやにがあるので、それを削つたから中からやにが吹き出して來たのです。昔から檜は建築材に使つても物を入れるものに使つてはいかぬと云ふのは、それです。『日本書紀』の素盞嗚尊の卷にも、杉及び楠は船を造れ、檜は家を造る材とし、柀は臥床を造れと、書いてあるが、それは其の通りです。だから檜で箱を造ると云ふやうなことは全然いけませぬ。箱を造つたりするのは桐に越すものはない。それがなければ樅で造る。杉でもやにを吹くからいけませぬ。併し檜はやにがあることが其の特長であるから、それは1つお考へを願つて置かなければならぬと思ひます。

檜は黑潮系統の日本産

それからもう1つ木の特長を申上げますと、皆さんは佛像を御覽になりました時、古い佛像で顏に割れの出て居るもので、弘仁以前のものだと云ふ事が出來ると思ひます。何故ならそれはどう云

ふ譯かと云ふと、唐招提寺へ行つて壞れて居る佛像を見ると、其腹の內部が刳つてないものがある當初は腹の中を刳ると云ふことを考へなかつたので、腹の中を刳らずに造つたから顏に割れが出來て來たのですが、段々進歩して、腹の中を刳るやうになつた。それで顏に割れが出なくなつたのです。其のことを源豐宗と云ふ佛像研究家に話をしたら、それは非常に宜いことを聽いたと言つて喜んで居りましたが、世の中が進んで、弘仁から後、藤原期、鎌倉期、足期利と云ふ風になつて來ると、段々中を多く奇麗に刳るやうになつた。さうすると愈々外の方に割れが出ない。腹の中を刳ると云ふのは重さを減ずるばかりではない。是は建築でも同じことで、柱に脊割を入れて置かないと、後から外へ割れが出て來ます。それはやはり同じことだらうと思ひます。

それで私は能く材料論を持ち出すのですが、檜で造つたものを其形式から見て、支那製とか、朝鮮のものだとか言ふ人があります。ひどいのは法隆寺にある玉蟲厨子の下の臺が檜で出來て居ります。その臺は密陀繪が描かれてあつて、あれは支那から來たものだと言ふ考古學者がある。それで支那には檜がないぢやないかと言ふと、いや、日本で檜で造つた船が支那へ行つて難船して、其解體した板を材料にして造つたのだらうと言ふのです。隨分持つて廻つた苦しい說明ですが、日本では檜で船を造つたりしたことはない刳船の時代には樟で其後は總て杉材を用ひて居ります。日本書紀の素盞嗚尊の卷の通りです。だから、檜で造つた船が難船したと云ふのは出鱈目です。

瀧澤　それが本當のナンセンスですね。(笑聲)

江崎　それで檜を材料にしたものならば日本のものであると言ふことが出來る。樟に付てもさうであります。飛鳥朝の佛像は全部樟です。是は間違ひないことで、樟で造つたものを見たら全部飛鳥朝と思つて間違ひありませぬ。處が京都太泰の廣隆寺並に奈良縣の中宮寺の彌勒菩薩とか、同じく奈良縣の法隆寺の觀世音菩薩を其形式の上から百濟佛と言つて居ります。人がありますが、併しあれは皆樟で造つてあります。處が樟は前にも述べた様に朝鮮には絕對にない北支にもない。南支には少しありますけれども、北支、朝鮮には絕對にないのです。だから、まさか其の時分に日本から朝鮮に樟を送つて、それで佛像を彫刻して日本に送り返したと云ふことは考へられない。朝鮮には石の良いのが出るので、石の彫刻は發達したけれども、木の彫刻は發達してゐない。樟を使つてある以上は形がどうであつても、誰が何と言つても日本で造つたものである。材料論からさう云ふことが言へる譯です。

瀧澤　『萬葉集』や『古事記』に(眞木)と書いてありますね。梻と云ふ字なんかも書いてありますが、あれはどう云ふものですか。

江崎　萬葉にある眞木と云ふのは檜です。藤原宮役民の歌に使つてあるのは檜です。『日本書紀』の素盞嗚尊の種播の條には「マキ」と云ふのは、梻と云ふ字が書いてありますが、あれは俗に謂ふ「クヮマキ」です。高野槇ではない、夫れより廣い葉の木でよく庭木にあります。此の木の材は土に入れても腐りませぬ。それで棺桶などに使ひますが、又『日本書紀』には寢室だとか暗い陰濕の所に用ひるやうに書いてあります。

瀧澤　檜の語源はどう云ふ所にありますか。

江崎　檜は其樹枝が風に擦れて摩擦すると火が出ます。今でも伊勢では檜材の板に錐もみをして摩擦して火を出しますが、昔は此の様に總て火を出すのに檜を使つた。と云ふので檜と言つたのです。

池田谷　今でも島根縣の熊野神社の火の神事を見ると、檜とうつ木とで火を出して、それを出雲に持つて行くのですが。あの行事を見たことがありますが直ぐ出ますね。

江崎　あれは摩擦で出るのです。それから此の邊でアテ又はヒバと言ひますのは、アスナラウと言ふのですが、明日檜になると云ふので、アスナラウと言ふのです。あれは檜に能く似て居りますが勾ひが惡い。併し特長は容易に腐らない。

尙1つ御參考に申上げますが、あれが青森から臺灣に移入されまして鐵道の枕木になるのであります。それはどう云ふ譯かと言ふと、砂糖畑の輕便鐵道は何を使つても白蟻が附きますが、あれには蟻が附かないので、態々青森から移入するのですつまり、外の木だと白蟻が附くけれども、青森のヒバには白蟻が附かぬと言ふのです。

高安　先お話の檜のやにでは私も失敗したことがあります。中へ入れて置いたものが目茶々々に

なつて到頭捨てました。

江崎　槍ではいけませぬ。

岡田　やはり箱は桧か桐ですね。

桐　の　木

江崎　桐の木の特長を申上げますと、あんな柔い木であります。けれども、あの位水を透さぬ木はないと思ひます。又同時に水を含んでしまつたら、なかなか蒸發せぬ。皮を剝がずに置けば1年でも持つて居りますよ。それを挿すと芽が出ます。又桐で2重3重に箱を造つて置くと、外が燒けても中まで火が通らぬと言ふ位特長のあるものです。又贅澤なのは醍醐の寶物館の建築です。あれは倉の中の天井も周圍もすつくり桐で張つてある。

岡田　あれは武田先生の御設計ですね。

江崎　私も關係しましたが、驚く勿れ、天井も周圍も桐で、贅澤と言へば贅澤です。

玉置　併し能くそれだけ揃ひましたね。私共も桐を探しましたが、なかなかありませぬね。

江崎　日清戰爭の後に大分支那から持つて歸りました。汽車だとか其他運輸の便のある所の桐はどんどん日本へ持つて歸つた。今では支那でも運輸の便利の宜い所の桐は、なくなつたと言はれる程持つて歸つた。支那の桐は內地の桐より少し重いやうですが、併し桐には變りがない。今私の方では漆の奬勵もやつて居りますが、桐の奬勵もやつて居りまして、方々に苗を配つて植えさして居ります。

岡田　南木さん。記錄にあります、鄕土建築とか淀屋辰五郎の宅などに付て、皆知りたいと思つて居るのでありますがさう云ふお話を1つお願ひしたいと思ひます。それから、今宮に來山の宅があります。今日月斗先生がお出でになりましたら承らうと思ひましたが、さう云ふお話もお願ひ出來ましたら結構に存じます。

南木　來山の宅はどうも惜しいものだと思つて居ります、大正八、九年頃まで市川新升君が居りました時分には、親父が茶人でござましたからよく保存して居つたのですけれども、其の後飛田遊廓の人が買取りましてからは改造され茶室も滅茶々々にしたらしいのです。

岡田　支那料理屋になつて居りますね。

春琴抄のセツト

南木　あゝ云ふものは何とか市で保存して貰つたら宜いと思ひますが、大へん殘念なことです。

それから今淀屋辰五郎の宅と云ふお話ですけれども私もちよつと分り兼ねます。兎に角現在の大阪で古い建築が殘つてないかと能く聽かれますし又何處が案內して呉れぬかと言はれるのですが、偖てさうなると實際困るのは何も殘つて居らないからです。實は近い例ですが谷崎潤一郎氏の『春琴抄』が映畵になりまして、大船で撮りました。其の時に畵家の小村雪岱氏がセツトを賴まれたので大阪の風俗を出さなければならぬが枕の上で考へて居たのではとても分らない。

南木の所へ行けと云ふので、私の所に振向けられたものですから、兎に角手許にありましたものを見せたり、家の建築を話したりした其の時琴の師匠の家が見たいからと云ふので、當時東區島町に菊原といふ檢校さんが居りましたので、御案內しました。是なんかも東京の人が考へて居られるのとは大へん違ふのです。立派なお師匠だから立派な家に居るものと思つて居られたらしいのです。併し大阪の琴の師匠は何處の家でもさう立派なものではない。格子があつて、中へ入ると、其の格子のある所でおさらえをして居る。其の家へ行きまして、色々見せて貰ひましたが、まさか春琴は富豪の娘で、別宅を構へて教へて居ると云ふのに、格子の所ではいかぬと云ふので、映畵では中2階と云ふことになりましたが、大阪ではさう云ふ構造はありませぬ。是は想像されたので、中2階で春琴が教へて居ると云ふことになつて居ります。

それから大阪のうどん屋と云ふものがサツパリ見當が着かぬ。と云ふことでした。東京のそばやとは表がかりが違つて居りましたが、それも現在では佛が變り明治初年のうどんやの氣分が殘つておりません。そこで、明治初年刊行の『買物案內』を見せてそれをスケツチして歸られましたが、それが映畵に現れて居りました。併しやはり東京人の考へて居るのとは少し違ひまして、遺憾に思ふ所もありました。

春琴抄の話ばかりするやうですが、あれは大阪に題材を取つたものだから、大阪の俳優にやらし

たらどうでせうと云ふ話を松竹にしたのです。谷崎氏が承知したら上演したいと云ふので、交渉したら、谷崎氏は承知しました。それで本讀みは谷崎氏と私が立會つたのです。處が舞臺背景をやらなければならぬが、それが能く分らない。

舞臺背景をやる松田君が、春琴の家に付ては色々註文が出て居るのですが、どうも見當が附かぬから何處か案内して呉れないかと云ふことでした。色々考へましたが思はしい家がない。高麗橋の心齋橋に有本洋服店がありますが、其の西隣りに井上と云ふ人の家があつて、其の家が心易いから案内した。

此處でちよつと申上げますが、大阪の家は先程高安先生から色々お話がありました様に、舊家になりますと隨分間取が廣いやうでございますが、普通の家は4間取りと云ふものがない。丁度マツチ箱のやうに細長い家が多い。井上さんの家も舊いのですがマツチ箱のやうでした。入りますと、長い表の間がありますが其處には皆戸が閉つて居りまして、どう云ふ座敷があるのか分らぬ。其處を入りますと、大阪の通例で中庭がある。それから玄關があつて、其の奥へ入ると臺所口になつて其處へ連れて行きまして、成るべく特徴のある所を見せなければならぬと云ふので、2階へ案内した。から物干に上る所が芝居に應用されまして、歌舞伎座で御覽になつた方は御記憶でせうが、例の物干が歌舞伎座のことですから、迫上げになつて居る。大へん歌舞伎座らしい裝置でございました。處が椅子段を上りますと、是は大阪の特徴ですが、表の物干へ出ようと云ふ所が1段と低くなつて居て床がすとんと落ちて居りまして、それから物干へ出る。其處が少し傾斜して居りますから天井が低くうつかりすると、頭を打つ、それから物干へ出るのですが、是は大變面白いと云ふので、スケツチ致しまして、それを歌舞伎座に掛けた譯です。

次に臺所を見せて貰つたのでありますが、生憎臺所は改善されまして、すつかり現代式になつて昔の面影がない。それで又考へまして、丁度谷町に鶴丸さんも御承知でせうが、永尾さんの家が完全に殘つて居りますのを思ひ出して、其處へ連れて行きましたが、臺所が誠に綺麗に殘つて居る。掃除も奇麗に行届いて居るのです。へつついさんから井戸もありますし、總てが昔の儘に殘つて居る。それをスケツチして舞臺に掛けた譯です。併しさう云ふ家が段々なくなつて參ります。既に今お話した井上さんの家がなくなつて、現在は三和銀行か何かの敷地になつて居りますやうな譯で、是は能く見て置いたと思つて居ります。其の他色々の方面を探つて見てもどうも舊い俤の殘つた家がない。

揚　　店

又大阪の家の特徴と致しましては、表構に揚店のあるのが特徴です。揚店は晝間は下げまして、商賣人は其處へ物を並べる。物を賣らぬものは揚店の所へ腰障子を立てゝ置く、斯う云ふのが大阪の町家の風習です。舊い家になりますと、障子に藍の平板紙が貼つてあつて、是は堀江の1風景です。此の揚店も今日はなくなつて居ります。是は便利なものでありまして、寢しなに揚げてしまふのですが、商賣をしなくても、夏の夕になりますと、之を下しまして、其の上で夕涼みをすると、云ふやうなことで大へん便利でありました。

處が之が1軒殘つて居りますのは、御承知でありませうが、南鍛冶屋町に龜村治郎兵衛と云ふ人がありますが、此處には昔の面影がよく殘つて揚店もあり、奥に入ると、中庭もあります。それから是は大阪だけだらうと思ひますが、中庭へ入りますと、必ず便所があつた。無論是はお客用のものですが、どうも庭先に便所があるのはをかしいやうですけれども、客が上ります迄にでも催しますと、其處で先にしまうて上る、是などは特徴でございます。

それから今申しましたやうに臺所がありまして奥に座敷がある。先程高安先生のお話に色々舊家のお話がありましたが、どうも大阪の家は、軒が非常に低く、陰氣でありまして、光線の採り方が非常に悪かつたやうに思ひます。大阪で高層建築が生れましたのは明治の20年頃であつたかと思ひます。それ迄は大阪では屋根の上へ上つて眺めますと、天王寺の塔の外は南北御堂の大屋根以外に何も見えなかつた。處が20年3月に5層の建物が南の今里附近に出來た。俗に5階と言つて居りますが、是が大阪に於ける高層建築の初めぢやないかと思ひます。俗謠に玉江橋から天王寺の塔が見えると云ふことがございますが、ちよつと考へると

見えさうもありませぬが、當時は眼を遮るものがなくて、玉江橋から天王寺の塔が見えると云ふ風であつた。從つて屋根には大抵の家に物干がありまして、それが物見臺にもなる譯で、火事や何かがあると必ず屋根の上に上つて四方を見ると云ふやうな風になつて居りました。

それから淀屋のお話がありましたが、是は私の想像ですが、色々の記錄から見まするに、今の北濱で、淀屋橋の南詰から1町4面1萬坪の地を劃して、いろは48字を藏の名前に附けたと云ふのですから、餘程大きい家であつたらうと思ひますが、どんな家であつたか、色々記錄を調べても、少しも其の遺構が記されてゐない。淀屋の豪奢と云ふことは色々の書物に書かれて居るから、それで想像をするより仕方がありませぬが、どう云ふ建築であつたが、其の邊のことは私共には分りませぬ。

吉田屋の臺所

それから民家でちよつと面白いものとしては、遊廓の方では吉田屋の臺所であります。是は一度火災には罹りましたが、補ひまして、元の儘に出來て居るらしいのです。昔の面影が未だに殘つて居つて1番面白いのは大臺所と梯子段です。臺所から座敷へずつと1間の廊下がありまして、2階へ上ります所う云ふに、1間半の段梯子が附いて居ります。恐らく斯ものの殘つて居るのは吉田屋だけだらうと思ひます。併し昔は何處のお茶屋にも1間半の段梯子が附いて居たものと思ひます。嘗て北の新地の演舞場の所に住吉屋といふ大きなお茶屋がありまして、其處にも1間半の段梯子が附いて居つたと云ふことであります。

處が大阪の富豪で平瀬露香と云ふ人は有名な通人で、なかなかの遊び手ですが、此の人が其の家に遊びに行つた時に、遊び疲れた擧句と見えしまて、何か趣向しようと云ふことになつた。處が、2階の欄干から下を眺めて見ると、丁度うどん屋がゐた。それでうどんをおごつてやらうかと云ふことになつて、うどんの注文に下へ行かうとしますと、それでは面白くない、うどん屋に荷を持つて2階へ上つて來いと云ふ注文をした。お大盡の言ひ付けだからと云ふので、うどんの荷を擔いで梯子段を上つたと云ふのです。勿論1間半の段梯子でもまともに擔いでは上れないから、横にして上ると、上る度にうどん屋の鈴がちりんちりんと鳴つた。さうして2階へ上つて廊下に荷を据えて、うどんの總仕舞をしたと云ふ話があります。それは1間半の段梯子があつたから、そんなことも出來たものと思ひます。是は今新町の吉田屋に名殘を止めて居ります。昔の廓には相當大きな宅を持つて居る者がありまして、お座敷も廣かつただらうと思ひます。

川の水を汲む

江崎　申し落しましたが、水道の出來る以前には、北濱あたりでは朝早く川の水を汲んで來て、床下に甕か何かがあつて、その中に入れると云ふ話を聞きましたが、さう云ふものは今殘つて居りませうか。

高安　私の所もさうでした。臺所が半分疊で半分板の間ですが、其の中疊2疊敷位の所を揚げると、水を貯めて置くやうになつて居つて、其處へ水を入れたものです。

江崎　川水ですね。

高安　川水です。それは梅檀木橋邊から持つて來たらしいですね。

江崎　川の眞中で汲んだと云ふ話ですが……それからもう1つ伺ひたいのは、鰻谷の住友さんの家に2度ばかり御招待を受けて行きましたが、あの洋間は1番初めの洋館ださうです。あれは隨分古い建物で、餘程變つて居りますよ。御覽になつまて居ないのなら、古いものが其のまゝ殘つて居りすから、專門の見地から御覽になつたら如何かと思ひます。

岡田　高橋さん御存じですか。

高橋　一遍前に調べたことがありますが、どうもそれ程古いものではないと思ひます。御存知の樣に住友さんでは鋼吹きをやつて居られるので普通の住宅とは少し變つて居りますが、併し其の後擴張が重つたので、プランが大分入り亂れて居ります。10年前に壞さうかどうしようかと云ふ話がありましたが、結局修繕されて今では御客用に使つて居られる樣です。

江崎　東久邇宮樣がお越しになつた時に私も陪席を仰せ付かつたのですが、宮樣を御招待すると云ふので立派に修繕されました。專門家が御覽になつたら餘程見るものがあるのではないかと思ひ

ます。

南木　あれは明治13年 9月に建てられたと云ふことです。

高橋　洋館の方は其の位でせう。

南木　私の親父も招かれたことがありまして、其の話をして居りました。前の川縁が芝生でそこに四阿のやうなものが建つて居たさうです。其處で歸りに一服するやうになつて居て、其の卓子の上に其の時分には珍らしい巻煙草が置いてあつたさうです。併し誰も手を著ける者がないので、折角の思召だから1本戴いたと云ふことを父が話して居りました。なかなかハイカラに出來て居つたやうに伺つて居ります。

それから今の水の話ですが、斯う云ふ話があります。大阪に虎屋饅頭と云ふ有名な菓子屋がございました。此の菓子屋は大阪隨一でございまして仕舞ひます時には何萬と云ふ切手が諸方に散ばつて居つた。虎屋がどうしてそんなに有名であつたかと云ふことを調べて見ますと、やはり原料を精選した結果ださうです。例へば小豆は泉州日根野の大納言でないと不可ぬとか、砂糖は支那の三盆白でないと使はぬ、と云つた調子で、併し1番感心したのは水で、それは何處の水を使つたかと云ふと、梅檀木橋の橋桁の 2つ目の眞中の水を、毎朝6時なら6時、5時なら5時に汲むのですが、それが決つて居つたのださうです。橋桁の2つ目の所の水が清冽であつたらしいのですが、其の水を使つて、あの有名な饅頭が出來たと云ふことです。

江崎　西の宮のお酒を造る水でも、鹽氣のある水でないと出來ぬと云ふのですから、原料の水を精選するのは當然でせうね。

高安　水のことに付ては天保 6年の「街の噂」に江戸の人が大阪のことを非常にほめて話して居るのですが、唯水だけは川の水を汲んで來るから、氣持が悪いと云ふやうな文句があります。其の時分から川の水を汲んで來たものと見えます。井戸へは泥がさし込んで使へなかつたのです。汲む時に泥が混じるので、澄まして置いたやうに聞いて居ります。

南木　水道が出來る迄は皆川の水を呑んだ譯ですから。

高安　コレラが流行つてから水道を造るやうになりましただが、あゝ云ふのが方々にあつたと見えます。今橋の灘万はもと米平（殿村家）の邸でしたがそこには立派な地下室が出來てゐたそうです。

岡田　鶴丸さん何か1つお願ひします。

鶴丸　今南木さんが仰しやいました長尾さんの家は町家として古いものでございます。裏に揚店がありまして、入口からもう1つ格子戸があつて、誰が入つて來たか中から見えるやうになつて居まして店の間と奥への取合の中庭が玄關になつて居ります。

それから本間君が生きて居ります時分に與力屋敷を見に行かうと云ふ話がありまして、私の方は上町でございますが、玉造に鐵砲組の與力屋敷がありますので、行つて見ましたら、12それらしいものがありましたが入口は土塀で小さい門があります。片方は庭になつて居つて、突當りが小さい玄關になつて居りました。内部は入つて見る譯にも行きませぬので、其のまゝ歸りました。北區の同心町の屋敷も探して見ましたが、是も殘つて居りませぬ。唯1軒天理教か何かになつて居ります所がそれらしいやうです。鐵砲與力の屋敷と能く似て居りまして、前が土塀で、入つた所の左手が庭で突當りに小さい玄關がありまして皆平屋でございますが、それが1軒殘つて居つただけです。

どうも餘り大阪には侍の屋敷が殘つて居りませぬ。今府廳になつて居ります所は輜重兵舍の跡でございますが、あの邊は北組の奉行與力が居つた様です。東町御奉行趾の、今の衛戍病院には海鼠塀が殘つて居ります。今貿易館になつて居りますあの東の方が牢屋敷と言ひまして、今小學校になつて居りますが、監獄だつたらしいのです。それから貿易館の所は西町奉行所ですが、あそこに海鼠壁が殘つて居りました。それから御存じでせうが中之島の藏屋敷は本間君とも隨分調べて見ましたが、殆ど何も殘つて居りませぬ。昔の士族の邸宅は殆んど見つかりません。

明治初年の洋服

それから明治初年の洋館も調べて見ましたけれども、今殘つて居ります古いものでは、出入橋の西詰の所に今は何になつて居りますか、前は郵船會社の支店でしたが、其處にあります。それか

ら　明治天皇がお越しになつた富島町の税關が殘つて居ります。あの傍に天主堂が殘つて居ります是は前は煉瓦造でしたが、今は塗つてしまつて舊觀はありませんが、天井のドームなんかは面白い構造になつて居ります。

江崎　與力同心の跡は、私共の居ります隣の渡邊さんの門がさうですが。

南木　さうです。あれがさうでした。

江崎　あの冠木門になつて居るのが同心の屋敷の門ださうです。あれと同じ門を造幣局で拂下げる時に買はうと思つて居つた所が、何時の間にか壞してしまつて、惜しいことをしました。

玉置　渡邊さんと云ふのは何處ですか。

南木　新川崎町です。

江崎　櫻宮高等女學校の傍です。あの門だけは確かにさうらしいです。

南木　堀江にはまだ小さい昔ながらのお茶屋が殘つて居りますね。

鶴丸　堀江には殘つて居りませんが松島には昔の講釋小屋が一軒殘つてゐます。

南木　全然ありませぬ。

政岡　お話の途中ですが、冷房を落しましたので暑うございますから、上着をお取りになつて御ゆつくりとお話し願ひます。

瀧澤　冷房がなくなりましたので之をシツレイと言ふ。

岡田　松本さん、大分お調べのやうに伺つて居りますが。

松本　私は前々から、色々の會にも入れて頂きまして、暇があれば鄉土的資料を調べて居りますが、先程座長のお話のやうに鄉土建築と云ふ定義は瀧澤さんが何れお附け下さることにして……

瀧澤　そんなものは附けられないですよ（笑聲）

松本　附けられぬかも知れませぬが、斯う云ふことが鄉土建築と云ふお話の趣旨に副ふのぢやないかと云つたやうな意味で極く簡單にお話して見たいと思ひます。

鄉土建築の研究方法

大阪ほど史實に富んだ割に建築物の殘つて居るのが少い、是は結局木造建築であつたと云ふやうなことから、燒けたり腐つたりした譯ではないか。私は何時も斯う云ふ見方をして居ます。そして唯漠然と何處に古い寄席があるとか、民家の古いものがあると云ふやうなことではなしに、もう少し筋の通つた立場から見まして、其の由つて來た、或はさう云ふ要求に依つて建てられた建物、例へば京都から嘗て斯くの帝が熊野詣をなさると云ふやうな時に大阪を御通過になる。さうしてお宿をお取りになる。或は又各藩の大名達が參觀交代をして江戸に上る途中に宿泊をされた本陣とか或は又大阪城がかつて華やかなりし頃の武人住居とか、さう云ふものに關聯したものが殘つて居ないか、或は又近くは大阪が生んだ大文豪の近松巢林先生のあの作品に依つて謳はれた由緒のあるものが殘つて居ないか、或は義士に關係するものが何か殘つて居ないか、さう云ふ部類分けと言ひますか、さう云ふ見地から見たり調べたり長年やつて見て居るのでございますが、今に收獲らしい收獲はないのでございます。

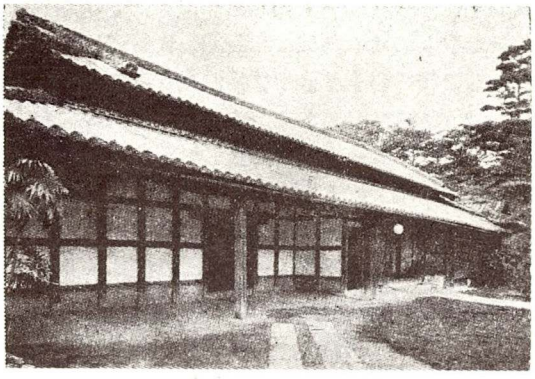
時代は前後しますが、大阪は古くは浪速と言ひ、神武天皇の御東征、或は神功皇后の三韓征伐、或は欽明天皇の佛教傳來、或は又仁德天皇の高津宮とか、さう云ふ時代は餘りに遠過ぎて、今日鄉土の建築としてどう斯うと言ふことが遠隔の地に鐵砲を打つやうにも感ぜられ、又悲しいかな遺跡として推定される所はあつても、建築其のものは殘つて居ない。佛寺建築の如きも正しくさうであります。是は特に造詣の深い池田谷さんが此處に居られますし、何れ大阪を中心とした現存せる佛寺建築の實情と云ふやうなことでお話があるのぢやないか。甚だ僭越なことを申上げるのですが、左樣に拜察しますので佛寺建築の方は差控へまして、主として住居に關するもので現存のもの、又特徵と見るべきもの、さう云つた方面にちよつと觸れて見たいと思ひます。

あの豪華なりし大阪城の出來た前後の住居は、今日大阪市內では見られないと言はれて居りますが、唯其の眞否は果してどうかと思ひますけれども、片桐且元が當時使つたと言はれるもので、現在夕陽丘町に極くさゝやかな住居——と言ふよりも寧ろ茶室が1つ殘つて居ります。是は嘗て我々協會員が調査しまして、會誌に發表したこともあるのであります。是は推定するのに恐らく桃山時代の建築物ではないか。事實さうであると致しますと、正しく鄉土の誇りの建物の1つではないか

と思ひます。

熊野詣の宿

其の他熊野詣での爲に大阪の近い所に帝がお立寄り遊ばしたと言ふ大阪の南の熊取谷と云ふ所に



助　松　本　陣

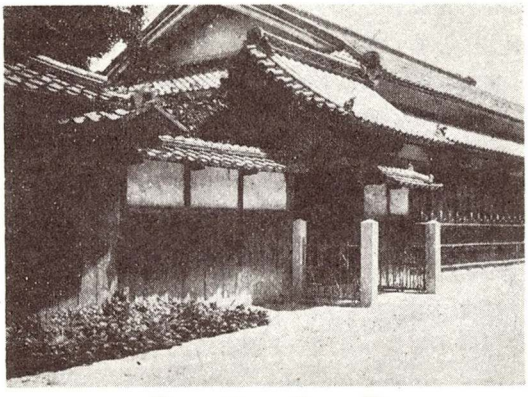
御門村と云ふ所があります。其處に仲と云ふ舊家がありますが、其の家に帝が御休憩になつた時に立てられたと云ふ門が今1つ殘つて居ります。此の門があるが爲に五門村と云ふ名前も附いたと云ふので、仲氏の取つて置きの門であります。

本　陣

諸大名があちらこちらに往復された場合に寄られた建物と云ふのは、私の知つて居る範圍に於ても大阪を中心として數軒現存して居るのであります。阪急の石橋の直ぐ近くにもありますし、椿の本陣もあります。さう云つた建物は大阪を中心としてもまだ相當に現存して居るやうに思はれる。元祿時代に於ける義士に關する建物としましては、萱野村に萱野三平の遺跡があります。是は見る影もなく荒れて居つたのを池田谷氏の復舊設計に依つて先般全く昔の狀態に復舊された譯であります。其の外第2飛行場の横に小阪田と云ふ所があります。其處に原惣右衛門と最も關係のある岡といふ家があります。其處に若干の史料がありまして、建物其のものは果して其の當時のものかどうか疑問の點もありますが、是は原惣右衛門の娘の家と云ふ謂はれ付きの家であります。

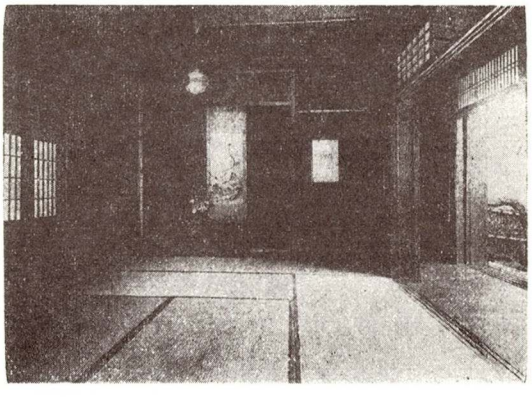
侍の屋敷

其の他鄉土色に富んだ家と致しましては泉北郡の上神村と云ふ所に小谷家あります。是は元和3年に建てたと言はれるのでありますから、正しく桃山末期と江戸前期の境目でありますが、其の豪華な建物が今日殘つて居ります。是は小谷城の記念建物だと言はれて居ります。それから北河內郡の門眞と云ふ所に伊達と云ふ醫學博士の家があります。元は葛岡と云ふ姓を名乘つて居られた。其處に聚樂第の1部分を正しく持つて來たものであると思はれる建物の1部が現存して居りますし、其處に色々な記錄もあります。是は誠に得難い史料の1つだと思ひます。



椿　の　本　陣

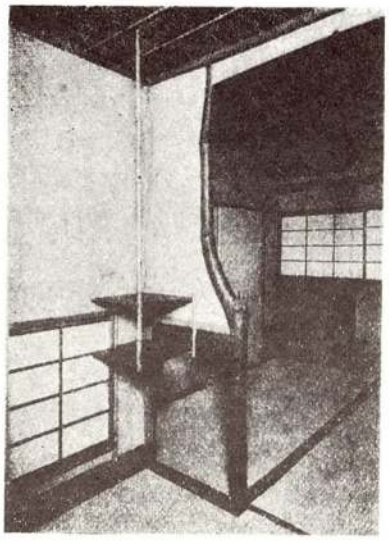
それから泉北郡の助松には田中氏の家がありまして、是も桃山末期の建物であらうと云ふ誠に結構な建物が殘つて居ります。又南河內郡の高鷲村にある皆さん御承知の吉村さんのお宅の如きは今日大阪に現存して居る鄉土的建物の殆どビカ一とも言はれる民家であります。是は遠く足利の末期



十　万　堂

であらうか、下つても桃山には違ひないと云ふ太鼓判を捺された結構な建物であります。何れに致しましても大阪を中心としさう云つた由緒ある建

物が殊に郊外に殘つて居ります。例の小西來山の十萬堂などは市內でありながら現存して居ると云ふことは誠に結構なことであります。併し14・5年前に改造されまして、今日では惜しい結果になつて居るやうであります。



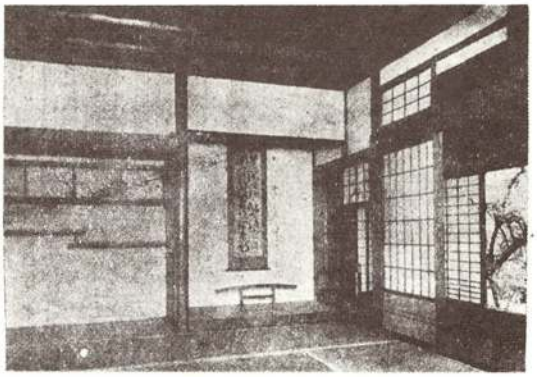
十万堂茶室

近松關係の遺蹟

近松先生の作品に依つて大阪の町人は開發されましたあの大文豪の作品の主題となつたものの緣故のある建物が大阪市內に今日幾らか殘つて居ると云ふことは、先程來數回お話にも出て居ります。新町の吉田屋です、建築物としましては現存して居るものは誠に1部分でありますけれども、結構な建物であります。同時に北の新地にあつた河庄の場所はありますけれども、其の當時の河庄の建物はもうないと思ひます。あの櫻橋から一直線に東行致しまして突當る所が、あの有名な天の網島の大長寺であります。其の間に於きまして大近松の作に現れて居る所を皆拾ひ上げましたら、殆ど10箇所もそれ以上もありませうが、惜しいかな、今日では建物らしい建物、或は又作品に現れて居る由緒的建物は此處だと云ふだけでありまして、今日現存して居る建物と言へば、僅かに吉田屋位ぢやないかと思ひます。

話は雜然と致しましたが、大阪には色々な目的に依つて色々な種類の建物が嘗ては相當澤山あつたやうであります。其の中で町人の町に武家の家と云ふものも恐らくあつたでありませう。私共の知つて居る範圍に於ては、今江崎先生宅の1軒置いて東隣の與力の長屋門の如きは大阪に於ける侍の住居の舊宅としましては、恐らく外に掛け替のない市內の由緒的建物ではないか、其の前の大鹽の家も今は造幣局が出來て、唯僅かに此處だと云ふ遺跡があるだけであります。其の外には目星しい侍の屋敷と云ふものは見られないのでありまして、唯僅かに先程申上げました大阪の郊外に於て點々として見られるだけであります。

尙大阪は今日市が段々膨脹しまして嘗ては郊外であつた所に、所謂農家が今に茅葺のまゝ散在し



助松本陣・奥の間

て居りますが、今天王寺附近にそれが數軒あります。海老江にも江戶時代の誠に結構な家が1軒殘つて居りますし是は勿論葛屋葺であります。

秩序なく甚だ下らぬことを申並べましたが、足らない所は又次々にお話し願ふことに致しませう。

南木　今の夕陽丘の家と云ふのは何處ですか。

池田谷　あれは天王寺區の六万體町です。眞田山への抜穴があると云ふので調査に行つたものですが。

南木　あれは茶室がありましたか、住んで居る人が變な人でしたね。

池田谷　抜穴は何も無かつたですが、不昧公好みの茶席があつて現在製藥の人か何か住んでゐる樣でした。

三十三間の棟木

江崎　今近松のお話がありましたが私は建築のことは分りませぬけれども、何處から材料を運んで來たかと云ふことに付きまして始終心掛けて居る譯ですが、『三十三間堂棟由來』は、實際今日の三十三間堂を建築した時に其の木を何處から持つて來たか分りませんが、あの淨瑠璃の出來たの

は享保ですか、近松のものでも後期のものらしいのですが、詰りあの淨瑠璃で其時分に新宮の木が京都に入つたと云ふことが證明出來ると思ひます。新宮の山奥の木を伐つて船で廻して京都へ持つて來たことがあつたに相違ない、さればこそ作者がそれを採り入れたので、我々の方でも其の點から面白い材料だと思つて居る次第であります。

序でに申しますが、材料のことでは私は始終氣になつて居るので、萬葉集の藤原の宮の歌を見ても、あの檜は江州の田上山から伐つたと云ふことが分つて居る。それから鎌倉時代の大佛建立には俊乘坊重源が周防の佐波川で其用材を伐つたことが分つて居るし、あの大佛殿の2本の虹梁は1本は赤松で、1本は姫小松でありますが、何れも長さ14間末口直徑3尺5寸程あります。是は2本共鹿兒島の霧島山から持つて來たと云ふことが記錄で分つて居る。是は隨分詳しいものが殘つて居ります。

材木の産地

それから京都の西本願寺の建築は、只今御料林になつて居る天龍川の枝川の水窪川の奥で伐つた。其御料林には今でもなかなか良い欅が澤山に殘つて居りまして、尺〆にして少なくも5萬や6萬はあると思ひます。又東本願寺の欅は朝鮮の濟州島で伐つたと言つて居る。どうか先刻も申上げたやうに材料の出所は明かにして貰はないと、臺灣の阿里山の木が到る處にばら撒かれて居るやうな譯で、木は海や川に浮かびますから、周防の佐波川の木が水に浮かんで運ばれたり、鹿兒島の霧島山の木が奈良へ來て居たりしてゐるのです。又是は申上げぬでも分つて居るが、黄檗山萬福寺の材料は皆隱元が持つて來たのですが、主要材は全部『チーク』です。さう云ふやうに木は水に浮かべられるから、えらい遠方まで行く、殊に近頃は便利だから臺灣檜が高野山の山の上までも行く譯です。是から、建築される時には是非材料の出所は明かにして置いて戴きたい。

松本　先お話のクサマキですが、福山城が用材全部クサマキを使つてありますね。

江崎　青森檜（椹）です。中尊寺の金色堂も青森檜（椹）です。青森檜（椹）の宣傳の爲に書いたものに福山城と光堂があります。

松本　石川縣金石は、例の錢屋五兵衛の出生の地ですが、あれが青森からどんどんクサマキを持つて來始めたとかで、北陸では今に多量にクサマキを使つて居るやうです。

江崎　あれは「クサマキ」ではなく皆青森檜即ち（ヒバ）であります。輪島塗の木地の材料も皆青森檜です。此の邊では「アテ」と言ひますが、福山城は即ち「アテ」を使つたのです。此の木は挿木が利くので、輪島邊りでも挿木をして造つて居ります。

池田谷　最近南部藥師寺の摩利支天堂と鐘樓堂に椹（ヒバ）葉を使ひました。

江崎　あれは木香はよろしくありませんけれども、なかなか腐さらないので、保存の點から云つて宜い木であります。

池田谷　それに安價です。併し建材の方面から言ふと遺憾な點があります。

江崎　私は青森に2年も居つて相當苦勞しましたが、北海道では良い建築は皆青森の檜の「ヒバ」を使つて居ります。

玉置　四天王寺の材料なんかも書いて殘して置くのですな。四天王寺も檜ですが、あれは殊更に脂を取りましたね。

江崎　それは早く腐るやうに祈つてお出でなる譯です。長く持たす爲にはやにを保存しないといけません。

玉置　私初め見た時には縦みたいな木を使つて



住　友　洋　館

居るやうに見えたので、是はどうしたのだと言つたら、檜のやにを脱いたと言ふのです。

池田谷　座敷なんかになると、やにが出て汚くなるから。

江崎　檜はやにが少いと綺麗に見へますが早く

腐つて來ます。伊勢の大神宮樣の建築に使つて居るのも、20年たたない中に腐つて居るものが隨分あります。

岡田　高橋さん、大分前に編輯の方を永く受持つて居られましたが、此頃の話でも何か1つ願ひます。

高橋　先程から色々お話がありますが、以前私が編輯をやつて居る時に古い家は、出來るだけ寫眞を撮つて置くとか、平面圖を拵へるとかして居りしたまが、今迄の雜誌の古いのにも殘つて居ります。精々ある中に將來も記錄に殘して置いて戴きたいと思ひます。

住友の洋館

それから先程ちよつと承りました住友の洋館の話ですが、大阪で1番古い洋館は例の造幣局の建築で、其の次が住友の洋館です。あれは明治何年でしたか忘れましたが、是も調べまして、其の時雜誌に載せて置きました。是は先代の八木甚兵衛と云ふ大工がイギリスの建築の雜誌を見たり神戸の居留地を見て歩いて、其の眞似をして極く簡單な眞4角な洋館を造つたのです。大工が洋館を造るので圖面もはつきり分らぬので、どうも變なものです。大體圖面が石造のものを木造でやつたので、1階の露臺になつて居るのもすつかり木のまゝで眞似てやつて居る。それから壁なんかも太皷張りにすると云ふことが分らなかつた爲ですが、昔の土藏造りを其の儘やります。其の後2回も3回も增築して居りまして、新しい所も出來て居りますが、大體は元のまゝです。最近修繕されましてどうなつて居るか分りませぬが、其の當時八木甚兵衛の小僧をして居つた虎公と云ふ者が生きて居りまして、それに色々聞いたのです。ほんの小僧の時ではつきりしたことが分らなかつたのです。年寄つても居りますし、忘れてしまつて分らなかつたのですが、色々聽いて段々古い記憶を甦らして話を聽いたやうなことですが、それも先般亡くなりました。それは記錄に取つて早速雜誌に載せて置きました。住友の當主があゝ云ふ方で、頻りにその雜誌の古いものがないかと言つて探して居られましたので差上げておきました。其の外に洋風の建築で明治初期に建つたものがないかと思つて注意して居りますが、市中にまだ少し殘つて居るのぢやないかと思ふのであります。本間君が生きて居る時分は市中を探して寫眞を撮つたりして居りました。先年2人で大阪の市內に現存して居る建物で先程色々お話のありました



應　接　室

民家でありますとか、初期洋風の資料を寫眞に撮つて、出版しようと云ふ話が段々進んで居りましたが、其の中本間君が亡くなりまして、其の計畫はなくなつてしまつたのですが、今でも惜しいと思ひます。

尙段々とあゝ云ふ古いものがなくなりますから適當な機關を通じて保存法をやつて戴くことを非常に希望して居るのであります。天王寺の美術館に倉屋敷の門を改造して保存せられて居ります。あゝ云ふ風な保存法も結構でありますが1つ大阪の民俗博物館とでも申しますか、さう云ふものが將來出來ましたら、其の古い建物を其のまゝ標本的に殘して戴くことになれば非常に結構ぢやないかと思ひます。

江崎　此の間新聞に出たことがあつたと思ひますが、高麗橋の郵便局の煉瓦造が古いと云ふ話を聞いて居ります。

無筋コンクリート

鶴丸　あれはずつと前になくなりました。

江崎　私ばかり喋つてゐるやうですが皆さんにお願ひしたいと思ひますのは、最新式のものに付て記錄を殘して置いて頂きたいと思ふのは、鐵が不足の爲に此の頃木筋コンクリートのものがぼつぼつ出來始めて居る。例へて見ると鴻池信託などは地下室は鐵筋を使つて居るけれども上は木骨です。是は今後どう云ふことになるか、私も分らぬけれども、竹中組がやつて居るので、調べて置いて戴きたいと思ひますね。私が知つて居る木骨コンクリートの建物の1番大きいのは高野山の寶物館です。あれは半分位しか出來て居りませぬが右の端が出來て左の端は金がないから出來て居りませぬ。內務省の技師が設計してやつた時に、高野山に鐵を上げたら金が掛かると云ふので木骨にした。此の頃は鐵が不自由だから、事に依ると全部、少くとも半分は木骨のものが出來て來るだらうと思ひますが、さう云ふものはあなた方の御專門の方で記錄に殘して置いて戴きたいと思ひます。

岡田　さう云ふものは今記錄にして居るやうです。竹を入れたのとかどうとか書いて居ります。

江崎　殘して置いたら、それがどの位保つか分るし面白いと思ひます。

岡田　瀧澤さん何か1つ願ひます。

瀧澤　さつきから鄉土建築とは何ぞやと云ふ風な歷史哲學の問題を押付けられるのですが御命令ならば手紙でお答へするとして、座談會ももう始まつて居るのだし、鄉土建築とは斯くの如きもので、今までのお話が鄉土建築にならないと云ふ事になると、話をぶち壞す事になつて、それも宜くないと云ふことになる譯です。又私は鄉土建築に就て何もやつて居ないのです。神戶の明治初期の洋風建築で、高橋さんの仰しやつたやうなものを主としてつつ突いて居りますが、明治以後の洋風建築は鄉土建築でなくてアンチ鄉土建築と云ふ事になりそうです。私のお話をすることは鄉土性を持たないでせうし、私自身が元來東京で育つた人間で、神戶へ來てから10年にもならぬので、寧ろ神戶の本當の鄉土的なことは井上新二さんにお願ひしなければならぬかと思ひますが、神戶を中心として明治初期の洋風建築の話なら又後程時間があつたら申上げます。

瀧澤　嘗て斯う云ふ本が出ました。（示す）（鄉土建築號」と云ふのですが、なかなか面白いと思ひます。

池田谷　神戶のことは大分以前から古塚君に賴んで居りまして、言ひ掛けてから15年も經つのですが、調べがなかなかにうまく捗らぬ樣です。

瀧澤　どうも私は子供の時に居ないので、學校に居つて窓から眺めて居るので机上の空論になるのですが、是は（示す）明治15年に出ましたもので「浪速の花」と云ふのです。是は能くあるものですけれども、ちよつと面白いと思ひます。是は（示す）明治22年のもので、割合に正確に書いてあります。

岡田　何と云ふ本ですか。

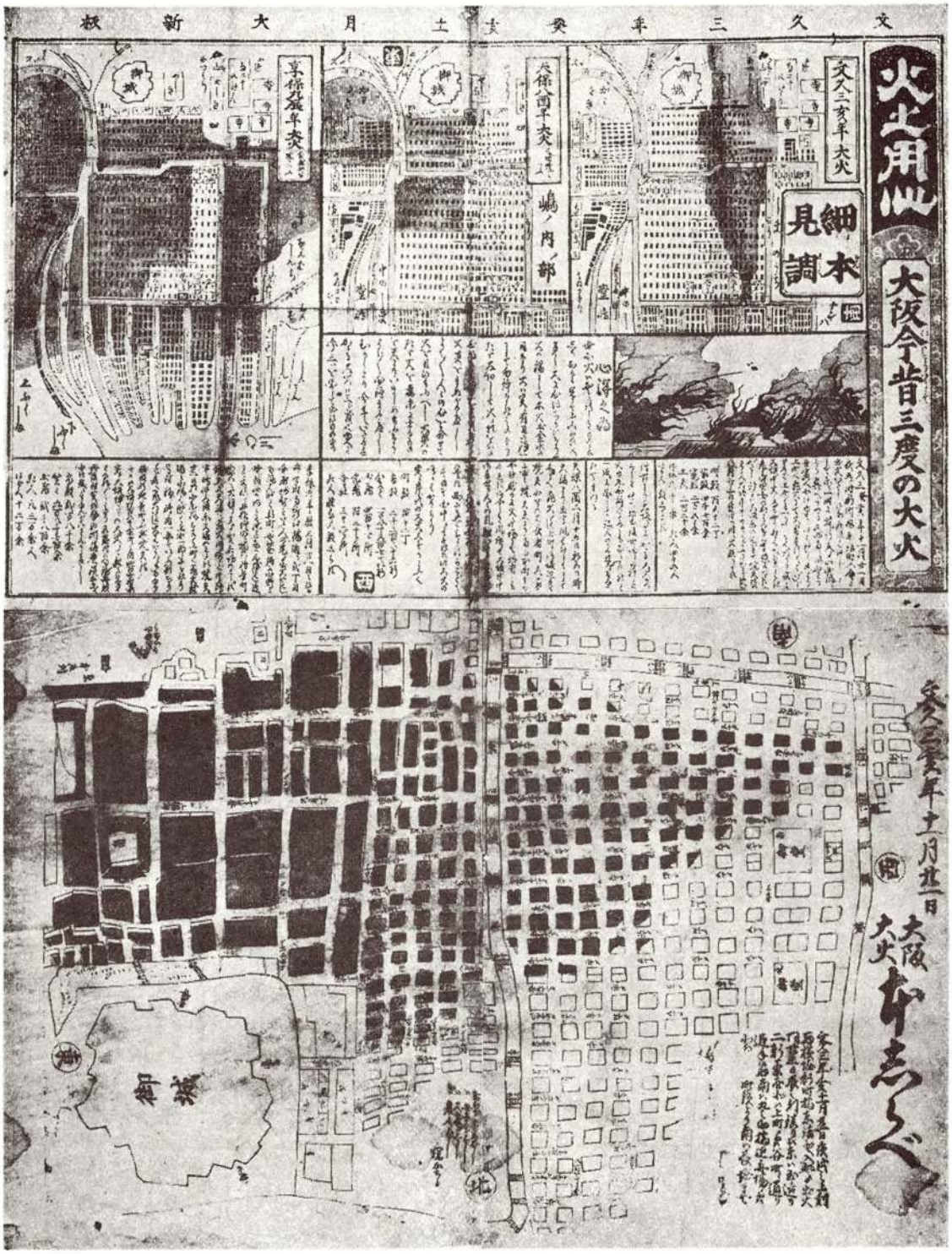
瀧澤　『日本名所圖繪』です。而も大阪から出版されて居るのです。大體寫眞を見て書いたらしいですが、圖が非常に嚴密です。

岡田　玉置さんにお願ひしますが、大阪は何度も火事に遭つて居りまして、昔からの火事の地圖を見ればと、大體どの邊が燒け殘つて居て鄉土建築が殘つて居るか分ると思ひます。玉置さんにさう云ふお話をお願ひしたいと思ひます。

大阪の火災

玉置　大阪は江戶とか京都から、見たら火事の度合は少いです。さう云ふ話をもつと前に伺つて居つたら、調べて來てお眼にかけるのでしたが此處に持つて居りますのは德川時代のものと、明治のも少し入つて居ります。年代の順を追ふて居ないのですが、此の圖を見ますと（示す）さつきお話のありました近松の關係のあります所は猛烈に燒けて居りますから、是は殘りつこはありませぬし、芝居關係は道頓堀が猛烈に燒けて居りますから、是も殘りつこはない。與力同心のお話がありましたが、與力や同心の屋敷のある所も餘程燒けて居りますから、殘りつこがない譯です。結局殘つて居りますのは、靱邊と上町です。此の邊には民家でも古いものがあります。

そこで一遍火事が行きますと、今度其の次に火事に堪へる爲にどう云ふ風な建築構造にしたら宜いかと云ふ工夫は始終あるものです。例へば1番近い例では北の大火の後に大阪で建築取締規則が

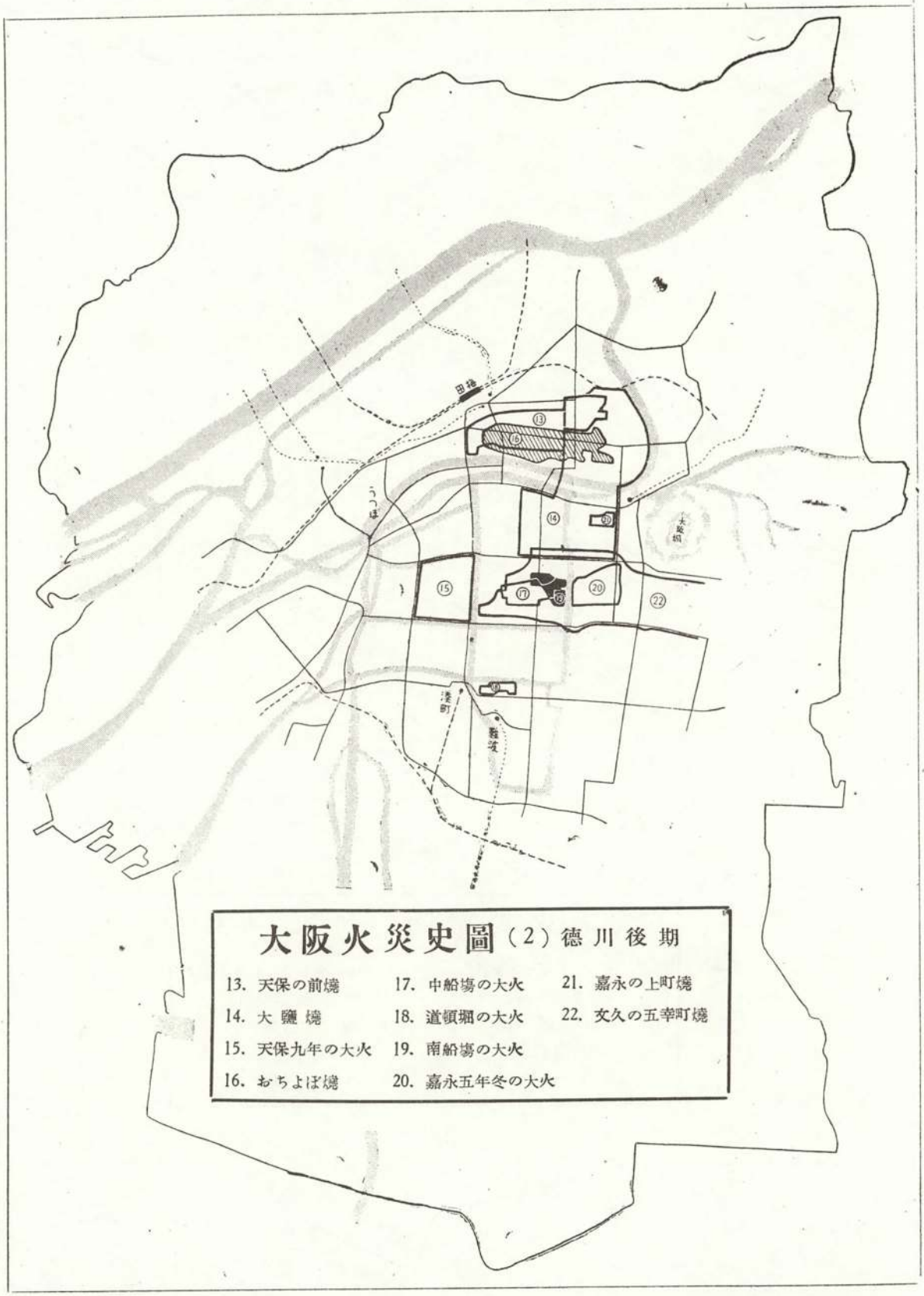

新板大判
文久三亥年 癸丑 十月大
火事用心
大阪今昔三度の大火
細見本調
文久三亥年大火
寛保元酉年大火
寛保元酉年大火
嶋ノ内ノ部
文久三亥年十月廿一日
大阪大火
北

當時の瓦版



大阪火災史圖（1）德川前・中期

1. 寶永の大火
2. 新町遊廓の大火
3. 曾根崎燒
4. 妙 智 燒
5. 延享の大火
6. 寶曆の大火
7. 安永の大火
8. 天明の大火
9. 寬政元年の大火
10. 寬政三年の大火
11. 寬政四年の大火
12. 文政の道頓堀燒



大阪火災史圖（2）德川後期

13. 天保の前燒
14. 大 鹽 燒
15. 天保九年の大火
16. おちよぼ燒
17. 中船場の大火
18. 道頓堀の大火
19. 南船場の大火
20. 嘉永五年冬の大火
21. 嘉永の上町燒
22. 文久の五幸町燒



大阪火災史圖 （3）明治年代

イ．座摩の大火（8年）
ロ．大西芝居の大火（9年）
ハ．新堀の丸燒（11年）
ニ．島の内燒（13年）
ホ．堀江燒（14年）
ヘ．本町曲り燒（17年）
ト．松島燒（18年）
チ．新町燒（23年）
リ．北の大火（42年）
ヌ．南の大火（45年）

出來まして建築構造がまるきり從來と違つたものになりました。私等今日歩いて見ましたら、此の家は北の大火で燃えたとか此の家は燃えないと云ふことが現場ではつきり分ります。昔の北の大火の地圖を見なくても現場で大火の區域が此處から此處と云ふことがはつきり言へます。例の京都の元治元年の火事も、今日京都に行つたら其の區域が分ります。鞏邊の家は他の方面の家とまるきり違ひます。鄉土建築を調べるのなら、此の地圖で見て燒けて居る所にはもう古いものがないと云ふことがはつきりして居ります。

瀧澤　此の地圖は大へん面白いですね。

玉置　實は私間違つて持つて參りまして、大阪の地圖が此處に餘りないのです。

是は（示す）昔の瓦版で、例の文久3年の火事です。是で見ますと、玉造邊には與力の古い家、同心の古い家はもうありませぬ。

此の圖は始終出て居るものですが、文久3年の火事の時に例の鐵砲燒けと兩方比較して出たものだらうと思ひます。

是は京都の地圖になりますけれども、町の眞中が元治元年にすつかり燒けて居りますから、京都の町の眞中で古い建物を探さうと思つてもありませぬ。貴族屋敷だけはぐるりで木で助かつて居りますので、此の中に古いものがあります。東本願寺も燒けて、西本願寺は殘つて居りますから、此の方には桃山時代のものも殘つて居ります。

之れでこんな所から調べて行つたら案外早く分るのでありまして、先の江崎先生の材料論から材料を見たら何時頃の佛像か分ると云ふのと同じだらうと思ひます。

岡田　木津の願泉寺と云ふのがありますね。あの邊はどうですか、伊達政宗が住んでゐた家と云ふ傳へになつて居ますが。

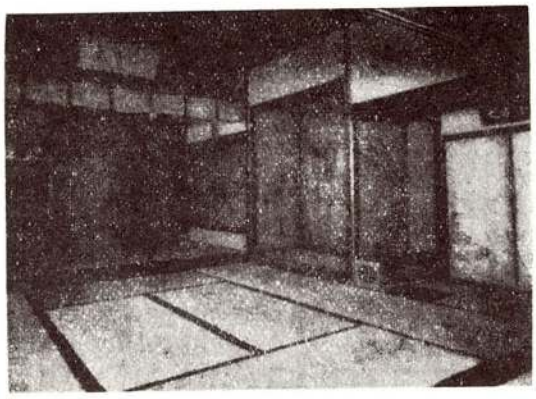
玉置　あれはもつと外になります。此の地圖で見ると、鞏難波の方は燒けて居りませぬ。

岡田　天王寺の一心寺にも家康が居たと云ふ茶室がありますね。

玉置　あれは燒けて居ないでせう。

南木　大阪で古いのは木津の願泉寺ですが鞏方面が殘つたのは當時家がなかつたのでばないのですか。

玉置　家はありました。



木津の願泉寺書院

高安　願教寺邊も燒けなかつたらしいので、願教寺の茶室の庭の苔は二百年になる、大阪で二百年の苔は此處だけしかないと云ふて梅上さんが自慢やつた。

岡田　是は寫眞に撮つて戴くと宜いですね。

玉置　是で見ると大阪はまだ鞏、天王寺、難波邊が燒殘つて居りますから、古いものがありますが、江戸へ行くと、度々燒けてもう殘つた所は一つもない。京都も町家は皆燒けまして加茂川から東、東山の方に少し殘つて居ります。元治元年に東山の方まで燒けたら京都は復興することは出來なかつたらうと思ふのです。明治の前ですから本願寺も特別の事由で復興したのですけれども、明治の例の廢佛思想華かなりし頃の思潮を受けたら、到底復興することはむつかしかつただらうと思ひます。

大阪灣沿岸の塗込家

先程高安先生とか江崎先生のお話になりました大阪の間取ですね。あれは實に惜しいと思ふのです。今日あれが段々なくなりますし、さつきお話になりました揚床机があり、家の一番端に皆水槽がありました。人造石か何かゞあつて其の上に用水桶が置いてあつた。あゝ云ふ風景がなくなりましたが、此の頃又防空演習で復活して來ました譯です。是だけ度々火事をやつて居りますから、大阪の鄉土建築に付ては火事の沿革を考へて行かなければなりませぬが、やはり火事に對する對策を考へて居つて、それが建築の特長になつて居ります。是は日本國中で殘つて宜い構造と思ふのです。此の間から私共の方でもやかましく言つて居るのですが、商店でも住家でも2階の表側はすつ

かり塗り潰して居りませね。さうして横に袖壁を附けて居るでせう。あの構造は大阪灣を取捲いた都市の特有になつて居ります。御承知の通り、京都へ參りますと、軒天井で赤茶色に塗つた木になつて居ります。高槻が京都の方に屬して居りますから、高槻の町には土塗りの家はありませぬ。平野は大阪に屬して居るから皆塗つて居ります。あの古いやり方は和歌山から始まりまして、佐野、岸和田、堺、大阪の町全體、尼ケ崎、西ノ宮、神戸まで塗つて居るのです。處が面白いことには、神戸から先、姫路まで行きますと、塗つて居ない家が大部分でありまして、塗つて居るものは稀で例外的のものだけが塗つて居ると云ふことになるのです。あれは大阪の鄕土建築としては非常な誇りと思ひます。

土　　藏

それからもう一つ先程浮世小路のお話がありましたが、土藏も大阪は日本一です。大阪程土藏の多い所はありませぬ。京都へ行つてもあれだけの土藏は迚もありませぬ。東京も震災で燒けた時に私は行つて居りましたが、迚も大阪程澤山ありませぬ。先程お話になりました間取なども特徴ですけれども、あの奥へ行くと、ちよつとした家でも必ず2戸前、3戸前位の藏がある。大抵1つや2つの藏はあります。高安先生のお家などはもつとあると思ひますが、5間間口位の家なら5つ位持つて居るのは珍しくありませぬ。それがまだ今殘つて居ります。併し軒裏を塗つたり藏があつたりしたものも此の頃はハイカラになりまして、皆他の燃え易いものに變へたり、土藏を潰して離れを拵へたりするのですが、それをされては困ると云ふので、躍氣になつて止めて居るのです。

松本　土藏が多いと云ふのは、大阪は江戸より物持が多かつたからでせうね。

玉置　それは其の土地の建築する時の慣習ではないかと思ひます。

岡田　それでは池田谷さん1つ。

池田谷　大分に皆さんのお話を承りまして、私の申上げる話もネタが盡きたかのやうに考へるのでありますが、先程からの序で話にちよつと1・2氣の附いたことを申上げます。

時代を段々溯つて行くことに致しますが、明治初期の洋館建築の古いものとして割り方世間に知られて居ないのは府廳の北にあります衛戍病院の建物と偕行社の建物です。材料の上から見ますと當時の洋館建築は必ず欅を使ふものと考へたかのやうに思はれます。柱は勿論階段の踏板にしてもものこと全部が欅です。今から考へると、お上の力でやつたと云ふこともありませうが、隨分贅澤だつたと思ふのです。

大 阪 の 民 家

それから民家としまして、此の附近の特徴のあるのは南河內方面です。平野から南河內の方へ入つて見ますと、段々大和風になりまして、古市を東へ越しますと、大和と同じやうになる。殊に南河內の駒ケ谷から國府方面はさう云ふ風になつて居ります。橿原神宮の驛もあゝ云ふ所へ思ひ附かれて鄕土色を織込まれたものと思ふのであります。次に大阪市中の民家でありますが、大體の地割は40間ブロツクの様でありまして、外觀で申しますと、比較的屋敷が小さくて、皆小ぢんまりして居る。是は士農工商と云つた德川時代の封建制度の考へ方で、田舍の農家は農業を營んで居る、町方はずつと商賣屋であるから、社會的地位と云ふものは1等下である。ですから、物持で長者番附に出て居るやうな家でも、屋敷なり構へは極く質素である。家の造作でも殊に長押を廻すとか、格天井とか或は建具などの引手でも、比較的質素なものが能く使はれて居る。併しながら見えない所には金持らしい豪奢なことをやつたものと思ふのであります。

其の一例としまして泉州の佐野に食野家と云ふ家がありました。是は住友さんの方からの緣談も提灯と吊鐘でお斷り申上げたと云ふ家でございます。其の邸宅の臺所を小學校の講堂に使つて居りましたのを先年町當局で何とか移轉改造したいと考へて居りましたが、諸種の事情上已むなく潰してしまつた。其の時に裁縫教室に使つて居つた椽側の板が皆欅の1枚板で幅3尺のものをずつと使つて居つた。床の間の天井は欅の格天井で、今でこそ床の間の天井に電氣を引いて明りを點けたりなんか致しますが、あの誰も覗き得ない所に格天井を用ひて居るのです。民家としては實に贅澤なものです。せめて何とか保存したいと思ひまして小學校の奉揭所の天井に使ひました。之は一例を擧げたのですが、さう云つたやうな工合で、外觀には金のあることを示さない。入口の門も極く小さいものです。中へ入ると臺所で50人100人の人が何時やつて來ても御飯を差上げるやうな設備萬端行屆いて居ります。

吉 村 家 其 の 他

農村の豪奢な建物としましては、先程松本さんもお話がありました中或は吉村などは隨分立派な

ものであります。之に劣らないもので2•3軒私の氣附いたものを御紹介申上げたいと思ひました。

熊取村に降井と云ふ家がありまして、此の家の



吉村邸外觀

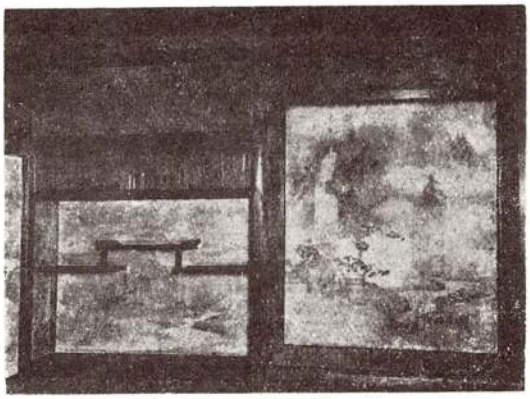
客殿が只今國寶に申請中でございますが、形式の整つて居りますことに付ては、先づ近畿地方の民家では1番立派なものかと思つて居ります。それからもう1つ貝塚町に婁と云ふ家があります。代々



降井家外觀

鄕土で地方の豪族でした。是もやはり敷地が2300坪もございませうか、敷地は大したことはなくても、鄕土の家として舊いものでございますから大名なんかゞ檢地に來るとか或は巡視とか云つたやうな時には宿泊されたと云ふ關係上50人や100人の宴遊會をしても何處でやつて居るのか分らないと云つたやうな豪奢振を示したものが現在殘つて居るのであります。

すつと舊く桃山時代よりも古いものの遺構かと思つて居りますが、南河內郡川上村河合寺の福田と云ふ古い農家が1軒殘つて居ります。それから大名關係、所謂武家關係のものでお城下と致しましては高槻、岸和田、狹山と云ふ藩があつた譯でありますが、漸く武家の町と云つた名殘を留めて居りますのは、岸和田であつて、土塀を廻らして居る家がありますが、突當りに玄關があつて、其の奥に勝手があり、駕籠にでも乘つて入り得られ



降井家書院

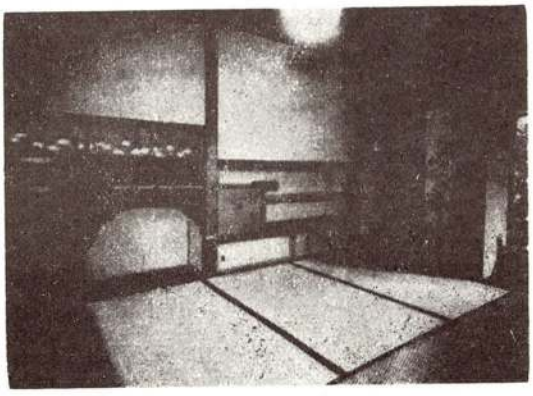
るやうな構へになつて居ります。狹山にもまだ多少面影の殘つて居るものがあるかと思つて居ります。



婁邸客殿

阿彌陀の二葉

それから大阪の料理屋なんかでも、徳川のすつ



阿彌陀池の二葉

と終り頃のものかと思ひますけれども、只今の阿彌陀池に二葉と云ふのがあります。あれなんかも

町人の家とは言ひながらも、多少趣の變つたものかと思ひます。

岡田　あの茶室は淀屋の別莊とか云ふことになつて居りますね。

池田谷　それは南木さんどうでせうかな。

南木　あれは大三輪長兵衛氏が淀屋の茶室を持つて來たのではないのでせうか、元祿・寶永當時としてはあの邊は別莊地帶とは思へませぬ。

岡田　大三輪さんは明治になつてからでせう。

南木　さうです。朝鮮貿易で儲けた人です。

岡田　傳えによりますと、淀屋の2代即ち淀五郎の父にあたる人が連歌や茶に詳しく、寛永の頃に建てたのが淀屋の席だそうです。この人が桃山の遺構を移建したことになつて居ますが、淀屋と茶、桃山の遺構の關係が不明だので先般調べて見ましたところ、淀屋の初代は北濱の材木屋で大阪陣の時家康の爲に茶臼山の陣を急造しその賞として八幡の地に300石を田畑山林でもらつた。八幡は御承知の松花堂が居り、又伏見奉行の小堀遠州も近くですから2代の人はこれと交友し、又干鰯の運上で巨富を積んだのです。これ等の關係で桃山の遺構を自分の屋敷へ移したのもあり得ることゝ思ひました。3代は辰五郎で元祿12年に追放されて居ますが、後に許されて八幡の舊領だけをもらひ餘世を送つた家が八幡にあります。二葉では辰五郎遺愛の席と云つて居ますが、辰五郎がこんな侘茶室を愛して居たら追放にもならなかつたでしやうと思ひます。

池田谷　建築物としては面白いと思ひます。

岡田　離家に豐公席と云つて桃山式の飾棚のある席がありますがあれを遺構と云つて居ます。

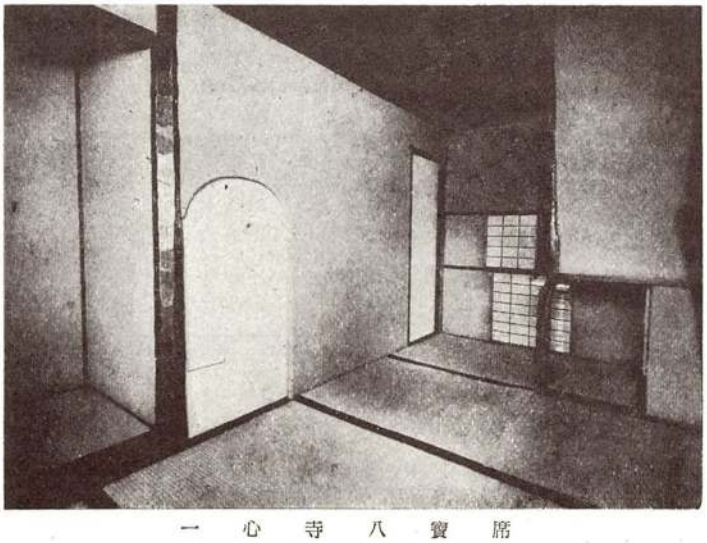
高安　一方ではあの家が阿彌陀池の領分を侵して居るのです。阿彌陀池はもつと廣かつたのが、其の家の都合で縮まつてしまつたのだと云ふことも聞いて居ります。

池田谷　それからお茶席で願泉寺のものは國寶になつて居りますが、まだなつて居ないもので相當なものは、一心寺の茶席であるとか、堺では南宗寺には實知庵以外に大黒庵があります。大きな丸窓があつて面白い席ですが、お寺の中に在りますお茶席ですから隨分傷んで居ります。



一心寺八寶席

す。大體茶室としては茅海の沿岸一帶に抹茶より煎茶の方が盛でありますから自然それが建築にも現れて居ります。



一心寺八寶席

それから先程の鴻池さんの別邸の椽桁なり敷居の6間も通つて居るのと並んで思ひ出しましたの

は、北の御堂さんの書院です。是も6間1本位のものを使つて居ります。

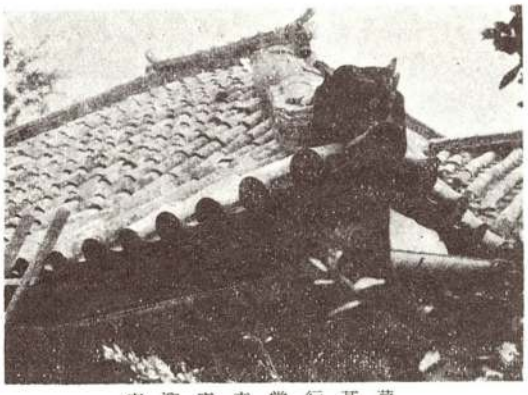
岡田　長いのが通つて居りましたね。

池田谷　私の氣の附いたのでは、先づ長いものとして良いものの代表になるかと思ひます。

それから先程松本さんが中さんのことを言はれましたので、ちよつと餘談になりますが、中さんから出た人で、大阪の新町に名所圖繪にちやんと繪まで載つて居ります菱蒿屋さんがありますが、其處の屋根は牡蠣殻を載せて防火の用にして居りました。

社　寺　建　築

それから寺とか宮とか云ふものの國寶に指定されました建造物は、既に皆さん御存じのことかと



來迎寺本堂行基葺

思ひますので申上げないことに致しますが、唯大阪府で1番古いものと言ふよりは、全國的に見ま



來迎寺本堂鬼瓦

して屋根の瓦の葺き方の珍しいものが一つあります。それは熊取村の和田と云ふ所に來迎寺と云ふ禪寺がありまして、此處に應永30年と云ふ在銘の鬼瓦がありますが、應永の銘のある鬼瓦は1番古いのではないかと思ひます。此の瓦を使つて枌木葺になつて居ります、泉南の釘無堂などは國寶に指定されて居りますが、指定されて居ないもので而も應永時代の行基葺のものは大へん珍しいと思ひます。是は皆さんもお手隙きがあつたら御覽になれば結構と思ひます。

それから德川の初期、元和を中心と致しまして社寺建築が澤山殘つて居ります。泉南郡の大土村に火走神社と云ふのがあります。此の本殿なんかも擬寶珠に元和元年の銘が殘つて居ります。それから長野町の驛前にある長野神社、是は餘程古いもので桃山より少し上るのではないかと思ひます。それから泉南郡の西鳥取村にある波太神社、是も寛永の銘があります。それから北攝の池田の池田神社、是なんかもはつきりしたもので、慶長の銘まであります。それから南田邊の法樂寺、是は平重盛に關係がありますが、書院に桑の1枚板が使つてある。是も相當豪奢なもので、長さははつきりしたことは忘れましたが、2間半位あります。是なんかも書院造の使用材料の珍しい點から注意されて宜いと思つて居ります。

それから寺の門では家原の文珠さんの南の門が書いたものには天平とありますけれども、天平あたりのものが殘つて居るものではありませぬ。併し足利には間違ひないと思つて居ります。それから南河內郡加賀田村の岩湧寺の多寶塔、是も桃山のもので、修理は隨分行はれて居りますけれども、良いものの1つと思ひます。それから一心寺の東の門は玉造の黑門を持つて來たので、大阪ではあゝ云ふ城廓建築の遺物と思はれるやうなものが少くないのですが、是も珍しいと思ひます。先年關野博士が御在世中に大阪城の建物を1つ國寶に指定しようぢやないかと云ふので、實はお伴をして調べたことがあります。當時陸軍の方では軍事關係のものをさう云ふことで縛られることは困るから、誰がどう言つた所で反對だと云ふことでありましたが調べることだけは許すと云ふので、辛うじて調査した譯であります。

大　阪　の　家

先程の防火建築の話に戻りますが、大阪の建物は幾度かの大火に出逢つた關係もございますが、家の造りがどうも質素で華美を去つて居り、千篇一律で何等特徵と云ふものがなく、何處の家でも

同じやうな造りになつてつ居たかのやうに思はれるのであります。土藏の出來ましたのは勿論火事の關係もございましたが、大阪は所謂富の都、經濟の都と云ふことを昔から物語つて居る反證かと思ふのであります。例へば呉服の問屋にしましても、夏物と冬物とを入替へたり、或は書畫骨董を所藏する爲の土藏が多かつたと思ひます。昔から幕府の方面に於ても、何時も大阪には眼を着けて居つて、いざ金が入用と云ふ時には、早飛脚を立てゝ金の無心に來るのは大阪であつた。ですから餘り目立たないやうに質素にして、幕府の忌避に觸れないやうにと競爭的に考へた爲にあゝ云ふ地味な建築になつたのではないか、さう云ふ立場から私は考へて見た譯なんであります。一つ一つの建物に就て構造や樣式・特徴などを、お話致し度いのですが、時間が許されてゐない樣ですから、極めて簡單でありますが之位で御勘辨願ひます。

岡田　おしまひに井上さん1つ。

井上　鄕土建築に付きましては大分皆さんから色々のお話がありましたので、今更樣子の分らない私が蛇足を加へることもどうかと思ひますので餘談的のことを2・3お話して見たいと思ひます。餘興と云ふやうな意味でお聽き取り願ひます。

大阪府廳建築物語

今の大手前の府廳が出來ます時に、私設計に當つたのでありますが、大正12年位から約1年間杭打作業をやつたのであります。其の時に今の地下室を造る爲に掘り方を大分やつたのでありますが掘つて居る中から隨分色々なものが飛出しまして、當時新聞にも出まして相當問題になつたのでありますが、輜重兵隊の跡で、建物の關係から地盤の關係が十分に分らなかつた。昔の地圖を調べれば大體分る譯ですが、あそこに東橫堀に流れ込む川があつたやうで、丁度あそこが深みになつて居つた關係からか、色々のものが出て來たのであります。

其の掘出して來たものの中に、瓦に相當厚味のある金を張つものがありました。是は鑌金ではなく、張金のものでありまして、隨分派手な瓦でありますが、色々聽いて見ると、秀吉と云ふ人は派手好みの人であり、淀君も派手な女であつたらしいのですが、あゝ云ふ瓦で葺いた御殿があつたことから考へても、相當派手なものであつたらうと想像が附きますが、さう云ふ瓦が大分出ました。

それから石に下り藤の紋だとか色々紋のあるものが出て來ました。それは大阪城の石垣に積んである石にもさう云ふものが時々見られるのでありまして、出て來た時には大して注意もしなかつたのですが、大手前高女の校長さんがちよつとさう云ふことが多少分るので、呼んで來て見せた處が是は大したものだ、大阪城築城の時には諸國の大名が相當色々の石を寄進したが、それが現場でごちやごちやになると困るから、寄進した石にはそれぞれ大名の定紋を附けて石屋に運ばせたと云ふ話があるが、是はそれ等の大名の紋らしいものが附いて居り、大したものだから大事にして置かなければならぬと云ふ話で、どれ位値打があるものだらうかと聽きますと、どうしても骨董價値から言つて 200圓位するだらうと云ふことでした。其の話を府會議員の連中が聞込みまして何とか分けて呉れぬかと云ふ譯で、押寄せて參りましたが、其の後もさう云ふ石が又ぼつぼつ出て來まして、2・3人の宿直では夜中に盜まれる處があると云ふので宿直を殖しまして、其の石の番をさせました、處が又後からさう云ふ石が出て來まして餘り澤山出るし、更にしまひには短形にキとか山形にヤとか何だか材木屋のマークのやうなものが附いたのが時々出て來るので、大分怪しくなりまして其の石に果して 200圓の價値があるものかどうか疑問を持つやうになりました。それで又大手前高女の校長さんに來て貰つて見せると、斯う出たら骨董價値が落ちる（笑聲）と云ふやうな話でしたが石にそれぞれ大名の定紋が打つてあつたのは確かだと思ひます。さう思つて見ますと丁度今の府廳の橫に溝石があるのですが、すつと見て歩きますと、それにもやはりそれぞれマークが打つてあります。今はもう面倒臭いから府廳の表玄關の溝はコンクリートで伏せましたが、其處に南無妙法蓮華經の御題目を彫つた相當大きな石があります。是は加藤清正の寄進した石ではないかと思ひます。又掘つて居る土の中から古ぼけた細長い德利のやうなものが出て來ました。それで其の方に詳しい人に見て戴きましたらどうも千利休が持つて居つた德利に似て居る、或は千利休が愛用して居つたものではなからうかと云ふやうなことで、

其の德利も危險なことがないでもないし、博物館へ持つて行つたことがあります。

米松と喘息

それから是は高安先生の方が能く御存じだらうと思ひますが、先程から材料のことに付て江崎先生から數々のお話がありまして、非常に面白く聽いたのでありますが、材木から、所謂特異質と言ひますか、人間の身體に影響する氣體が立つ。例へば樹のやにが相當人間の身體に影響するのではないかと思ひますが、檜は非常にやにが多い、杉からも出ると云ふお話を伺つたのですが、それに依つて喘息が能く出ると云ふ話を聽くのであります。其の最も甚しい例は米松てす。米松が日本に盛に來た當時、借家は殆ど米松で出來ました。處がそれに住んで居る人から隨分喘息患者が出たのであります。併し初めはどう云ふ譯で出たのか分りませぬでしたが、さう云ふ患者を病院に收容して置くと、何時の間にやら癒るのでありますが、癒つたからと云ふので家へ歸へらすと、又始まるどうも妙だ、不思議だと云ふので、色々研究された結果、米松の吹き出すやにの影響があるのではなからうかと云ふので、米松を挽きました挽粉を箱の中に入れまして、入院して居る其の患者に箱の中の米松の粉を30分ばかりいぢらして置きますと、其の晩非常に喘息が出ると云ふことが分つた。米松は非常に特異質の人に喘息を起し易い、是は米松が最も激しいやうであります。是はアメリカ物が激しくて日本のものに少いので結構ですが、日本のものにも米松ほど激しくはありませぬが、此の傾向があると云ふことを聞いたことがあります。

木骨コンクリート

それから江崎先生は大分木骨コンクリートに興味をお持ちのやうですが、實は私等の方から見まして、あの構造は非常に困つたものだと思つて居ります。防火地區では木造は建たぬが、鐵がないから骨が使はれないと云ふ時でありますので、それでは防火地區に家は建たぬと云ふことになります。それで已むを得ず木骨でやりたいと言はれる時には、やつて戴くことにして居りますが成程木骨コンクリートは火事には强いけれども地震には餘り自信が持てないのであります。それは煉瓦造よりは確かにましだと思ひますが、普通の鐵筋コンクリートほど地震に對してしつかりした構造と言ふ譯ではないのでありまして、耐震的に非常に缺陷を持つて居る構造であります。お負けに鐵筋コンクリートでやるよりも工費が非常に高く附くことになります。又大體此の鐵筋コンクリートの建物が出來ないと云ふことは鐵材を節約すると云ふ國策的の行き方で今抑へられて居りますが、木筋コンクリートは中に澤山針金を入れます。詰り地震に耐へるやうにする爲には、相當針金を入れなければならぬ。處がさう云ふことになりますと鐵筋として使ひます鐵の量と、木筋コンクリートに入れます針金の鐵の量と殆ど同じ位入れなければ、地震に對して比較的安心だと云ふものは出來ない。要するに鐵材だから手廻り難い、針金だから手廻り宜いと云ふので、あゝ云ふ構造が出來たのでせうが、國策的に考へて見ると、やはりあの構造は面白くないと云ふことも言へる。コンクリートの厚味が大きくなりますから、針金を入れますが、それは資材の上から言つても面白くない。唯現在では已むを得ないからやらして居ると云ふだけであります。だからあゝ云ふ構造は何時かの機會に止めさせることが出來れば非常に結構だと思ひます。

杉に就いて

江崎　今の米松の話ですが、此の前も私は大分ひどいと云ふ話を聞きました。日本の木に付ては餘り知らぬが、米松だとひどく喘息に罹つて困つたと云ふ話を大分聽かされて居るのです。米松の性質を研究したら面白いと思ひますが、杉の研究をした人には木村彦衛門さん等がありました。既に故人になられましたが、杉材が日本酒に及ぼす影響と云ふのが其の博士論文でしたが、夫れは建築上には關係がありませんが、人間の衛生上には非常に影響があります。例へばヨーロツパや亞米利加で出來る酒は總て「オーク」材即ち日本の楢材を用ひなければならぬ。葡萄酒にしてもウイスキーにしてもブランデーにしても、亦「ビール」にしても樽は皆オーク材です。日本では杉ですが、どうもをかしいのは其材の働きで、例へて見ると日本では杉の産地と言ふと、秋田にも澤山あり。又九州にも亦四國にも至る所杉は澤山ありますけ

れども、吉野杉でなければならぬ。酒を造るのに皆吉野の杉を使つて居ります。近頃は滿洲や「アメリカ」までも吉野杉が行つて居ります。此の杉の學術名は、クリプトメリヤ、ヤポニカと云ふのですが、實は私は放送を賴まれた時に木村君の所へ質問に行つた。君は杉の酒に及ぼす物質を「スギニーン」と「クリプトメニーン」の二つを摑まつて居られます。私が見ると、まだ種々のものを杉材は含んで居る。俗に曰ふ木灘と色とがあります。是は何れも大いに酒に影響をして居るのだが、どうだと言つて質問したら頭を掻いて、ある、ある、まだ澤山あるけれども、よう摑まへられなかつたと言ふて居られました。木灘や色がどんなに强いものであるかと云ふことは、名古屋の白鳥貯木場などで見ると能く分ります。昔は木曾から木材を名古屋まで出すに約1ケ年間も掛かつて木曾川を水に浮べて流してきて熱田の白鳥貯木場へ入れて置くのです。さうすると1箇月も經つたら、其處の堀の水の色が醬油の如くなります。それは木から出る灘と色とです。處が建築家の方では、木を水の中に唯漬けて置くが、宮內省の貯木場では洗桶と申して6尺なら6尺、1丈なれば1丈の水深を絶えず保つやうにしてあつて其內に木を貯へるのです。其水の中に浸してある木でも月日を重ねると其木の上に塵が溜まるのでそれをどんどん洗はして積替へて行く、內匠寮の技師に聽いて見ますと10年もそうしてあるそうです。非常に高いものになりますが、宮內省では此の如き材を使ふから色も艶も佳い。狂ひも來ないと云ふことです。さう云ふ贅澤な話を聽きましたが、其の時に猿江（東京本所）の貯木場へ行つて其の藏の中を見て一番驚いたのは「ネヅコ」の板が澤山あります。木曾の御料林で昔から申して居ります、五木の一つで「アスナロー」と檜の中間位の木ですが、材の色が鼠色をして居る。其のネヅコの板が澤山あつたのです。それから米松の長い10間もあるやうなもので挽いたものがある。此のネヅコの來歷を聽いて見た處が、是は建築家に研究を願つて見たい、又我々の方でも學問上研究して見ても宜いと思ふのは、ネヅコの板は聲を通さぬと云ふのです。それで幕府の御用部屋、即ち內閣會議をする部屋は、外へ聲が洩れぬやうにネヅコ板で張つたと云ふのです。それは傳說だか實際だか實驗して見ないから分らないが、此のネヅコの板は兎に角名木です。木曾の材で檜、ネヅコ、アスナロー、槇、椹、之を木曾の五木と言ふ。ネヅコは外に見ないけれど、木曾には澤山ある。それから此處にある米松は勝海舟が威臨丸でアメリカへ行つた時に持つて歸つたと云ふものです。是は歷史的に面白いから大事に保存してくれと言つて置いたきりになつて居りますが、材木の話に付て御參考迄に申上げて置きます。

高安　米松は何時頃から輸入されて使はれたのですか。

江崎　調べて見ないとまだ分りませぬ。

高安　今お話がありましたが、喘息と云ふものは何かの刺戟に依つて起される場合が多く、其の刺戟に敏感なものはいつもそれに依つて起される。だから文獻で見ても枯草の臭ひに依つて起つたとかさう云ふ例もあつて、個人的のものですから、米松の臭ひとか、やにか何か知らんの揮發性の刺戟があつて、それに觸れると、喘息になると云ふことは確かにあり得る。

其の一つの例を知つて居りますが、それが米松でないか知らぬと思つて、今のお話を聽いて居たのですが65～6で死んだ婆さんがありました、40年も50年も喘息であると云ふ人がある。是は尼ケ崎の人です。其の時分其家の裏に人造眞珠の色を着ける工場がありました。あれが非常に臭い、我々は行つたら閉口する。併し本人はそんなに感じないのです。それでこんな土地に居たらいかぬから郊外へ行けと云ふので、武庫川邊に家を建てゝ行つた。却つて喘息が起るのです。それが甚しいので、是は武庫川の土地が合はぬのだらうと解釋した。實際をかしいと思つて居つたのですが、しまひにそれが分つたのは、離れを拵へて其處へ入れた。そしたら一遍に起つた。是は材木が新しいので其の刺戟が惡かつたのでした。

それから大阪の此病人の弟さんが辨護士をやつて居る。それが新地の元五郎が居つた家の奥にありますが其の隣りの方で袋露路です。あそこはぐるりが雪隱で圍まれて居る。其處に事務所が洋館で建つて居つた。臭くて堪まらぬが其の人は其處へ行くとどうもないのです。是は刺戟が反對に作

用したのでしやうが、喘息はさう云ふものです。

江崎　米松は本當に困つたと云ふ話を最近聽いて居る。

瀧澤　內閣書記官長の官舍でしたか、歷代喘息に罹かる原因を調べて見たら、米松だつたと云ふことが餘程古い新聞に出て居りました。

チーク材

江崎　是は皆さんにもお願ひして置きたいのでありますが、未だに見付からないで、何處かにありはしないかと思ふのは、角倉了意などが活躍した時の八幡船とか、天龍寺船が大分チークを持つて歸つて居ないかと思ふのです。黃檗山の建築は前に述べた如くチークですが、角倉了意の板碑が又チークで出來て居り夫れが嵐山の大悲閣にあります。大悲閣で見せてくれと言つて見せて貰ふと夫れは長さ5尺以上で、幅が3尺以上厚さは7•8寸の相當大きいチーク材であります。是は角倉了意が天龍寺船で持つて來たものには相違ないのでそれに碑文が書いてある。是は嵐山の大悲閣まで行つて御覽になつたら能く分ります。さう云ふやうなもので何處かに使つてあるものがまだありはせぬかと思つて居るのです。京阪地方には探せばありはしないかと思ひます。尙近頃はなくなりましたが、今から30年程前大阪に來た時、火鉢や煙草盆を買つたら皆チークで出來て居つた。是は其の當時大日本山林會に標本として送つてやりましたが、私の家にもまだ三つも四つもあります。段々調べて見ると是は廢船を大阪あたりで處分して其のデツキとか何かの材をそれに使つたのです。

南木　大阪には明治時代チークばかり商つて居た店がありました。煙草盆から机、茶棚總てチーク材です。もう35•6年前になりますが。

池田谷　富島町の教會に使つてありますね。

南木　天主堂ですね。宗教建築としては代表的のものでせうね。

瀧澤　多武峰の談山神社の塔は藤原鎌足の子が支那へ行つて建築材料を九分通り用意して來て、一分は足りなかつたが、大體支那の材料で建てたと云ふ話がありますが、果してそれが傳說通りのものかどうか……。

江崎　支那には良い材は一つもないのです。さうしてチークと云ふのは、安南か印度から支那へ輸入して來るものです。福州には杉も松もありますけれども、大建築はやはり安南の方から支那へ持つて來るチークで造つて居るに違ひない。それで隱元禪師は安南あたりから、將軍の援助もあつたから、チークを持つて來て支那風に黃檗を建てたのです。

南木　柱に貝殼の著いたものがありますね。

佛像の材料

江崎　注意して御覽になると分ります。尙材料論に付て建築に關係はありませぬが、會津に行きますと、あの平野に弘仁佛ばかりが50幾體もありまして皆國寶になつて居ります。私は常勝寺と云ふ寺へ一人で行つて見て來ましたが、其處には驚く勿れ國寶の弘仁佛が126體もあります。1體を除くの外は全部欅で造られてあります。材料論をやかましく言ふと、德一と云ふ東大寺の坊さんが議論が好きで、弘法大師とは仲が好かつたが、同僚と喧嘩して東大寺に居れぬことになつて、會津へ行つたが、あそこは平野が豐饒で、總ての物資が多いから、あの平野だけ開けた。此處が欅の非常に多い所で、此處にある佛像は彫刻した人は京都から行つて會津で造つたものだと云ふ鑑定が着くのです。それは材料が會津のものであるからです。

それからもう一つは、岩手縣と秋田縣の境に淨法寺と云ふ寺がある。此の寺にやはり弘仁佛がある。東北大學の福井さんに嘗て材料論の話をしたら、是は木理を調べて見ると、奥羽から北海道あたりにある所の栓で出來て居る。だから工人が京都から彼の地に行つて造つたと云ふことが言へる。處が若し京都で造つて持つて行つたのなら弘仁佛は必ず全部が檜でなくてはなりませんと思ひます。併し今日殘つて居る弘仁佛の內には京阪地方にも欅で造つたものがある。法隆寺や法輪寺の弘仁佛の內にもありますし、海老江の或寺にも2つばかりありますそうです。それで京都地方でも欅を使つたと云ふ想像は着きますけれども、會津の私の見た前の寺の佛像に至つては全部欅で、1體が違つて居るだけです。

それから是は皆に賴んで知らして戴きたいのは私も昔參つた時には氣が附きませんでしたが、中尊寺の光堂にある阿彌陀さんは藤原期のもので大

原の三千院にあるものと一緒のものだと云ふことですが。あの佛様の材料が青森檜即ち「ヒバ」なら、工人が京都から行つて造つたと云ふことになる。若し檜なら京都から造つて持つて行つたと云ふことになる。それは材料に依つて此處で出來たか、何處で出來たかゞ分るのです。

それから京都の東寺の塔頭の觀智院と云ふ寺がありますが。其處に五大虛空像があります。あれは安祥寺にあつたものを持つて來たものだと云ふのです。是は私は巨細に見ました。成る程彫刻は極く粗末で古いもので晩唐時代のものであらうと思ひますが。木の缺けて居る所を見ると日本の木ではない。又五大虛空像の乘つて居らるる牛や馬が大分修理してあります。其修理したものを巨細に見ると夫れは皆檜です。此の虛空像の本體の日本の木でないことは確なれど夫れが何木であるかは不明である一寸見た處ではチークらしい。併しチークと云ふ斷定は能うしないが、若し削らしてくれたら、顯微鏡で鑑定が着きます、それで支那からあの五大虛空像を持つて來て、手が取れ足が取れたのを日本で修理したと云ふことは其使用した材料で分るのです。

又法隆寺の金堂にある佛像の天蓋に附いて居る天人鳳凰は飛鳥と鎌倉と2種類ある。見た所では其の區別が附かぬ。併し夫れは材料で區別がつきます。飛鳥なら樟、鎌倉なら檜です。又ものゝ古びさを見定むることを武田五一博士が研究して發表されましたが、武田博士は之を何で研究されたかと聞きますと、矢張り木材で研究されたそうです。大體 100年位までは古さがよく分りますが、200年、300年と經つとなかなか判然と區別が附かぬそうです。

同じ木でも先刻申上げたやうに、木曾で同じ場所で同時に伐つた木でも、やにつこい木とやにつこくない木で腐り方が違ひます。木の古さでは200年のものと300年のものとの判定が着かぬ。それは其の記錄とか他のことから研究して來ないと分らぬことであります。

それで材料論と云ふことを近頃私はよく言ふのですが若し新しく建築されましたら、何處の材料を持つて來たかと云ふことは必ず書いて置いて戴きたい。

玉置　飛鳥時分に樟がどうして來て居るのですか。

江崎　六期の初めあつちから渡つたものは白檀の佛像です。其白檀の佛像は今殆んどないのはどうしたかと云ふと、皆香にしてしまつたのだ。香にして賣つた方が利益だから皆賣つたのです。黃金佛も純金のものは熔かしたので殆どありませぬ。皆坊主が潰したのです。日本には白檀がない樟が日本にあつて、それが白檀に一番近いと云ふので樟でやつたものと思ひます。夫れは樟には香があるからだと思ひます。

瀧澤　それは內地だけにしかないのですか。

江崎　朝鮮にも北支にもありませぬ。樟は南支那の1部にはありますが日本には南は臺灣から黑潮の影響を受ける九州、四國から紀州、東京まであります。東京以北にはありませぬ。

岡田　それではこれで座談會を終ります、どうも色々有難うございました。

各種簡易

防空暗幕

迅速・安價・設計・施工

新案

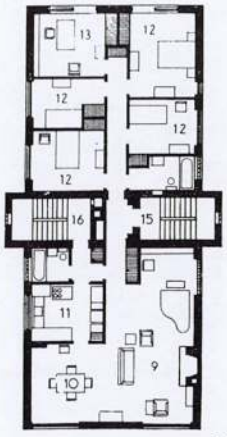
田中式防空遮光暗幕

工場用遮光・通風・換氣兼用

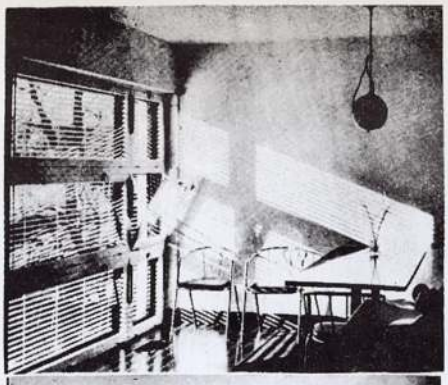
田中商會

大阪市北區堂島船大工町二〇

電話北㊱7186番

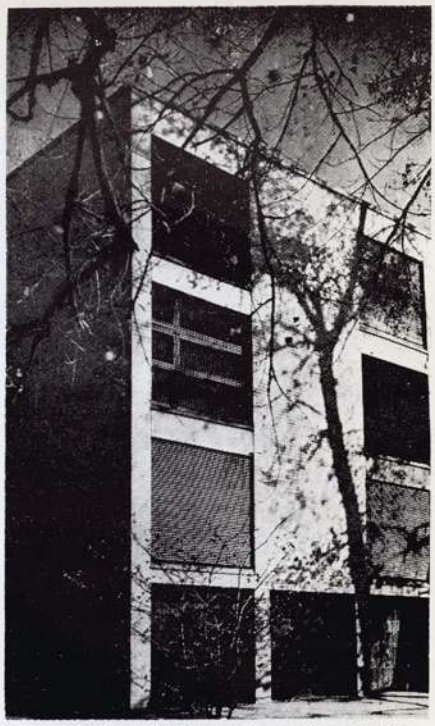


第2階・平面圖





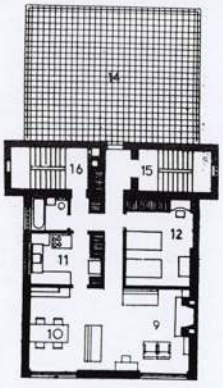
上・第2階のアパートの食堂
下・第3階のアパートの居間



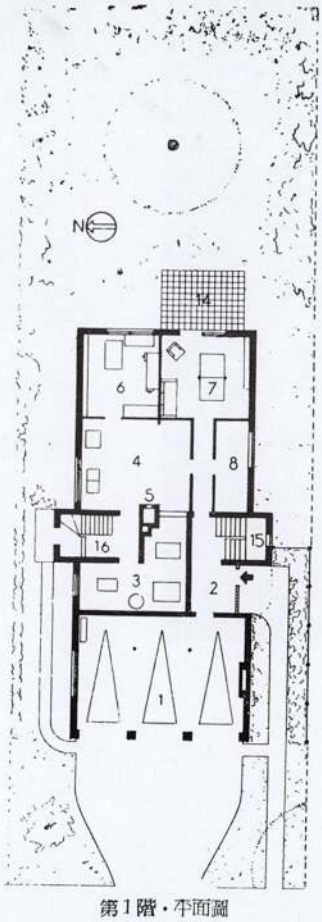
正面外觀（階下はガレーヂになつてゐる）



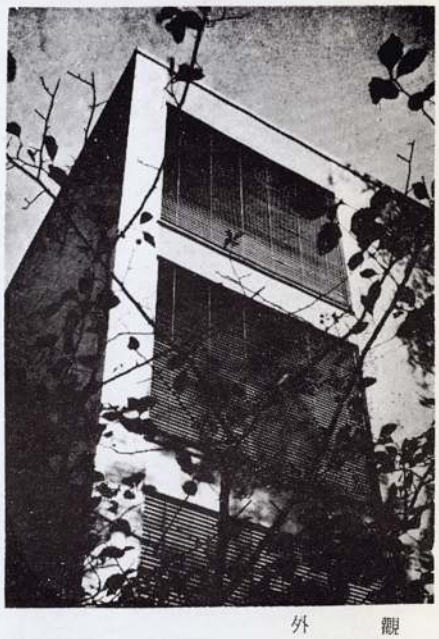
第3階・平面圖



第4階・平面圖



第1階・平面圖



外　觀

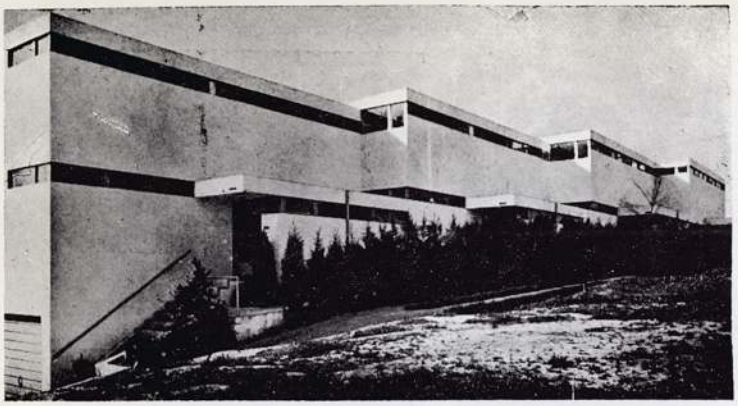
各階毎を1單位とする豪華なるアパートであるが階段室を中央に配置してゐるので，必要なる場合にはその扉を締める事に依つて前後二つに分ける事が出來る。又階下はサービス用にあてられてゐるが，これも客用に變更する事が出來る。

（平面圖說明）

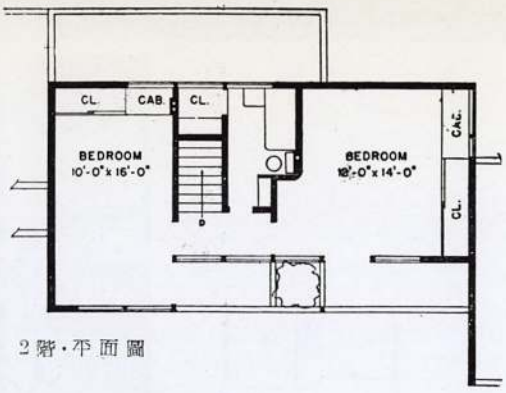
1，車庫　2，正面入口　3，暖房ボイラー室　4，洗濯室　5，燒却爐　6，作業室　7，娛樂室　8，倉庫　9，居間　10，食堂　11，厨房　12，寢室　13，書齋　14，テレス　15，正面階段　16，裏階段

(From Architectural Record May '40)

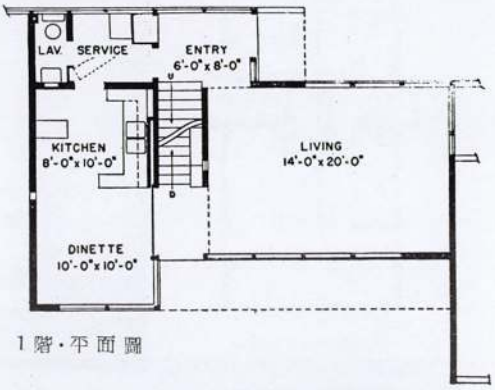
（アメリカ）　シカゴのアパート　　建築家・George Fred Keck



外　觀



2階・平面圖



1階・平面圖



外　觀（庭からみる）



居　間

敷地が然らしめたものであるが，同じプランをステップバックに配置する事によつて，寫眞にみる樣に輕快なモダンな住宅が出來上つた。この爲に採光通風換氣に利更が得られ，又，庭のプライバシイも保たれてゐるので居住者から喜ばれてゐる。

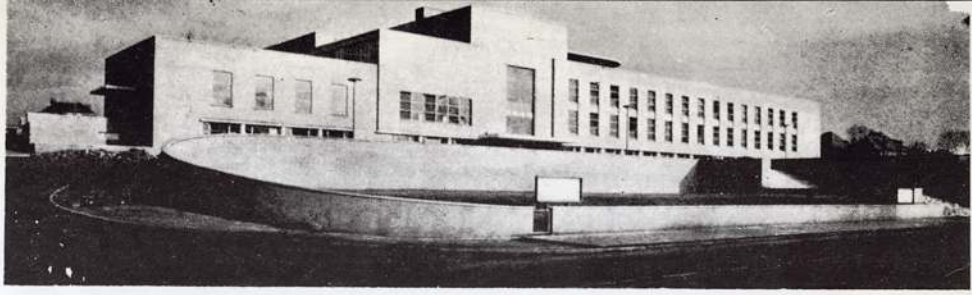
プランも簡明なもので內容を少し變へれば我が國にも向く樣なすぐれたものである。

(From Architectural Recrd 1940 May)

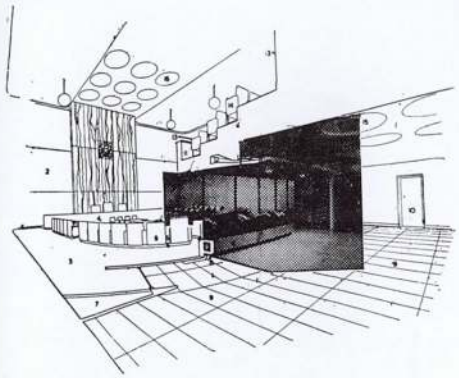
× 2　（アメリカ）　ロサンゼルスの簡易小住宅　　建築家・Gregory Ain

人口十萬の新興都市の廳舍として競技設計の當選案によつて實施されたもので市役所，圖書館，公會堂の3部分よりなる。

(Architectural Review, Feb. 1940 より)



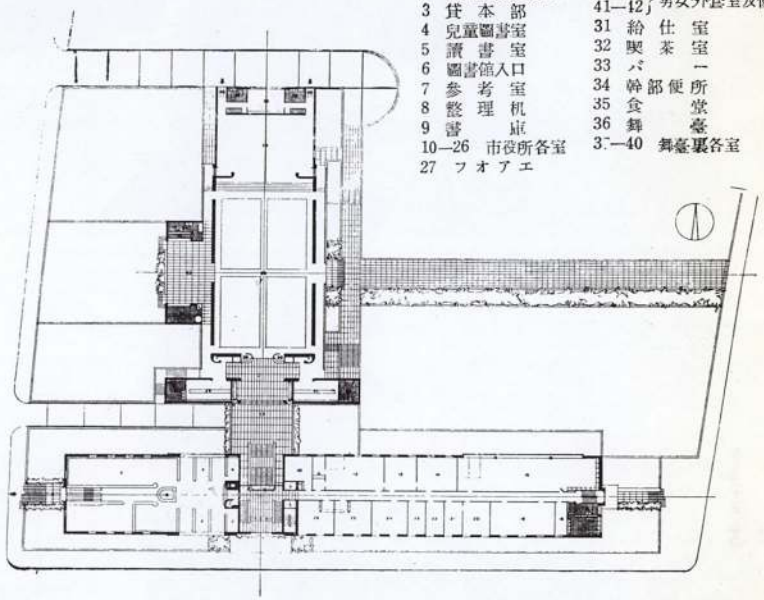
外　觀



委員會室

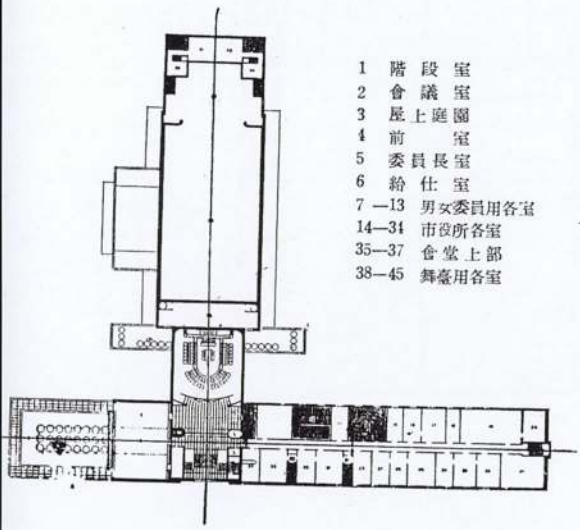
仕上表

1	大理石	2	アツシユ
3	暗褐色カーペツト	4	ウオルナツト
5	赤革張椅子	6	コロマンデル脚
7	排氣ダクト	8	銀色ブロンズグリル
9	トラバーチン	10	ウオルナツト
11	黒リノリウム	12	温氣ダクト
13	銀色ブロンズ手摺	14	桟敷椅子
15	ドームライト		



1 階 平 面 圖

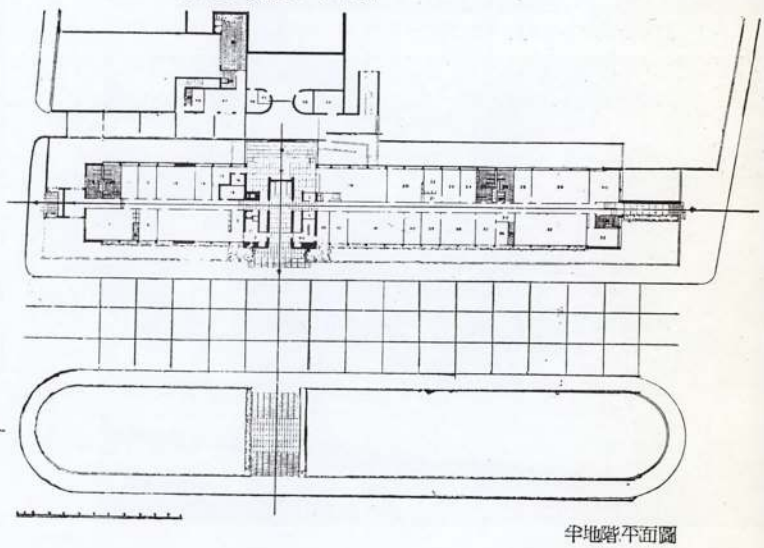
1	階段室	28	切符賣場
2	圖書館員事務室	29—30	男女外套室及便所
3	貸本部	41—42	
4	兒童圖書室	31	給仕室
5	讀書室	32	喫茶室
6	圖書館入口	33	バー
7	參考室	34	幹部便所
8	整理机	35	食堂
9	書庫	36	舞臺
10—26	市役所各室	37—40	舞臺裏各室
27	フオアエ		



2 階 平 面 圖

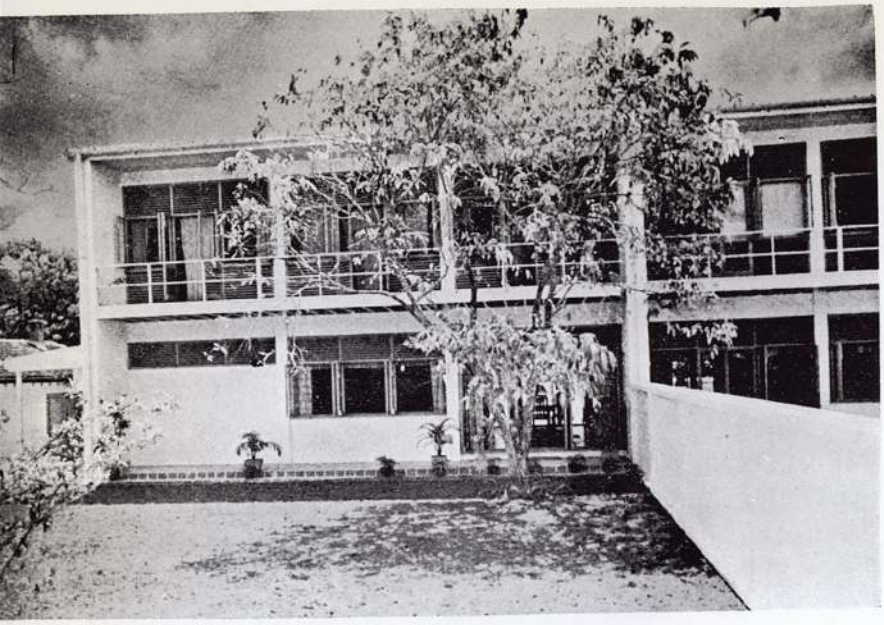
1	階段室	2	盲人室
44	委員會室公衆入口	45	整流器室
47	自動車倉庫	48	庭園用倉庫
50	幹部便所	51	警察所
53—54	電燈及スイツチ室		

1	階段室	35—37	會堂上部
2	會議室	38—45	舞臺用各室
3	屋上庭園	3—43	市役所各室
4	前室	46	蓄電池室
5	委員長室	49	運轉手便所
6	給仕室	52	車庫
7—13	男女委員用各室		
14—34	市役所各室		



半地階平面圖

(イギリス)　ウエンブレイ市廳舍　　建築家・Clifford Strange



外　觀

この住宅の建つ敷地は北側にし道路かがない關係にもよるが，暑さ嚴しい處であるから，居室を北面さして暑熱を防いでゐる。そして斷面圖に見る樣に屋根も緩勾配の流れを，段違ひにとりその間を利用して換氣を計つてゐる。尙，階上寢室の壁もガラスにして通風換氣を良好ならしめてゐる。

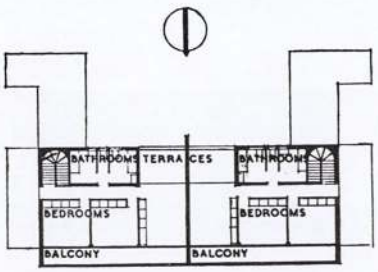
(From Architectural Review July '40)

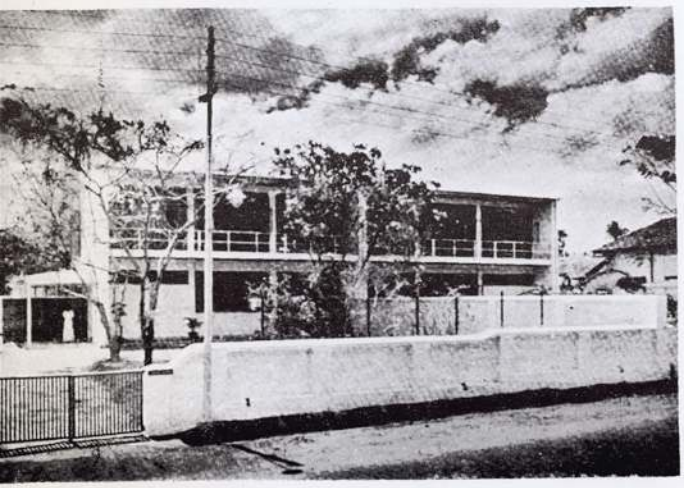


斷面圖

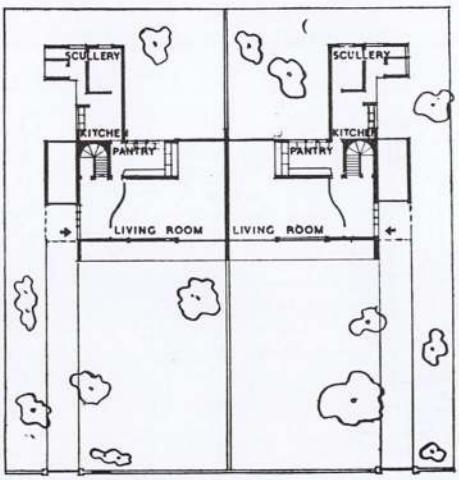


階上・寢室の窓を見上げる・壁は總てガラスにしてある。





北側・道路よりみたる外觀

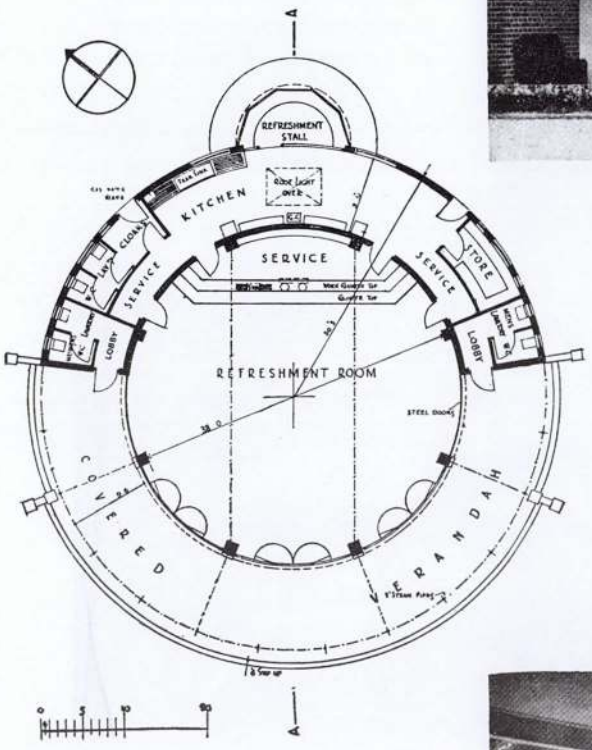


上・第2階平面圖
下・第1階平面圖

(イギリス) コロンボの2戸建住宅　　建築家・Andrew Boyd



ベランダを見る



平面圖



ベランダ

これは London の Battersea Park 湖水の近くにある喫茶店である。プランを見る様に圓形をなしてゐて，室内は直經40呎もある。湖水への眺望を得る爲に壁面の半分以上は床から天井迄の大きなガラス扉を入れてゐる，そしてその外には廣くゆつたりしたベランダーを設けてゐる。

(From Architectural Review July '40)

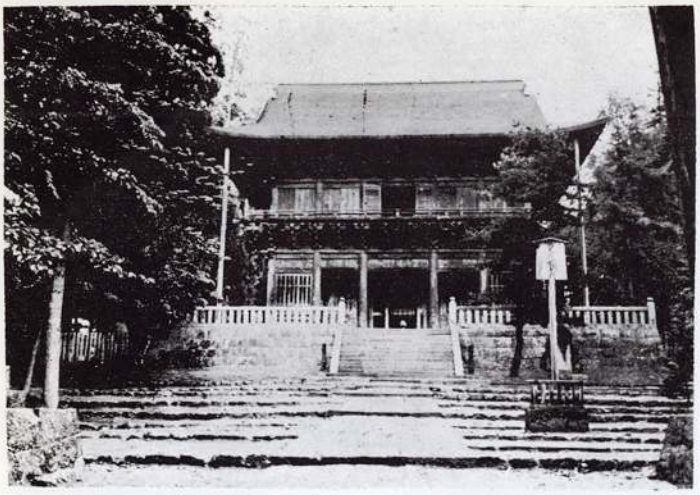


ベランダより湖水を見る

（イギリス）　Battersea Park にある　喫　茶　店　　建築家・H.A. Rowbotham　　5 x

古建築新抄 (19)

藤原義一



楼門

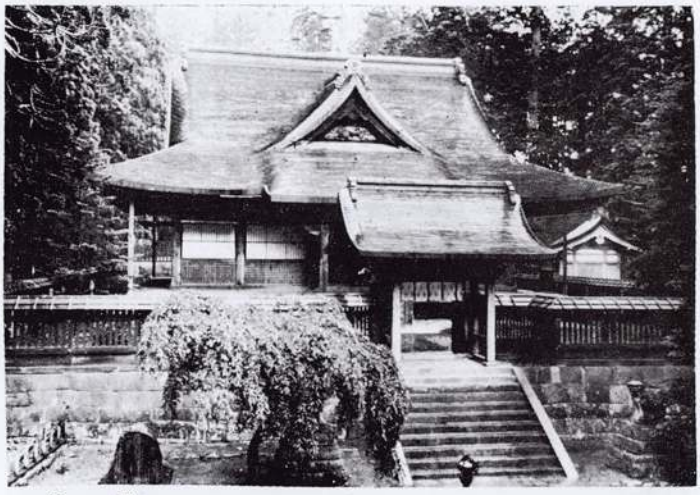
有名・無名

(其二)

北國には郭公が啼き南國には潮の香が高い。古建築にも北國には北國のあはれさがあり，南國には南國のおもむきがある。それは意匠の巧緻や装飾の豊富簡素には依らぬ別の雰圍氣から來るものである。

岩木山神社

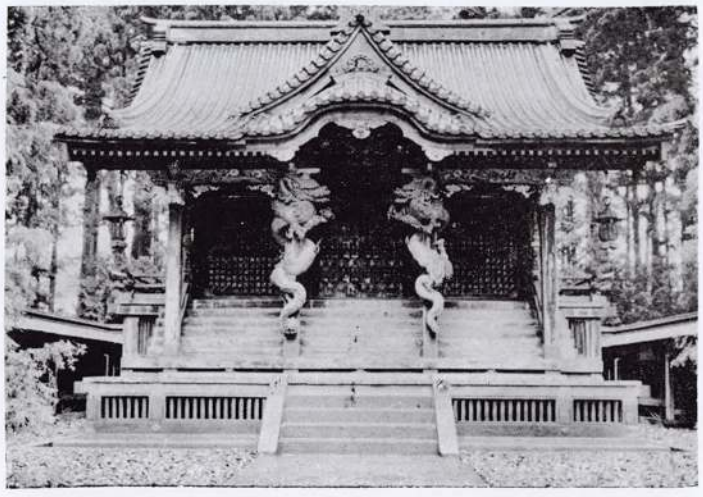
本州の北端に近い岩木山の南麓にあり顯國玉神を祀る。神域は廣く清淨で，幾つかの鳥居を入ると楼門，拜殿本殿が奥に行くほど高い位置に造られてゐる。創始が奈良時代に溯るが現在の社殿は寛永年間に營まれ，楼門と拜殿とが國寶となつてゐる。楼門には三門の形式を取り入れ而も種々獨創的な意匠を備へてゐる。



拜殿

様

拜殿は方五間，側をめぐらせた，大きな建物で，和様三斗繁樫の手法に成る。内部は前面を拜所とし，奥を一段高くし，疊を敷きその境には格子をはめ，簡素森嚴さを漂はせてゐる。

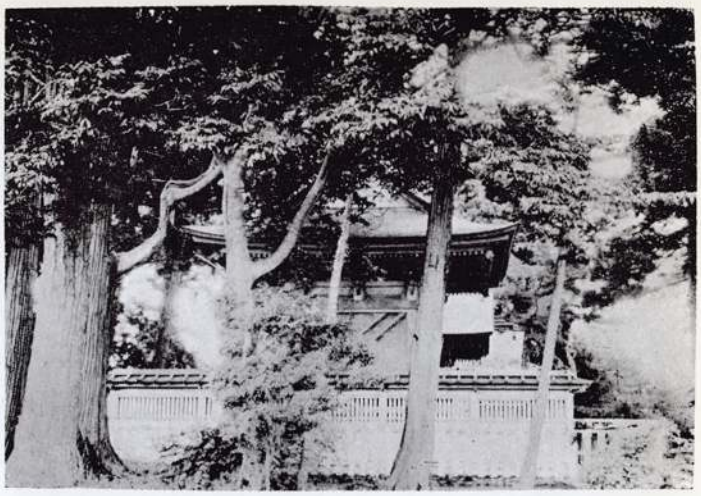


本殿

最奥の高所に建ち，拜殿楼門より建築年代は少し後れる。前面一帶に派手な彫刻装飾を行ひ，我が國最北端の古建築として大いに氣を吐いてゐる。

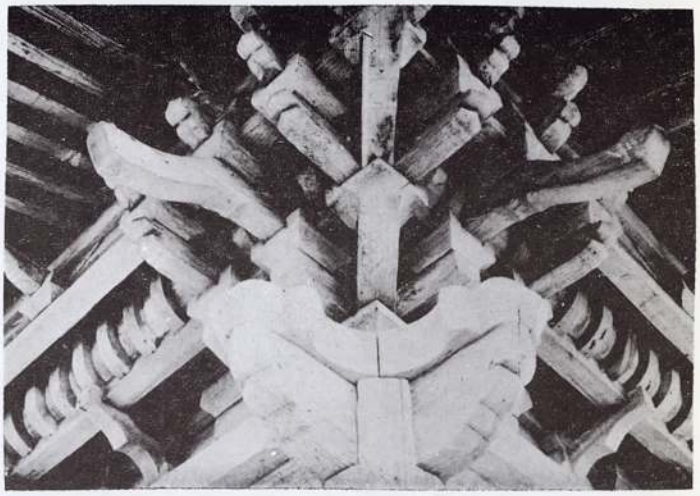
古四王神社本殿

秋田縣大曲町外の森の中にあり，阪上田村麻呂が蝦夷征伐のとき祀つた大多命を祭神としてゐる。元龜年間創ち室町の末葉に造られたといふ現在の本殿は，入母屋造の小建築で，隨所に珍奇な建築樣式を展開してゐる。



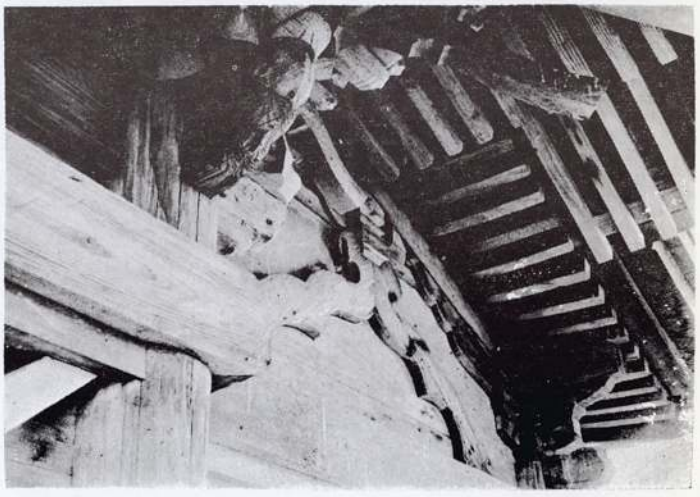
軒廻り科栱

和樣二年先に唐樣風の尾垂異樣な繰形肘木や臺輪繰等傳統的な樣式を元としつゝ新機軸を出してゐる。



側面軒廻り

特殊な龍鼻をもつ蟇股や木鼻臺輪鼻の繰形は，その形必しも上乘ではないがその自由奔放さは，この北の端の國にも桃山時代の浪のま近く迫つて來たことを物語つてゐる。



ノボ アルミナセメント

超高級 耐鹹 耐寒 耐火

六時間コンクリート

大阪窯業セメント株式會社

6 HOURS CONCRETE

1:2:4 水比 65 6時間 217㎏/㎠ 28日 410㎏/㎠

1:2:4 水比 45 6時間 300㎏/㎠ 28日 580㎏/㎠

施工6時間後
完全使用が
出來ます



作品陳列場

寧樂屋家具裝飾店

大阪市西區南堀江通一ノ三四(木綿橋電停前)

電話櫻川(64)二六六三・七九二三



郷土建築雜感

藤原義一

同じ民家でも農家、町家、漁家等によつてその形態や内容に大きな差があるが、何れも環境に順應し實用に即し、永い年月の經驗を積んで發達し、實際生活に最も都合よく出來てゐることには變りない。生活の單純な場合には家屋も單純で正直であり、見せかけといふものをあまり造らない。仕事するところと飯を食ふところ、團欒の場所と寢る場所などが極めて單純に結びついてゐる。生活が多元的になると家も多元的になり、客間や玄關などが重要視され、間取にも構造にも形式を重んじ、作意的なものが多くなつてくる。

併し客間などが重要視されて來たことは民家の發達に大きな役割を遂げたのであつて、近世民家發達の起點をここに置くことが出來るのである。

大阪附近の民家（といふよりは上方地方の民家といつた方がよいかも知れぬ）はこの意味で大いに特色を有してゐる。やはりこれは京都に近かつた關係もあり、庄屋とか鄉士とか本陣とかに當時の書院造に倣つた立派な座敷客間が造られ、床や違棚や附書院が設けられ、玄關の構へも出來る樣になつて來た。この風潮が一般に行きわたり、少し立派な家にはそれ相當の客座敷を備へる樣になつた。

昔にも精動運動があつて、一般民家の造作にきびしい制限令が敷かれ、立派な客間や床、違棚などの贅澤なものは禁止されたりした。併し結局のところそれが撰まつてしまつて今の民家の形式が出來てしまつた。

このことは近畿地方に限らず、殆ど全國的と云つてよいがこの附近に特に著しいのである。

農家を見ても町家を見ても、大低の場合は居間や勝手の部分と、この客座敷の部分とがある。

實例を擧げれば、南河内郡の吉村氏の家がこの好例で、普通農家としての部分と客座敷の部分とから成り、客座敷の方には式臺玄間も備つてゐる。他の住居の方の部分は、入口を入ると土間で、その奥は勝手となり、かまどが築かれてゐる。當家はこの地方の豪家で德川幕府の世となつてからは代官となり、又その後は大庄屋として續いて來た。現在の家は桃山の末、若くは代官となつた直前頃の建築と考へられる。當家の經歷が此種民家の出來た由來をよく說明してゐる。

兵庫縣山田村の千年家と呼ばれてゐる箱木、阪田兩家の家は、室町時代の建築で全國民家の中でも古い實例に屬するが、何れも勝手土間や居間などの純農家の平面を有し、その後江戸時代の初期の頃に居間から更に續いて客座敷が設けられて、結局吉村家と同樣の形となつた。併し客座敷としてのはつきりとした特色は吉村家には及ばない。大阪府下至るところに見る農家は大低こんな風に客座敷を備へ、他方の入口は土間となつて、勝手や居間や納戸のある純



農家としての形態を有してゐる。そして居間と座敷との間の室を玄關としたものが多い。又客間には椽側があつて、その前方に立派な庭園を造りこの部分だけは塀で圍つてゐる。

この樣に客間を重要視して、それ

に尙ほ支關を備へたりしたところは上方の民家に特に目立つ樣である。

それからもう一つ附け加へたいことは、吉村家に於ける有名な吊部屋である。あんな風に特別風變りな部屋を造つて婢僕の室にあてたのは、形態は異るが土間や馬屋の一隅などに小さな下僕部屋を造る風は方々にあり、これの特別の場合といふことが出來る。併し高いところにあんな風に部屋を造つた實例は、自分は先年飛驒の白川村で見たことがある。

御母衣（ミボロ）の少し先を山の方へ上つて行つたところの、大きな茅葺の農家で、例の大家族の家である。江戸中期の建築と思はれるが、妻の土廂の一隅を薪置場として、そこから引違戸を開けると勝手の板間に入るやうになつてゐて、その入口の上方に二疊敷に足らぬ小部屋を造つて下僕の寢床としてゐた。部屋の一方に明障子を立てて採光し、用のあるときは傍らに置いてある普通の簡單な梯子を掛けて上下する。寢どこであると同時に勝手口の用心にもなると思つた。吉村家のと同じであるが、部屋を支へるのに吊束ではなく柱を立ててゐるので吊部屋とは云へないが、それだけ形式としては原始的であると云ひ得る。寫眞はこれを示す。

汚水淨化槽

尾龜清四郎

日本一臭い小說は鬼才火野葦平が書いた。名づけて「糞尿譚」と云ふ。紫烟室一の汚ならしい話になるかどうかは知らないが題して「汚水淨化槽」と云ふ。

明けても暮れても何の因果か知らないが、これがこれがオマンマの種であつて見れば「ダイベンキ」「ションベンキ」「ジョウカソウ」は或は文學となり或は言葉となつて、机上の書類に圖面に電話の中にさては晝食時の話題にまでも（マサカね）氾濫して我々は身動きも出來ないのを如何ともする事が出來ないのである。「アライヤダ」とおつしやる御婦人や、とのがたがおありになるかも知れない。「だがねオタチアイ」

住宅、アパート、ホテル等一連の住建築に始まつて病院倶樂部、學校百貨店、商店、事務所、劇場、工場停車場等々と凡ゆる建築が必然的に備へなければならない運命にある便所をば、少しでも臭くない、きたなくないものにしようとするなれば、何としても水洗式を採用して、この汚水淨化槽の御厄介にならなければならない型式になつてゐる。大都市が採用實施しつゝある放流下水事業も着々其効果を發揮しつゝあるが、何分放流可能區域が大都市の一部に限られてゐる今日、全建築界が要求する淨化裝置の數に較ぶれば誠に微々たるものにすぎないのである。

そこで愈々我々の活躍が始まる。大熊喜邦博士鑑修の「近世便所考」によれば我國衛生工業界の大先輩である須賀藤五郎氏が日本最初の汚水淨化槽を作られたのが、明治45年だつたそうで、それから大正初年へかけて外人の多い神戸を中心に相當數の淨化槽が出來たそうだが、何等據るべき取締法がなかつたので、いつも當局の啓蒙に苦勞をされ、これではならないと種々運動をされた結果遂に大正10年6月に始めて警視廳令として取締規則が公布され兵庫縣でも翌11年5月に縣令第30號を以て水槽便所取締規則が公布されたとの事である。大阪府では昭和4年2月に府令第16號汚物處理槽取締規則が公布されてゐる。

さてこの各府縣の取締規則で以て一應淨化槽が設計施工出來る事になるのであるが、この他に公表されない內規とか云ふものがあつて、實際は我々の測り知る事の出來ない、日々成長を續けて行くこの內規によつて取締をうけるのである。仲々やつかい至極なものである。

淨化槽はその構成する腐敗槽、豫備濾過槽、沈澄槽酸化槽、消毒槽等の容量によつて、何人分の淨化槽と云つてその大さを表すのであるが、小は30人分の家庭用——普通の便溜に毛の生えた如き大さ——から大は何千人分にも及ぶプールの如きもの迄あるわけである。建築の計畫が進むと同時にその建物の種類大さ等々によつて何人分の淨化槽を設計すべきかが先づ第一の問題になるのである。

住宅、商店、事務所などは1坪半に1人の割であるとかアパート、ホテルは1室につき○人とか、料理店、待合は客席1坪につき○人とか、カフエー、喫茶店は建築の場所其他を考慮して1坪○人とか、劇場は最高收容人員を、學校は生徒數を、病院はベット數を、停車場は最高乘客數を夫々基礎にして何人とか、それはそれは、大變な事なのである。これは單にある地方廳の內規の一端を經驗によつて窺知したまでゝ、各府縣によつて夫々特異な係數特異な算出方法をもつてゐるのを常とし、これが四圍の狀勢に應じて日々成長するのである。中には建物の種類如何にかゝわらず、大便器1ケにつき○立方尺、小便器一ケにつき○立方尺と使用水量をおさへて容量を算定する處があつたり、又大便器小便器の個數と單位時間の使用回數と1日の使用延時間を考慮してやる樣なのもある。

2.3年前だつたか、ある郊外電車がそのターミナルの廣場に公衆便所を設ける事になり、淨化槽を設置すべく設計を進めた處が、この個數と回數と時間で算出する事になり、設計した處が10ケ足らず器具で以て、べらぼうな大きさになつたので、そんな事無茶苦茶や、そんなんやつたらもう元のまゝにおいて立小便さしとこ、となつた事もある。その時の係數は確か大便器の使用回數は1時間に10回で——1回の使用時間は6分になつて少々早すぎる感があるが婦人の使用を考慮してとの事である——小便器は1時間に20回、1日の使用時間は共に初發午前4時から終發翌午前1時迄の21時間であつたと記憶してゐる。

お役人のきめた事だつたら、それがたとへ如何に矛盾したものであつても理窟の通らない、ならわしのこの國では未だにガンとして淨化槽を作らしてくれぬ縣がある。東京でも大阪でもこれこの通り認可してもらつてゐますから、どうぞとでも願ひ出やうものなら、東京は東京、大阪は大阪、うちはうちぢや、作る事まかりならぬわいとそのかたくない役人根性で大見得をきられる事請合であるから、誰もそんな事は申上げませんがね。それ昔から云ふぢやないですか、泣く子と○人には勝てぬと

さて淨化槽の大さが決定し、設計見積が進捗して工事が決定すると出願と云ふ事になる。許可が下ると愈々施工となり中間檢査や竣工檢査がとゞこほりなくすんで使用認可となるのである。その間のやゝこしい事も相當なものだがこれは省略するとして、淨化槽の外部は普通コンクリートや煉瓦で以て構造されるので、施工はむしろ建築屋さんの分野になるのである。それ故に設計見積當時よくコンクリート工事を見積外として內部裝置のみを施工する樣に工事を取極めるのだが、どうかして淨化槽工事を一切施工する樣な立前で、工事が決定する——直營工事の如き——場合がある。處が現場には建築屋さんの方にちやんとコンクリート打のついでもあるし、どうしてもそちらにお願ひする方が、と云ふ事になつて、コンクリート工事をお願ひするのであるが——實際はこんな生ぬるい云ひまわしではないそうだが——それが又何とベラボウな單價のコンクリートであつたりして現場員は隨分困つた事もあつたそうである。此頃は建築界も新體制とかでもうこんな事はないそうである。

臭い話がだらだらと續いて甚だ御迷惑、この邊で淨化槽と家相の話を述べて擱筆する事にしたい。一體鬼門や裏鬼門に、便所をもつて行くのが、悪いのか淨化槽をもつて行くのが悪いのかは、家相見夫々によつて違ふのを普通とするが、家相が悪いから淨化槽をここへ持つて來てくれと云ふ樣な要求は餘りないが、1年に1度や2度は出てくる。先日も或る學校が計畫されたとき、例によつて建築計畫と同時に衛生設備の計畫も進み、何回もの設計變更の後やつと工事が決定して淨化槽の出願もし、建築も堀方が進んで行つたのである。處がこの學校の主腦部？　に大のかつぎやが居つて早速お出入の家相屋に見せた譯である。あゝ萬事休す。こゝに於て建築は根本的に設計變更となり衛生設備も必然的に玄武朱雀青龍白虎、子丑寅卯辰己……甲乙丙丁庚辛……等々とものものしい線の入つたる、いとあやしげなる線で書き上げられた建築の配置圖——○○學校新築宅相鑑定配置圖、皇昭和拾五年庚辰○月吉、且大日本宅相方位鑑定師何某印と云ふいかめしいものを御想像あれ——を示されて淨化槽はこれこれの線の內に入れるべしと衛生設備と數個の淨化槽の設計を根本的に變更するの餘儀なきに至つたのである。

夜も相當更けた神戸元町での出來事である。1人の八卦見がやれやれ今日も大分もうかつたわいと商賣道具を片付けて一寸露路へ入つて小便をしてゐる間にその日の稼ぎは勿論の事、大事な大事な商賣道具迄掻拂らわれて泣くにも笑へなんだ、と云ふ話がある。一寸手を見た丈でその人の過去がわかつたり、將來が卜せたりするものだつたら、なぜ自分の將來を見定めて、もつと早く八卦見から足を洗はないのだらうか。洗へぬ筈だよ寸前の盜難の相さへ見えないんだもの。とその學校の設備の設計を擔當した人は、つくづくと語るのであつた。

新體制に乘出したこの力强い日本だもの戰時下の人心をまどわかす事によつて貴重なる米を食つては淨化槽の厄介になつてゐる虫けら共を、製造禁止使用禁止に出る位の事は間もない事だらうと期待しながら。

（昭和15.9.1）

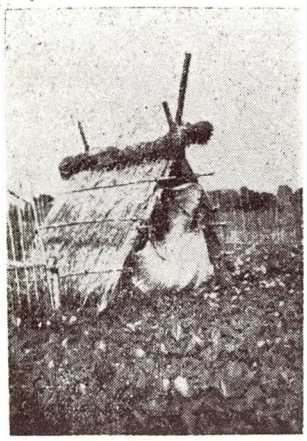
原始的番小屋に就いて

津　田　　鑿

靈峰富士を前に御殿場線、据野から下土狩附近に散在する西瓜畑の番人小屋は西瓜の熟する季節一時的必要にせまられて、年々新らしく建てらるゝものなれど、其の手法あなどりがたく吾々は決して輕く見逃せられぬ有益な小屋掛の好例である

天地根元宮造をしのばせる親しみある、やさしき姿よろしく經三寸內外の左右より交叉する2本の丸太は屋根よりのびたる部分長く中空にそびえ丸太の棟木を渡し、竹の搖に竹

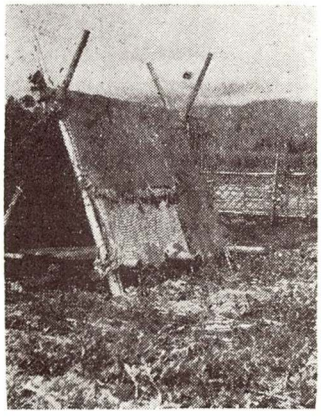
の小舞をかき藁にて、無雑作に屋根を葺き入口にはてもゞはござを釣るし大さ間口89尺以上奥行10尺12尺内外である。此の番小屋には土間其



①番小屋　裾野ー下士狩附近にあるもの

儘のものあり、或は床を1尺ほど高くして板をならべたるものあり、更に見張りに便利なるよう柱を建て床を一層高むる結果屋根は自然と地上をはなれ、ここに後世の神社住居の形式に近づく暗示をあたえるかの如く、推測し得らるゝ貴重なる工法である。

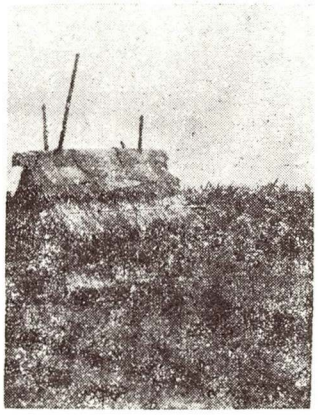
吾等の祖先が穴居より地上の生活を營むべく進みたる時、若干地面を



②番小屋
裾野ー下士狩、床を張りたるもの

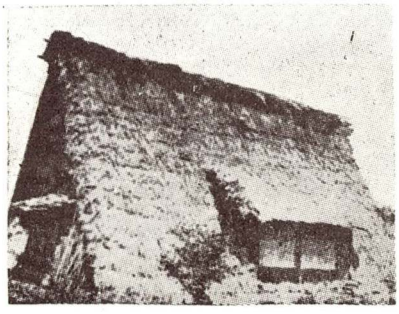
堀りさげ地上に屋根をのせたるは人類の最も幼稚なる時代の工作としてはさもあるべく、單に雨露を凌ぐに足るこの程度のものにて定めし滿足し得たることは、想像にかたらざるべく、雑誌住宅24卷12月號に記載五箇山に天地根元宮造の家を訪ねて、藤原義一氏の研究は得難き貴重なる文獻の發表にて不便の場所に困難なる調査をなされたる其の勞苦に對し深く敬意を表する次第である。

白川村に存在するものとの寫眞を25年前幸に入手比較することを得たるは大なる喜びである。



③番小屋
裾野ー下士狩、床を高くし屋根地上をはなれたもの

西瓜見張の番小屋は以上のものより遙かに簡易なる用途に使用せらるゝものなれど、原始時代の工法殆んど其儘を表現するものと思はる、尙考察すべきは現代の人の手により造られるものが、遠き祖先の遺風をうけつぎをるとせば民族のもつ傳統の力如何に強きかを説明するにあまりあるべく、即ち4木の型を建てるこ

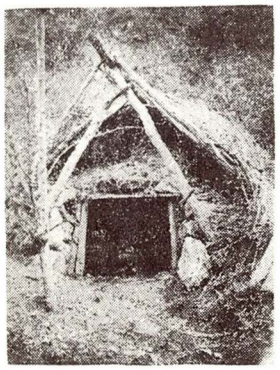


④白川村にあるもの

とを今日迄忘れざるは吾等民族の誇りであらう。

小屋掛として各地到る處に散在する炭燒小屋或は肥料小屋穀物を取り入れの小屋又は納屋海邊の漁夫の小屋掛稻のみのる頃、群雀を追ひはろう小屋又は水邊に4つで網をはろす脚部高き丸太小屋等があり、あるものは柱を延し、あるものは崖の一方を利用し或はまねき屋根をかけたる等種々なる型のものを見受けらる。

此の番小屋は現代の工作によるものなれば床あるものは板を使用しあるは原始時代とはいささか矛盾のきらいあれどいたしかたなく、大古のものを想像すれば土間其儘なりしならん、或は枯草にても敷きたるかそれが追次丸太又は木の枝にてもならべ、寒暑に耐へたるものなるべし、尤も床を高くするは雨水の浸入を防



⑤上野原にあるもの

ぎ尙且つ柱を建て更に一層床を高めるは自衛上必然の要求をみたしたるものならん。穴居より地上の生活に移る時代自然に發生する最初の工作の一方法としては、斯の如きものなりしならんかと推測し、得る實例を見て意義深く感する、此の番小屋により祖先が殘したる住に對する發展の經路を幾何なりとも學び、得しは幸である。

寫眞1　番小屋土間其儘のもの
2　番小屋床を張りたるもの
3　番小屋床を高くし屋根地上をはなれたるもの
4　白川村原始時代に近きもの
5　上野原附近原始時代に近きもの

（以上　昭和15年8月27日稿）

會報

本協會員中軍務公用者氏名

前號發表後に於ける本協會員中軍務公用者下記の通りであります（受付順）

會　　員　岩田愛吉君　横田彦行君　平井英一君

普通賛助員　龜尾萬太郎君



會　員

故 小池鍋三氏

昭和15年9月5日會員小池鍋三氏病を以て逝去せらる洵に哀悼に禁へす茲に肖照と略歷を揭げ謹んで弔意を表す

1. 氏は明治42年9月2日岐阜市鏡屋町48番地に生る
1. 昭和4年3月岐阜縣立岐阜中學校卒業
1. 同10年3月東京美術學校建築科卒業
1. 同年4月大阪市役所營繕課勤務今日に至る
1. 同11年4月本會會員に入會
1. 昭和15年9月5日逝去享年32歲



會　員

故 浦英之助氏

昭和15年9月19日會員浦英之助氏病を以て逝去せらる

氏は　年　月　日本會會員として入會爾來評議員、常務等の役員に當選本會のため盡力せられしが病のために長逝せらる。洵に哀悼に禁へす茲に肖照と略歷を揭げ謹んで弔意を表す。

1. 氏は明治6年2月26日東京府に生る
1. 明治　年　月工學院建築科卒業
1. 大阪府建築課を經て大正10年堺市土木技師に就任直ちに土木課長となる
1. 昭和7年6月退職爾來今日に至る
1. 昭和15年9月19日胃癌にて逝去享年68歲

常務會（第17回）

時　　9月2日午後6時—7時

所　　陳列場別室

出席者　理事　今林副會長

監事　井上監事、鈴木監事

常務　北垣主記、玉置主記、中西主記、三浦主記、藪中主記、岩尾主計、久保田主計、政岡編輯

議　事

1. 9月例會に關する件
2. 住宅委員會より委員委囑方要求の件
3. 建築關係法規抄纂寶價に關する件
4. 會員詮衡

報　告

1. 出征、除隊報告

常務會（第18回）

時　　9月9日午後6時—7時30分

所　　陳列場別室

出席者　理事　今林副會長

常務　北垣主記、玉置主記、中西主記、三浦主記、藪中主記、岩尾主計、桐本主計、久保田主計、政岡編輯

議　事

1. 「建築と社會」廣告揭載並に編輯方針に關する件
2. 全日本科學技術團體聯合會より申越の件

常 務 會 （第19回）

時　9月16日午後6時—8時
所　陳列場別室
出席者　理事　今林副會長
監事　井上監事
常務　北垣主記、三浦主記
岩尾主計、桐本主計
棚橋編輯、政岡編輯

議　事

1. 10月例會に關する件
2. 會員名簿問合事項に關す件
3. 都市計畫委員會より委員委囑方要求の件
4. 災害强度委員會より風壓規準寄贈方要求の件
5. 建議案提出に關する件
6. 助手採用の件
7. 會員詮衡

報　告

1. 8月分會計報告
2. 委員會幹事會經過報告
3. 出征、除隊報告

都市計畫委員會 （第11回）

時　9月3日午後6時--9時
所　委員長　井上
幹事　錦田
委員　川勝、菅、寺岡、稗田、森口

1. 委員補充委囑に關する件
2. 定例日變更に關する件

都市計畫委員會 （第12回）

時　9月18日午後6時—7時30分
所　倶樂部室
出席者　委員長　井上
委　員　川勝、菅、寺岡、稗田、松森、森口、吉田

1. 全國都市問題會議總會に關する件
2. 大阪市中心とする地方計畫案樹立の件

法制委員會 （第7回）

時　9月19日午後6時—9時
所　倶樂部室
出席者　委員長　池田
幹　事　玉置、津田
委　員　黒田、竹中、中野、平野、横見

1. 新研究問題に關する件

材料委員會 （第14回）

時　9月5日午後7時—8時30分
所　倶樂部室
出席者　委員長　松久保
委　員　青樹、薗部、道田

1. 木材市場品寸法規格案會員に周知の件
2. 同品等規格案檢討の件

敎化委員會 （第3回）

時　9月20日午後6時—7時30分
所　陳列場別室
出席者　委員長　堀口
幹　事　大下、中野
委　員　坂本、花輪、政岡、横山

1. 既設並に新設の工業學校（大學、專門學校を含む）に建築科を增、新設に關する件
2. 建築科敎員養成に關する件

災害强度委員會 （第7回）

時　9月11日午後6時—8時
所　陳列場別室
出席者　委員長　渡部
幹　事　淺野、黒田、
委　員　大野、小泉、佐々木、園部、長尾、矢田、大井、松本

1. 大阪市試驗の釘打梁實驗報告
2. 風壓規準關係方面に寄贈の件

設備委員會 （第9回）

時　9月10日午後6時30分—7時30分
所　倶樂部室
出席者　委員長　增井
委　員　岩尾

1. 大阪市水道部私設下水道、水洗便所施設に關する件
2. 工場遮蔽方法に關する件

住宅委員會 （第7回）

時　9月19日午後6時—8時15分
所
委員長　石川
幹　事　岡田、矢田
委　員　岩尾、田中、中野

1. 住宅讀本原稿整理に關する件

記念事業委員會學校分科打合會

時　8月19日午後6時—9時
所　倶樂部室
出席者　委員長　松本
主　査　池田
幹　事　北垣
委　員　篠原

1. 學校建設に關する成案の處理に關する件

陳列場幹事會 （第10回）

時　9月10日午後6時—8時
所　陳列場別室
出席者　幹事長　池田
常任幹事　小林、瀧
幹　事　野中、保園、矢田

1. 出品者勸誘に關する件
2. 材料集成に關する件

倶樂部室幹事會 （第3回）

時　9月26日午後6時—7時
所　朝日ビル倶樂部
出席者　幹事長　鈴木
常任幹事　高坂、三浦
幹　事　高松、西澤、村井

1. 秋季大會に關する件

都市武裝促進幹事會 （第6回）

時　9月5日午後6時—8時20分
所　陳列場別室
出席者　幹事長　池田
常任幹事　宮田、吉田
幹　事　竹内、塚本、内藤、中西

1. 防空、防火講演會開催の件
1. 防火改修其他の建議に關する件

都市武裝促進幹事會 （第8回）

時　9月16日午後5時30分—8時
所　倶樂部室
出席者　幹事長　池田
常任幹事　井上、吉田
幹　事　淺野、清水、瀧、竹内、棚橋、塚本、村野

1. 建議案草案審議に關する件

都市武裝促進幹事會 （第9回）

時　9月26日午後6時—8時30分

所　　陳列場別室
出席者　幹事長　池田
　　常任幹事　井上
　　幹　事　竹内、棚橋、塚本、松井、山口

1. 建議案成案完成につき建議の件

見學會（會勢幹事會主催）

時　　9月14日午後2時—4時
所　　島津マネキン工場及東寶、日活、新興各スタヂオ
出席者　明石常三郎氏外60名

1. 午後2時一同島津マネキン工場に集合食堂にて茶菓の接待を受け休憩
1. 同2時30分同社支配人より工場の概略につき説明あり、夫より3班に別れて工場を隈なく見學す。
1. 午後3時松本幹事長一同を代表して謝辭を述べ夫れより3班に別れて同所を辭し次の見學場所たる東寶、日活、新興各スタヂオに向ふ
1. 各所とも約1時間に亘り撮影實況其他を見學紀念撮影等をなして午後4時過ぎ盛會裡に有益なる小半日を愉快に終了したり。

見學會（會勢幹事會主催）

時　　9月21日午後1時30分—4時30分
所　　大日本紡績貝塚工場
出席者　井上由幸氏外38名

1. 午後2時一同集合同所圖書室に於て茶菓の饗應を受けつゝ休憩
1. 同2時30分本社紡織課長吉村卓爾氏及工場長松村亮太郎氏兩氏より夫れ夫れ會社の概況、本工場建設の由來、現在の狀態等詳細なる說明あり、次で兩氏の案內により作業場に於ける原料より製品に至る迄の工程及食堂、講堂、寄宿舍、學塾等具に見學紡績に關する知識と工場、機械、宿舍、庭園等の整備等々稗益する處不尠
1. 午後4時松本幹事長より一同を代表して謝辭を述べ解散す

入會者

會員

安孫子三雄君　普通贊助員ヨリ轉格
小畑　純一君　西淀川區高見町1ノ2（不動建築株式會社）
赤木　滿君　西成區新開通1ノ14（株式會社大丸大阪店）
近藤　岩夫君　普通贊助員より轉落
椋原　正則君　横濱市中區本郷町綠ケ丘3ノ148（森山松之助建築事務所）
佐々木幸太郎君　明石市大藏町7ノ3.450（株式會社大林組）
谷口　稔君　西成區粉濱西ノ町3ノ22（大阪師團經理部工務科）
玉置　豐君　南區日本橋4ノ56（同）
都藤次三郎君　神戸市灘區住田商公舍24號（兵庫縣營繕課）
鳥居　正男君　普通贊助員より轉格
堂園　廣二君　普通贊助員より轉格
中村　義雄君　府下泉南郡淡輪村4453（日本電建株式會社）
長尾　藤市君　東成區片江町104墨野三郎方（大阪師團經理部工務科）
鷲井　清子君　港區九條南通2ノ174（大阪府女子專門學校）
宇賀　一郎君　兵庫縣武庫郡鳴尾村西ノ口1（自營）
宇都宮隆夫君　京都市左京區吉田町京大內（京都帝國大學工學部建築學敎室）
平賀　滋君　住吉區平野元町7ノ6（自營）
藤本　阡夫君　西區北堀江通6ノ19（大阪市役所建築部第1建築課）

地方會員

水谷　英男君　滿洲國通代省通代街就泉區政府代用官舍15號（滿洲國々務院建築局兼通代省分舍）
森　定夫君　大連市惠比須町37（滿洲生活必需品會社營繕需品課）

特別贊助員

中島　政夫君　南區堀江上通3ノ42（旭暗幕株式會社大阪支店）
合田　勝一君　東區横堀4ノ50（株式會社滿光社代表取締役）
中川　辰藏君　東淀川區濱町51（諸工事請負）
山本　正義君　上海閘北花園街123小川方（上海雄川組）

退會者

會員

上田泰三君、石橋光雄君、山本一巳君、井上正志君、三河武雄君、木村精一君

特別贊助員

入江　千壽君

普通贊助員

三村久和君、塘崎仲太郎君、中村松男君、堀春市君、森田常一郎君

會員

轉居・轉勤

會員

橋本　乾一君　天王寺區勝山通1ノ225
的場　浩君　住吉區山阪町2ノ57
森　晃君　旭區新森小路南1ノ121
宮脇　勝美君　廣島縣佐伯郡五日市町吉見園3.083
大澤　一郎君　小倉市栄園場姪子町25
西島源次郎君　東淀川區相川北通1ノ6ノ1

藤原　義一君　京都市右京區下鴨東梅ノ木町31
中村　篤君　神戸市葺合區上筒井通8ノ11
稲川　春雄君　岡山縣邑久郡牛窓町綾浦　石原文吉方
吉田　信武君　住吉區阿部野筋二丁目金塚官舍乙1號
中村　武雄君　東京市小石川區富坂町2ノ1ノ12
草野　正男君　八幡市黒崎竹中工務店出張所内
砂　尚一君　横濱市磯子區森町543
竹花　末春君　住吉區山阪町4ノ55
前川　敬藏君　東京市葛飾區龜有町3ノ1.061
布袋　國雄君　和歌山市北鳴中ノ町82
中川茂一郎君　神奈川縣愛甲郡中津村陸軍航本部相模建築工場内
山根正次郎君　東區北濱5ノ13 長谷部竹腰建築事務所内
石川禎一郎君　天王寺 區伶人町103 木業社内
三藤　清三君　旭區南島町150
古川　又一君　山口縣熊毛郡周南町光井淺田政吉方
西野　正義君　北區中之島三朝日ビル竹中工務店内
高原健二郎君　京都府相樂郡川西村北稻八間京都師團經理部出張所内
高橋　德松君　株式會社山田工務店
鈴木　孫市君　大阪市役所監査部第二檢査課建築檢査係
内藤　亮一君　兵庫縣都市計畫課
森　晃君　旭區新森小路南1ノ121
木野山照雄君　旭區北清水町1.118
曾我部壽男君　住吉區 田邊東ノ町5ノ7玄原方
竹花　末春君　住吉區山阪區4ノ55
小林政一郎君　住吉區山阪町4ノ27
宇井八太郎君　東成區猪飼野西3ノ31
關喜　久男君　名古屋市昭和通綠町1ノ20(大林組名古屋支店)
佐竹　義雄君　福岡市濱之町37石蔵德太郎方

地方會員

五十嵐芳雄君　名古屋市昭和區紅梅町1ノ14
岡本　義男君　北京市東安門東河沿10號一郡組北京支店内
小山　政一君　新居濱市新須賀住友アルミ株式會社清水組出張所内
小野田松夫君　池田市尋鉢
仲田　孝雄君　靜岡縣志太郡青島町前島65
青木　昌一君　兵庫縣加古郡荒井村
西道口武雄君　新京特別市滿洲興業銀行庶務課營繕係内
吉原憲一郎君　北京市外二區和平門前大安澗營12號太平莊内
實崎　清君　靜岡市大岩宮下町20
山上　正吉君　東京市澁谷區向山町103
齋藤　小司君　京城府光代門通1景福宮門官舍2號森田方(朝鮮總督府企畫部第二課)
谷川勝次郎君　奉天市大和區葵町70
松島　省門君　大牟田市上官町1ノ32ノ3
藤重士希雄君　滿洲國北安省北安後宮部隊經理部工務科附
橋本　堅治君　德島市前川渡邊町
岡本　宮行君　神戸市灘區常盤木町5(大阪市役所建築部第一建築課設計係)

特別賛助員

瀨尾　永治君　北京北新橋王大人胡月24號三奥組北京營業所内
佐藤　正好君　府下中河内郡柏原町大字市村104ノ2
椎原　兵市君　吹田市片山旭ケ丘1.204

普通賛助員

南　欽三君　住吉區阪南町中4ノ8
龜尾万太郎君　住吉區西今川町5ノ25龜尾清一方
中鳴　良輝君　廣島縣佐伯郡嚴島町中江岡田爲治郎方
吉林　喜好君　住吉區 田邊東ノ町7ノ33
福田　峯雄君　東淀川區 新高北通2ノ3
上野　達郎君　東京市杉並區 荻窪1ノ162
村谷　定君　府下中河内郡南高安村字黒谷832松下周造方
直江　弘君　京城府大島町32ノ52號山口八重方
馬庭　省吾君　新京特別市大同大街205滿洲房業株式會社建築課内
二宮　譲君　府下中河内郡盾津村本店吉田光太郎方
井上　政光君　奈良縣生駒郡安堵村字安堵626井上平太郎方

改姓名届

會　員

高橋　縣山君　(舊名良雄)昭和15年8月14日届出

地方會員

青木　巖君　(舊姓宮崎)昭和15年8月19日届出

死亡届

會　員

浦　英之助君　昭和15年9月19日逝去
小池　鍋三君　同15年9月5日同

普通賛助員

高岡　逸平君　昭和15年5月逝去
(謹んで哀悼の意を表す)

編輯後記

☆日獨伊の三國同盟と、新體制の興奮の眞只中で大阪を中心とした鄕土建築を主に扱つた本號が出る事になつた。古きを溫ねて新しい飛躍への準備にも役立てば望外の幸。座談會に、御寄稿に、本誌を貴重な記事で飾つて下さつた各位に對し、厚く御禮を申し上げます。

☆國運を賭して戰つてゐる獨逸が、我國の醫學者を聘してその道に對する眞劍な研究の手を一瞬たりとも休めない。各部署は戰前に劣らぬ活潑さで着々とそのプログラムを進めてゐる。戰時中にも拘らず2,000名の多數にのぼる醫學者が、ウイーンに集まつて盛大な小兒科學會が開催され、第二の國民の體位向上に對し精進を續けてゐる。大國民としてのこの襟度、目先の事に捉はれない周到なる準備等、我等も亦斯くありたい。

☆用紙節約の目的から、會告にもある通り本月號より廣告の頁を激減する事になつた。色々な事に支障を來してゐる事は勿論である。然し今後の氣魄はまだまだこの程度の生ま優しい事位ではないらしい。如何なる事態に遭遇しても平靜に大勢に順應し善處して行く心構へが必要である。

☆雜誌が毎號薄くなる一方である。しかし會員諸彦を初め各方面からの御投稿は益々盛である。色々な制約で量を抑へられると、勢ひ質でそれを補はなければならない。どうせ薄つぺらなものしか出せないのだからと、變な諦めから原稿が減する樣な事があつては一大事である。各位の倍舊の御支援を切に願ふ次第である。（政岡記）

建築と社會

第23輯　第10號

毎月1回1日發行　定價（送）1冊　50錢（郵稅3錢）　12冊　6圓（〃　36錢）

昭和15年10月5日印刷　昭和15年10月10日發行

發行・編輯　戸川弘
印刷人　大阪市北區朝日ビル日本建築協會內

印刷所　プラトン印刷社　大阪市西區江戸堀南通2丁目13番地

發行所　社團法人　日本建築協會　大阪市北區中之島3ノ3　朝日ビル　電話長北濱(23)4501番(9)　振替口座大阪39975番

特約販賣店　柳々堂書店　大阪市西區京町堀羽子板橋西　電話土佐堀2440番　振替口座大阪2084番

禁轉載

本號に揭載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

廣告揭載料金

グラビヤ（第1頁）	1頁	1回	55,00
グラビヤ（第2頁）	1頁	1回	45,00
普通（後附第1頁）	1頁	1回	20,00
普通（後附第2頁）	1頁	1回	25,00
記事中	¼頁	1回	20,00
アート（中揷）	½頁	1回	20,00
表紙2	1頁	1回	60,00
表紙3	1頁	1回	45,00
表紙4	1頁	1回	80,00

廣告揭載御申込は本會へ直接願ひます。
本誌購讀御注文はすべて前金で本會直接又は特約店へ、振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます。郵券代用は一割增、代金引換はお斷り致します。

●第二三集 第一〇号 掲載広告一覧（掲載順）

村田商会
大野製作所
河田工業所
南満建材工業所
旭暗幕
関城化学工業
東洋リノリューム